災厄の種と能天気な転生者

青葉青

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
災厄の種と能天気な転生者

【Ｎコード】
Ｎ７７８６Ｖ

【作者名】
青葉青

【あらすじ】
ふつうの社会人が見知らぬ世界へ転生を果たす。
驚きながらも単純思考で第二の生を謳歌しようとしたが、その矢先、唐突に道は閉ざされた。
それでも平穏に、楽しくをモットーとした男は、放り込まれた魔導学院で癖のある者たちに出会い、その道を変えてゆく。

一一
精霊に愛され、絶大な力を保有しながらもそれを隠し、使おうとし

ない転生者。
忘れ去られた知識を語り、謎めいた力を持つ少年。
家を再興させるために期待をかけられながら、果たせないかもしれない事に怯える青年。
課せられた義務を言われる前に自覚し、己を戒め、国の事だけを考える皇女。
――

思惑と思惑は交錯し、物語は始まる。

第一話　移ろい（前書き）

直接表現ではないので大丈夫と信じて。

別に書いているものがありますが、そちらが停止するということはありません。

箸休め程度に書いています。

第一話　移ろい

暖かい。

最初に思ったはのはそれだった。

ゆったりとした気持ちで、何も焦らなくても良くて、何も気にしなくて良くて。微睡に囚われていればいいのだと教えられる必要もなく感じた。それで良いのだと。

……あれ？　良くなくない？　今日って打ち合わせだったよね？

気が付いて目を開けようとして驚く俺。

目……目がぁ～～

目が開かなかった。それどころか声すら出ず、身体も動かない。

え!?　何これ!?　どういう状況!!?　金縛り!?　金縛りなの!?　誰か説明してーーー!!

じたばたもがこうとすれどもちっとも身体は言う事を聞かない、それどころか違和感ばかりが返ってきて変な汗が流れた。

『あ……動いたわ……』

声が聞こえて、ピタリと動きを止める。やけにくぐもって聴こえたが、確かに女の声だった。

うっそ……俺。連れ込んじゃってる？　なんてゆーか後々やっば

い事になるんじゃねー？

やばいやばいやばいやばいと焦るが、身体を動かす手ごたえはいつもと違って、余計に焦って狼狽える。

『芽生えたな』

今度は男の声が聞こえた。

うそー！　何か男いますー！　複数名でやっちゃったのか俺！？
やっべまじ覚えてねー！　覚えとけよ俺！
今時そんな経験特殊稼業の人じゃなきゃ出来ないって！
まじもったいない！　本当もったいない！　流石日本人の心もったいない！

最後は意味不明の思いを迸りつつ依然としてもがくもがくもがく。
でも動けない。

なんなのこれ……

『ねぇあなた、本当にやるの……？』
『……すまない』

夫婦！？　夫婦なのお宅ら！？　なに人の家でやっちゃってんのよ！！
あ。俺もまざったのか？　よく許したなー。俺だったら有り得ん。
嫁は俺だけのものだ。

『君は……この子を』
『はい』

子供？　こどもがいんの？　それはノーですよ？　やっちゃだめですよ？　情操教育って言葉しってますかー？
夫婦だけならともかく他人の俺がいちゃだめでしょー。心にでっかい風穴あいちゃいますよー。

何とか動けないか、目が開けられないかと奮闘しながらも声に突っ込みを入れてみる。
でも声が出てないので届かない。

ってゆーかさー。あんたら変にもがいてる俺をガン無視なの？
さっきから二人だけの世界って気配がビシバシ伝わってくるんですけどー。若干俺居心地悪いんですけどー。

まじで勘弁してくれと疲れを滲ませていると、実際今まで感じたこともないような疲労に見舞われて眠気に襲われた。

……あー……なんか、すっげー……ねむ……っちゃだめだから！！
はい！　しっかりして俺！！　眠っちゃだめだから俺！！　今日打ち合わせが朝からあるんだから！！！　お客さんとだから！！！

根性フル稼働させて睡魔と対峙する。

『あなた……』
『……あぁ……大丈夫。さぁ行って』

あぁ……男だけ残るとかって……くっそ本当になんなんだよこの状況は！
俺はもやしだぞ！　旦那とガチンコ勝負出来るか！　しかも地味

に動けないという縛りつきで！
死ねと？　俺に死ねと言っているのか？

『大丈夫。大丈夫よ。あなたは私が守るから』

？　奥さんが何で残って？　どゆこと？？

男ではなく、女の声がした。

『お母さんが必ず守るから』

うちの母は若くありません。五十手前です。奥さんみたいに艶っぽい声してません。してたら怖いです。
まぁ落ち着こうか俺。落ち着け俺。どーせ俺に言ってるわけじゃないんだ。

『お父さんの分も……守るから』

な……んだよ……もー……本当に。何で泣いて……

再び強烈な睡魔に襲われ、抗う間もなく意識は闇へと呑まれていった。

ゆらゆらゆらゆら。

揺られ揺られ揺り揺られ。
ぬるま湯に浸かっているような心地よい微睡に身を任す。
ゆったりとした気持ちで、何も焦らなくても良くて、何も気にしなくて良くて。
微睡に囚われていればいいのだと教えられる必要もなく感じた。それで良いのだと。

よくねーよ。同じ事二回目って俺は学習能力がないのか？

我に返り、己につっこむ。

さぁて？　これは確実に遅刻コースで？　闇魔の怒りが俺にぶつけられると。
……このまま寝てたいなー

現実逃避は良くない。すぐに思考の軌道修正を図ろう。
表層思考は遅刻という現実に打ちひしがれているが、本能の部分がこのままじゃまずいと告げていた。
本能じゃなくても身体が動かないという時点で普通に拙いが。

ぶっちゃけ、これ異常だよなぁ。
目が空かないわ身体が動かないわ。どうなってんだよ俺。
なんかぬっくいから風邪ひかなくてすみそー……俺まっぱ？

……

まっぱだな。たぶんまっぱ。服の感触ねーもん。
あれから……ってーか記憶ねーからどれからかわっかんねーけど
……少なくとも昨日は普通に戦闘服（スーツ）のまま寝たよな。力尽きて。

でも待てよ？　間違いなく俺は体力が無かった筈だ。それなのに特殊職業の方々と同じ経験が出来た、と？
無理じゃね？　俺もやし。　無理じゃね？　三大欲求の中で睡眠欲のみ極端に高いこの俺が。無理だろ。

あー良かった。まじで夫婦とやったんかと。いやないって。俺ないって。さすがにないって。ないない。

はぁーと溜息をつきたいが。実際には僅かに口が開いて息も出ない。

そうなんだよなぁ……息も出ないんだよなぁ。息出ないって死ぬよな？　全然苦しくないけど。
息してる感じも無いしなぁ……何で平気なのか。

うーんと頑張って身体を動かそうとすると、緩慢ながら手と足が少し突き出せた――気がした。

ぽん

ん？

ぽん

やはり柔らかい感触があたり、なんだろうと頑張ってもう一度動かす。

足に柔らかい感触があたり、なんだろうと頑張ってもう一度動かす。

ぽん

やはり柔らかい感触だった。しかも包まれている暖かさと全く同じ感じ。

……えぇっとぉー……

ゆらゆら揺れてる。暖かい。目開かない。身体がうまく動かない。
でも息出せなくても平気。そういえば腹減らない。

これだけ状況が整えられて、導き出せる答えっていうとぉー……

第二話　気づいてしまった

俺は拙い事に気が付いてしまった。

これは、あれだ。ほら、その、それ。それだよ。

認めてしまうのが怖くて曖昧表現で緩和を試みる。

……むりだー……俺むりだー……耐えられねー……

緩和意味なし。

何に耐えると言えば、出産。

現状俺は胎児になっているとしか思えない。この俺でも恐ろしい程の眠気と絶えず聞こえる鼓動の音。そしてぬるま湯につかっているような暖かさ。あと腹が減らない。

出産は母親が大変だというのが世間一般の認識。それは俺も否定しない。

否定しないが、それは出産時の記憶が綺麗に無いから言える事だろうと俺は考える。

……頭蓋骨変形させながら出てくるって……どんなホラーだよチクショー！！

帝王切開を望む！　ぜひ帝王切開！！　なにより帝王切開！！！

どうしたらいいんだ！？　逆子なら帝王切開行なのか！？　それともへその緒を首に絡ませたらいいのか！？

と、そこまで考えて俺は気が付いてしまった。

帝王切開出来ない環境とか……ないよね？

もし、仮に、万が一、出来ない環境で逆子だったりへその緒首に絡ませてたりしていた場合は、間違いなく母子ともに大変な思いをし、最悪死ぬ。

ノーーーーー！！！　死ぬだめ！　死ぬよくない！　てか苦しいの却下！

どうしたらいいの俺！　どうしたらいいんですか俺！　どうしたらいいのでしょうか俺！

返答なし。

うぅ……せめて双子とかだったら『よし、お前先行け』とかいって蹴るなりして先行かせて、その後比較的楽して出るとかって手も使えたかもしれないのに……

残念ながら、胎内には他に誰もいない。

ぶっつけ本番で特攻をかけるより他ないという、まるで太古の昔より定められてきた運命のような答えが待ち構えている。

あそーだ。自我があるから怖いんだよ。消せばいいじゃん。

……

使うはずだった資料の出来具合から始まって、関わっていた案件の進捗具合に客との合意の確認、作業依頼を作っていたはいいが出していない事を思い出し、ぐるぐるぐるぐる廻っていった。

俺は仕事人間じゃない俺は仕事人間じゃない俺は仕事人間じゃない

心頭滅却火もまた涼しの偽変換のごとく唱えるが、それを唱えている事自体が俺という自我を認識させている事に三十回程唱えたところで気付いた。

第三話　待ったなし

待ってください。

待ってください。

待ってください。

人間何事にも心の準備というものが必要なんです。

特に俺のように繊細で極小の精神の持ち主にはそれ相応の対応マニュアルというものがありまして。

それにのっとって対応して頂かなければ後々にわたって傷やら禍根やら他人が聞けば喜びそうなものですが本人にとっては本当に一大事の事態になるのです。

つまりどういう事かと申しますと、

いきなり収縮開始しないでーーーーーーーーーー！！！！！

あ！　ちょ！？　これどうなんの！？　俺どうしたらいいの！？
俺何週目！？　ちゃんと十月十日経ってるよね！？
めちゃくちゃ意識はっきりしてるからちゃんと育ってるよね！？
医者いるよね！？　何で外の音が聞こえねーんだよ！！

外の音が聞こえない理由は俺が焦り過ぎて気付いてないだけ。と、後々解釈。

そもそも何で俺が胎児なんだよ！　逆行しすぎだろ！！
あ～子供にもどりてー……って、思ったけど、これは戻り過ぎだろ！！！

あっ！　ちょちょっと待ってお母様！　そんな追い出そうなんてひどいわ！！　もうちょい息子の心の準備というものを！！！

動揺も焦りも全く無視され、たぶん子宮だろうと思われるが、それが狭まって『ほらほら早くいきなさーい』と追い立てる。
もはや気分は断崖絶壁でバンジーさせられる直前。後ろからどんどん押されてる感じだ。

……っやりゃーいーんだろーが。やりゃー……

覚悟を決めて、突っ張っていた手を身体に引いて周りの動きに身を任す。

グッと頭に圧力が掛かり、とんでもトンネルをゆっくりと進んで

いく。

い……痛いっつーか、圧力が……圧力が……顔面が……

頭が出たと思った瞬間、つるりと身体も押し出され、なんかすごい勢いで顔やら身体やらふかれた。

「あぎゃ！　あぎゃー！　あぎゃー！」

やっぱり出た瞬間は『おぎゃー』だろ。と、それだけは用意していたのだが、誰の手だか知らない神速垢すりもどきにビビり過ぎてそんな考えもふっとび、気が付いたら変な絶叫を出していた。

そういや息出来た……息の仕方忘れてたらどうしようかと……

本当のぬるま湯で身体を洗われ、ふわふわとした布にくるまれているところで俺はボンヤリとしてきた。

声をあげ続けるのも大変で、呼吸が落ち着いたらもう後はどうでも良い気分で、眠いとか疲れたとか思う間もなくブラックアウト。

元気な産声をあげてくれた我が子に安堵が満ちる。

乳母に取り上げてもらった子を胸に抱き、その小さな手にそっと指を添わせると、ちいさなちいさな力でギュと握ってくれた。

どうしようもなく愛おしくて、何に置いてもこの子だけは守ろうと誓う。

あの人に抱いてもらう事は出来ないけれど、その分も私が一杯抱いて愛そうと誓う。

まだ薄い髪は私と同じ青褐色。目元はあの人そっくり。鼻は私だろうか。口はどちらだろう。瞳はあの人と同じだろうか。

これからどんどん大きくなって、いつか私の背も超えて、あなたは幸せになるの。絶対に。

第四話　ふへへへ（前書き）

早速のお気に入り登録有難うございます。
ちょっと早くてビビッてます。

こちらの作品は基本コメディ路線でいく予定です。
主人公の性格がまぁ、そうなので。

尚、断っておきますが、主人公＝作者ではありません。
……若干、ごく若干、同じ匂いを発してるかもしれませんが、違います。

第四話　ふへへへ

俺は今悩んでいる。
ひっじょーに悩んでいる。
人生の中で最も悩んでいると言って間違いない。
ただ今の俺の生存日数（人生）、三日。

どーしよ？　どーしたらいい？

むしろどうしようもないってのが答えだとは分かっている。いくら俺でも分かっている。
色々な意味でどうしようもないと。生活の全てを人に頼らなければ生きていけない身体なのだから。

まぁ生活面は赤子だから面倒見てもらってもいっか～って事でいいんだけどねー
問題は『俺』はどうなった？　ってとこだよな。

なんだか生まれ変わってしまったらしいので、濃厚なのは過労死だ。病気なんてしてないのでそれしか思いつかない。

――都内に住む男性（二十七歳会社員）が倒れているのを男性の同僚が発見。病院に搬送されたが死亡が確認され死後二日は経過しているとみられた。死因は過労によるものと思われ――

居た堪れない。居た堪れないよ……親に顔向け出来ないよ……息子過労死って、やりきれんだろ。

……やりきれないと思ってるよね？　おかん？　思ってるよね！？

まぁ今更、ここに生まれ出てしまってから思い悩んでも仕方がない。なるようになれというものだ。

おかんにはおかんの人生を面白おかしく生きて頂くとして、それを――誰が祈らなくても突き進んでいきそうだが――祈っておこう。出来るのはその程度だ。

あ。人生最大の悩みが終わってしまった。

どーしよ。暇になっちゃったよ。

「――――――」

うんうん考えているところに、青っぽい髪した今生のおかんが、にこにこしながら何事か言って俺をだっこした。

顔立ちははっきり言ってよくわからん。なんか度がきつい眼鏡をかけられているようで色ぐらいしか認識出来ないのだ。

それでも青っぽいという事は今時の娘っこなのだろう。

なんで赤子はこうも視力が悪いんだ……これじゃあせっかくの若い母親を堪能出来ないじゃないか。

他で堪能してるといえばそうだが……いや、諦めるな俺。根性さえ出せば視力なんて！

……み……みえ……みえなーい。

あぁ俺馬鹿？　今ふと我に返っちゃったよ。何してんだよ俺。赤子が考える事じゃねーよ。こえーよこんな赤子。

「――――」

よくは見えないくせに、にこにこしているのだけは分かる。これは親子の絆がなせる業なのだろうか。

暇なので一つ考えてみる事にしてみるとみせかけて、考えても答えが出ないのが分かっているので止めにする俺。

それよりも、耳が悪いせいか何と言っているのか聞き取れないのがもどかしい。

胎内に居たころには聞こえたのだが、外に出たら聞こえないという摩訶不思議な状態になってしまっているのだが、これも成長過程でうまく調整されていくだろうと結論が出て思考が終わる。

……また暇だよ。もうちょっと悩もうよ俺。

きっと『早く大きくなるのよー』とか、『ご機嫌ねー』とか『どうしたのー』とか言っているのだろう。

全く理解できないが暇なので、『あー』『うゅー』『うー』『うぇー』『おー』と言ってみる。

あいうえお。と発声してみたのだが、イが出来ない。エも出来てないが、まだ優秀な部類だろう。なんとなく聞こえない事もない。

俺、すごくない？　生後三日ですごくない？

……

やめよう。なんか恥ずかしい。

むっつり黙り込んだ俺を見て、おかんは首を傾げてトントンと背中を撫でながらいつもの子守歌を歌いだした。

眠たくなったと思ったのだろう。

艶っぽいなと思った声は子守歌を歌うときは、ものすごく優しくなる。

めちゃくちゃ愛されてるなーと、恥ずかしくも素直に嬉しく思えるぐらいに、満たされてしまう。

無意識におかんに手を伸ばすと、さらさらといた髪が手に触れて、その髪を掴む。ひっぱったら絶対痛いよなと思って、ひっぱらないように注意して、おかんを掴めている事に安堵して俺は瞼を降ろす。

もう何回目かになる習慣。

おかんといるのってこんなに幸せなんだなぁって初めて感じた。

本当は感じてたんだろうけど、大人になるにつれて記憶が薄れてしまって、思い出せなかったのだろう。

ありがとうなって、前の生で言えなくて今更悔しくなってしまった。

今度はしゃべれるようになったら真っ先に言おうと思う。何しろ子供だから恥ずかしくない。これでもかというぐらいに攻めてやる。

ふへへへ。まってろよ～おかん～

最後はやっぱり変な思考が混ざってしまった気がするが、俺は気分良いままにへらっと笑って眠った。

第五話　待ったなし再び

この子はよく眠る。

起きている時はあの人に似ている薄い紫の目を大きく開いて何かをじっと見ている。

ちゃんと瞬きしなきゃだめよと瞼にキスをすると、きゃらきゃらと笑って私に手を伸ばそうとする。

私の髪がお気に入りなのか、掴めると満足そうな顔をする。子守歌を唄うと決まって髪を掴んで嬉しそうな顔をして眠る。

この子が私の事を信頼しているのが全身から感じられて、泣きたくなるぐらい嬉しい。叶う事なら、やっぱりあの人にも抱いて欲しかった。この苦しくなるぐらい胸がつまる幸せをあの人にも感じて欲しかった。

おかんはときどき悲しそうな顔をする。

未だ視界はぼやけているが、テレパシー的な何かが俺にそう教えて——くれれば苦労はない。にこにこしている時はよく分かるのだが、そうでない時はあまりよく分からないので四六時中ガン見している。

あんまり見ていると瞼にキスをされてしまうのだが、それはそれで良し。

むしろもっと！

赤子の武器を全面に押し出して愛嬌ふりまきまくってみるが、残念な事にそうそう何度もしてくれない。

おかん～そのうち男なんてぐれて近寄らなくなってしまうんだから今の内だよ～ほらほら～

「あうあう」言いながらそれでも必死に喰らいついていると、何故か唄いだすおかん。

おかん。あのね、俺は歌いたかったわけじゃないんだよ。そりゃ言葉になってないから何言ってっか分かんないと思うけどさ、俺たぶん音痴だから歌苦手なのね？　だからまず歌じゃないわけよ。

「――――」

ピタリと口を閉ざした俺に、おかんが何事か言う。

やっぱし何言ってるか分からなかった。だが、俺はその言葉のアクセントにピンときた。

これ、日本語じゃなくね？

俺は生後……もう何日目か分からんが、たぶん七日は経ったところで、よーやく答えに至った。

胎内に居た頃には確かに声が聞こえて言葉が理解出来たので、てっきり――というか意識する事もなく――日本語だと思っていたのだが、外に出てみればそれは難解な言語へと早変わり。

なんつーかこれはあれだな……完全に宇宙人のそれだ。何を言っ

てるのか以前に発音の仕方すらわかんねぇ。

何語に似ているとかという発想も出ない程に聞き取れない言葉で先行き不安になりかけたが、赤子の学習能力は人生の中で最も高いと聞いた事があるので耳慣れするだろうと、こちらを覗き込んでくるおかんにへらっと笑って見せる。

青っぽい髪のおかんは今時娘っこではなく、きっと外人さんなのだろう。せめて英語圏なら多少は分かったかもしれないが無い物ねだりは非生産的で疲れるだけ。おもろい言葉が使えるようになるのだと考えれば、むしろラッキーだ。

例えば、履歴書の特技だとか資格に英語を書いても

『あ、ふーん。そう』

で終わってしまうが、そこにリヴォニア語とかあったらどうだろう。

『……え。なにこれ。使い道あるの？』

『使い道ですか？　ご存じだと思いますが、世界には消えゆく言語があります。このリヴォニア語もそうなるかもしれない言語なのです。ですから、使う事自体がこの言語の使い道だと言えるかもしれません。本当は多くの言語を覚えて後生に伝えていければと思うのですが、覚えられたのはまだこれしかなく、これからも増やしていこうと考えています』

『へえ～そうなんですか』

てな感じで掴みに最高だ。たとえその後、

『君はもっと進むべき道が他にあると思いますよ』

と言われても

『君の才能を生かす道は他に沢山あると思います』

と言われても

『君はうちの社におさまるような人間ではない』

と言われても！

掴みのみに置いて言えば最高だ――と、思っている。

なぜだ。なぜどいつもこいつも憐れむような目で俺を見るんだ。

リヴォニア語とか聞いた事が無いから適当だとでも思ったのか。

思ったのかええこらおい。

あるよ。本当にあるんだよ。母国語としてはあんまり使われなくなってしまったらしいんだけど、ちゃんとあるんだよ。

就職難でやさぐれた俺を拾ったのは零細企業。てっきりつぶれると思ったその会社は五年もの間持ちこたえ……どころか、ちゃっかり社員数増やして世間の波風ものともせず、微弱ながらも右肩上がりに成長を続けていた。

うちの社長変人だけど。

変人だからこそあれだけの人間が集まったのかなぁ？　と思い出していると、不意に視界の中にきらりと光るものが見えた。

良く見えないのでやっぱりガン見すると、きらきらと光るそれはおかんの頬を流れていた。

おかんはぼうっとしている様子で窓の外を見続けている。

……おとん。か？

今生のおとんは、まだ見てない。でもたぶん、見れないんだろうなぁと俺は予感していた。

胎内で旦那だと思ったあの男の声、あれがたぶんおとんだ。

おかんはおとんと離れる時、泣いていた。泣いておとんの分も俺を守ると言っていた。

俺は精一杯手を伸ばして、おかんの頬を撫でた――つもりで、実際はぺちりと叩いてしまった――

おかんはびっくりした顔をして俺を見る。

俺はその顔に、にへらっと笑って見せる。

もうちょい時間はかかるけどさ、おかんは俺が守ってやるからそんな顔するなって！

言葉に出来ないし、言葉も分からないけど「おおうあおうあああ」と声に出して宣言する。

おかんは呆けたように俺を見ていたが、やがてくしゃくしゃっと顔を歪めると俺を抱きしめるように顔を伏せてしまった。

あ、あれ？　逆効果？　うわちょ、ちょっと待ってすとっぷすと

っぷ！！

細かく震えるおかんの身体に、汗じと流す俺。

おかん泣かせるとは――前おかんでは有り得ない事態だが――どうにかしなければ！

第六話　言葉わからず言葉にできず（前書き）

第一話から第六話までは、導入部分です。
本編はこの次、第七話からとなります。

第六話　言葉わからず言葉にできず

この子の前では泣かない様にしていたのに、気が付けば頬を涙が伝っていた。

その涙を、この子は拭うように手を伸ばしてきた。まるで慰めるように。

いくら何でもまだ首も座っていない赤子が慰めるなんて考えすぎで、涙が珍しかったのだろうとすぐに涙を拭いていつも通り笑おうと思った。

だけど、あの人そっくりな笑顔で笑いかけられて、

「っ」

堪えていたものが堰を切ったように溢れてきて、抱きしめた。

泣いている事を悟らせないように、あの人ごとこの子を抱きしめるように。

早く涙を拭わなくては。早く笑わなければ。

思えば思うほど、喉の奥が変な音を立て目が熱くなり、震えてしまう。

いけない。この子に気付かれてしまう。この子に悲しい思いなんてさせてはいけない。

息を整え、目に力を込める。だけど心がどうしようもなくあの人を求めてしまって悲鳴を挙げる。

どうしていないの……

どうしてあの人がいないの……

どうしてあの人がいないのよ……

答えなんて分かりきっている問いかけを繰り返してしまう。
自分でも抑えきれない感情に支配されて、もがけばもがくほどより深みに落ちてしまいそうだった。

「あーうー……あーあーうーー」

不意に、抱きしめた腕の中から細い声があがった。
苦しかったのだろうかと慌てて腕の力を緩めて見れば、眉をハの字に垂らしていた。

「あーうーうー……うーうぇーおー」

消え入りそうな声に具合が悪いのかと焦ったが、どうやら違う様子だった。けれど「どうしたの？」と声をかけてもずっと声をあげ続けていて、どうしたのだろうかと思った時、ふと閃くものがあった。
それは親の欲目かもしれない。他の者が聞けばそうは絶対に思わないだろう。けれど、私には聴こえた。

「とーとーとるきのおじいさん
いつも仲良くが口癖で
にこにこ笑ってみんなを見てる
とーとーとるきのおばあさん

いつもおうたを唄っては
みんなをにこにこ笑わせる」

私が一緒に唄うと、それまでハの字にしていた眉を一瞬で解き、
ぱあっと明るい顔で笑いだした。

この子は……

「…あり…が…」

私は言葉につまってしまったけど、代わりに一緒になって笑った。
涙も出てしまったけれど、きっとこの子はそれでもいいのだろう。
一緒に笑えたらきっとそれで。

やったーーーーー！
やりましたーーーーーーー！
ここにきてやりましたーーーーーーー！

脱音痴！！

だって伝わったんだもん！
そうとしか言えないだろこれは！
今まで俺を馬鹿にしていたものどもめ、泣いて詫びるがいい！！
伝える術なんぞ無いがフィーリングで詫びろ！！

苦節二十七年プラス七日か八日。長かった……

子守歌と気付いてもらえるかどうかは賭けだったが、俺は見事その賭けに勝った。
おかんはどうやら落ち着いたようで、いつものようににこにこと笑っている。

たぶん初産で、しかもおとんが居ないという環境はおかんにとって相当きてるものがあるだろう。
俺だって嫁さんなしで子供育てろと言われたら、そりゃ育てようとするけど不安で仕方ないと思う。

それに子供を産んで一週間は身体を休めろと聞く。
おかんはそれが出来てないんじゃないかと思う。俺の世話をつきっきりでやってるのもあるし、おとんの事で休めてないような気がする。

ここはひとつ、寝る前にでもまた唄うかな～

そんな計画を立てていると、いきなり視界が高くなって俺は驚いて手足を引っ込めた。

って、おかん。いきなり立ったら貧血でふらつくだろ。
あぁほら言わんこっちゃない～　壁に寄り掛かっちゃって、俺今は腹空いてないし衛生状態も良好だから動かな……

視界は端に、人影があった。
時折ここに来てはおかんの世話をしているおばちゃんではない。
そのおばちゃんよりももっと背が高い。
もっと良く見ようとしたらおかんが俺を抱き込むようにしてそいつから隠したので、俺の視界はおかんだけを映した。

「――――！」
「――――――――」

おかんが声を荒げている。
対する声は、男。抑揚が無くて平坦な声。感情の起伏が全く感じられなくて、息をしてる相手なのか疑いそうになるぐらい変な感じがした。
それはともかく、おかんが声を荒げるなんて生まれてこの方一度もなかった。それにこの全身で拒絶しているような態度には鬼気迫るものがあった。おかんに依存している俺はそれに引きずられ、顔が強張るのが分かる。

「――――！　――――――――――――！」
「――――――――――」
「――――！」
「――――」

おかんと男の喧嘩？　が現在進行形で繰り広げられている。
俺はと言えば、おかんの怒声が怖くて怖くて、がたがたしてるだけというチキンハートを披露していた。

いやー、赤子と大人って想像以上の体格差だ。
子供の頃って大人が大きいなって思ってたけど、赤子ともなると

威圧感は生半可なものではない。
子供の前で喧嘩はやめて～とか考えていると、いきなりおかんが走り出した。

え!?　どしたのおかん!?

顔を見上げようとしたら、ドンと衝撃が身体を伝い、おかんは倒れた。
倒れながらも、俺を抱いた手は離さず胸の中に抱き込んだまま倒れた。

「――――――」

おかんが何か囁いて、よろよろと身体を起こし、立ち上がれないのか片手で俺を抱いて、片手で床に爪を立てて這っている。
おかんの身体の向こうから足音が近づいている。

……え……と？　……ちょっと……俺、分かんないんだけど……

おかんの薄いピンクのワンピースが、真紅に染まってゆく。
何度か嗅いだ事のある鉄さびの匂いが俺を包む。
足音がどんどん近づいてくる。

俺は、男を見た。
必死に逃げようとするおかんの腕ごしに、緑っぽい髪の男を見た。

お前……おかんに何した。

がくりと、視界が低くなる。床についていた腕に力が入らなくな

り、肩をぶつけるようにして倒れこむおかん。だけどやっぱり俺は手放さなくて、腕の中に抱えたまま大事に大事に身体に寄せる。
足音がすぐ傍まで聞こえ

近寄るな

俺はこの身体になってから初めて人を睨みつけた。

……お前さ……何した？

……お前さ、何したの？

……何したのか……って、聞いてんだよ！！！

男は足を止め、俺を見た。

喉の奥から低い咆哮が迸った。そんな声が出るとも思わなかったし、赤子が出していいような声ではなかった。
だけど、俺はそんな事にも気付けず男を睨みつけ獣のような咆哮を挙げた。

「――……」

頭が真っ白になっても、この人の声だけはどうしてか届く。
視線を動かせば、にっこり笑ってるおかん。
瞼にキスを落とされて、俺はおかんにつられるようにへらっと笑った。

おかんの顔の向こうで、男が背を向けるのが見える。

「――――……」

なんで……だよ……

「――……――――」

なんで日本語じゃねーんだよ……

「……――」

おかんは笑ったまま、震える手で俺の頬を撫でる。
けれどその手はいつもと違ってヒヤリとしていて、囁く声も段々と小さくなって。

「――　……――――」

なんなんだよこれは！

なんで俺はあんたの言葉が分かんねーんだよ！

冷たくなっていくおかんの腕の中で、俺はおかんの髪を掴んだ。
さらさらしていた髪は、血糊に濡れて手にへばりつく。でも、おかんの髪だ。

なんで俺は赤ん坊なんだよ！
なんであんたを守れないんだよ！

「――――……――」

声が聞こえなくなる。おかんの藍色の瞳がゆっくりと閉じられる。

……いわせろよ……ありがとうなって……いわせてくれよ……
何で言えないんだよ俺は……何で……なんで赤ん坊なんだよ……

「駄目よ……」

「そんなお目々……似合わない…」

「だい……じょうぶ」

「……守るから」

「ね？　……キルミヤ」

「愛して……る」

第六話　言葉わからず言葉にできず（後書き）

基本的にコメディです。
基本的に……基本的には……

まぁ次の話から本編スタートなので。

第七話　流れゆく（前書き）

ここから本編です。

第七話　流れゆく

草の上に身体を投げ出した俺の視界を埋めるのは、どこまでも続く蒼。隔たりなどなく流れる雲はさながら自由の使徒のごとく。
手をかざせば、青年期に突入した角ばった手が視界に入る。

よく育つよなぁこの身体……
前の身体はザ、モンゴロイドって感じで小さかったのにこうもあっさり追い越してしまうとは……

高校の時から伸び悩んだ身長をさくっと超えた時は遺伝子の力を強く感じてしまった。
もっとも周りも身長ある者ばかりなので俺がのっぽさんというわけでもない。

……ん？

蹄の音が聞こえる。馬車を引く音ではない。行商でもない。
行商はもっと重たい感じだ。これは軽い。

「あぁ……そういや言ってたな。どうりで屋敷中が騒がしかったわけだ」

めんど……

ごろりと寝返りを打って、俺は晴れ渡る空に背を向けた。

あー日向さいこーぬっくい～……

「やっぱりここにいたか！」

気持ちよく寝入ろうとしていたら、息を弾ませ木々の間からどことなく俺に似た男が、案の定飛び出して来た。

２０代前半の若者で、俺より青味の濃い青褐色の髪。日本人の感性を未だに持っている俺からしてみれば彫の深い顔立ちでその癖あんまりごつくもない、綺麗どころが好きそうなお姉さま方にもてるだろう容姿をしているという、視界に入るだけでむかつく奴。俺の従妹ことおかんの兄貴の息子、グラン・パージェス。御年二十四歳。

グランは寝転がっている俺の隣に腰を降ろした。

座んなよ。誰が許可した。

「私が来ているのに気づいていたんだろ？」

俺の無言のアピール、通称『背中語り』をスルーして声かけてくるグラン。

「屋敷を探しても見当たらないから、もしかしてと思ってみたらやっぱりだったな」

スルーされたのでスルー仕返すものの、意に介さない。

「どうだ？　みんな元気にしているか？」

誰が答えるものか。人の昼寝を邪魔する輩に。

「ああ、そうだ土産があるんだ。都ではやっている粉菓子だぞ」

俺はむくりと起き上がり、差し出されていた紙包みを受け取りガサガサと包みを開けて、出てきた円形の焼き菓子をほお張った。

そんなの……そんなの出されたら……起きないわけにいかないじゃないか！

「全く。変わってないな」

仕方がないなこいつは。と笑うグラン。

仕方がなくないと俺は真面目に思う。こいつは糖類がどれほど貴重か分かっていない。

ここでは純粋な糖類を手に入れようとすればそれなりの金が必要になる。

通常甘味として使用されているのは多くが蜂蜜で、あとは果実と根菜類が少々。砂糖はほとんど手に入らない。

こりゃかなり物流が限られてるとこに生まれたなぁと勘違いしていた俺は、何とかその手の流れを作れないものかと地方領主をしているらしいおっちゃんの書架を漁って、まずは地理と直近で代変え品になる植物が無いか調べる事にした。

周りの大人に聞かず自分で調べたのは、何の因果かよくある補正という力の働きなのか俺に変な力が付加されていて、それを知らずに——俺は皆そうなのかな～って純粋に思っていた——言ったら怖がられてしまいましたとさ。

まぁ考えてみれば日本であろうとなかろうと、変な力があったら不気味なのは違いない。

そういうわけで一応おかんが現領主の妹かつ、現領主がシスコンだったから生活は保障されたが、それ以外はなるべく触らず近づか

ず。

俺は祟り神か！　と突っ込みそうになったが、ここの言語に『祟り神』なるものはなく、言っても意味が通じないので、まいっかと好き放題の単独行動権を手中に収める事となった。

そういう経緯があるので、俺が書架で調べものをしても誰も気に留めない――というか、留めないようにしている？

俺はごそごそと目ぼしをつけていたものを探し当て、よしよしと己に満足しながらさっそく調査だと張り切った直後、打ちひしがれた。

ち……ちっがーう！　いやまて、それ以前にこれどこの地図！？

もうね、三歳児が地図広げて真顔でブツブツ言ってる姿はシュールの類に入っていたと思う。

でも俺としてはかなり必死で、必死で上下さかさまにしたり、離して見たり近づけてみたり、他にも地図は無いのかとさらに漁ってみたりして、結論にたどり着いた。

たぶん、地球じゃない。

この時はまだ望みを捨てていなかった。

けれどこの後、国土の歴史が載っていそうな本を開いて確定に変わった。

俺が生まれた国はセントバルナ王国。そう、王国。しかも、開国三百年は下らない由緒ある王国。使用される言語は大陸言語の一つと言われ、それを使えればとりあえず大陸内の主要国であれば不便しないと記されていた。

うちの言葉って、余所でも使えるんですよ～　すごいでしょ～

という国自慢はどうでも良かった。
問題は、そんな国際的に認識されていそうな国を俺が知らないという事だった。

理解した瞬間頭を抱えて蹲ってしまった。異世界に転生とは、我ながら意味不明な事をしてしまったと。
輪廻転生の思想を完全否定するだけの材料を持っていなかったので、転生のそれ自体は胎内に居た頃から受け入れていたのだが、さすがに異世界ともなると受け入れがた――くもなく、俺は五秒程で復活した。

何しろ悩んでも腹は膨れない。
要求しなければ飯は貰えないので、成長途中にある身としてはそこだけは押さえなければならない。
うだうだやっている暇があるならいずれ放り出されても生きていけるようにしておくか、それとも何とかして現状の環境を改善しなければならない。たとえそれが異世界だろうと何だろうと変わりはない。

ま。なんとかなるっしょ。

で、現在進行形ニートの俺。
そんな俺が高級食材兼滋養栄養剤である砂糖を手に入れられるわけもない。
糖類が取れないと俺の手は震え脂汗だらだら流し幻覚に襲われる――事はないが、血走った目になる。糖類探して。

それを知ってなのかグランは新たに出来た幼い弟、つまり俺に菓子の類をせっせと運んできた。
本来なら俺が菓子を食べられる機会などないのだが、この男が雛

に餌を与える親鳥のごとく運んでくるので禁断症状を出す事なく過ごせている。

有り難いのは間違いないが、礼など言おうものならしてやったりの顔をするに違いない。それは何か癪に障るのでぷいっと背を向ける。が、苦笑混じりもう一つ差し出された包みを抵抗なく受け取る自分がいた。

あぁ……俺はなんて意志が弱いんだ……こうやって飼いならされてるって分かってるのに……手が、手がぁ……

「屋敷に戻ればまだまだあるぞ」

指についた粉砂糖をいじきたなく舐めながら、グランの言う屋敷に視線を向ける。

今頃、屋敷では出来る限りの準備をしてグランを待っている事だろう。

次期領主と言っても、パージェス家は貴族の末席。出世など相当無理をしなければ出来ない位置にある。

それをグランはやってしまった。今は中央で仕事を任され、出世頭の頭目として話題の人となっている。

パージェス家にとってみれば、期待の星。神様仏様グラン様状態となっている。

「せっかくお前が戻ったんだ。無粋な真似はしたくないね」

「何を言うんだ。お前の家なんだから無粋も何もない」

まぁ住処には間違いないな。と、思いつつ欠片を口にほおりこむ。

「みんな元気にしてるよ。エイナは大きくなった。少しだがしゃべ

れるようになっているらしい」

もごもごしながら言えば、妹の話題にグランは嬉しそうに顔を綻ばせた。

「エイナが？　それは楽しみだな。父上はどうしている？」
「変わらずだ。お前の出世を自慢してまわっている。下手に敵を作るだけだってのに」
「ははは。まぁあの人はそういう人だからな。で、お前はどうしてた？」
「俺？」
「そう。お前。毎日こんな所にいるわけじゃないんだろ？」
「べつに～」

二つ目も平らげ、再び寝転がる。

「何にもしてねぇよ。晴れればここで、雨降ってたら地下室で寝てる」
「またお前は……地下室は牢獄なんだからやめろと言っているだろ」
「いいじゃん。誰もこないし静かでいいとこなんだよ」
「……静か、か」

意味ありげにつぶやくグラン。

「お前、屋敷を離れようとは思わないのか」
「なんで？」
「居心地が良いとは言えないだろ」
「そうか？　三食昼寝つきの待遇はかなり居心地がいいと思うぞ」
「そうやって誤魔化すな」

向けられた真面目な声音に、俺は口を閉ざした。

「お前が留まるのは私の為なんだろ？　ここなら中央の奴らの目も届きにくい。ここに居る限りお前の存在は隠される。私の弱みにならないように、隠れているんだろ？」

はじまったよ……自意識過剰モードきたよ……

これ始まると止めるの大変なんだよー……

「なに自意識過剰な事を言ってるんだか」

一先ず恒例の切り替えしに心底呆れたという顔プラス半眼を向けてみるが、グランの真剣な顔は小揺るぎもしない。

仕方がないので、毎度毎度言ってると分かっている繰り返しを実行する。

「俺程度がお前の弱みになるかよ」

「なりうるさ。お前の力はそれだけの意味を成す」

「はっ。地獄耳程度がか？　中央は噂好きのおばちゃん集団かよ」

「……すまない」

「だから！　お前の為に居るわけじゃないって言ってるだろーが」

「そうだったな……」

俺が心底面倒そうにしていると、グランは固い表情ながらもそのうち終いにする。いつもなら。

この時は違った。

「やっぱりお前はここに留まっていたらいけないな」

「あん？」

グランは微笑み、唐突に立ち上がると、寝転がっていた俺を無理やりに立たせた。

「これから私と一緒に屋敷に戻るんだ」
「はぁ？　やだよ面倒くさい」
「そうか。――フェイ」

三十代程の男が現れ、面倒くさがる俺の後ろに立った。

「な、何だよ。力ずくか？」
「まぁそうだな。但し、屋敷にではない」
「は？」
「フェイ。例の場所へ。
キルミヤ、お前にはしばらく学院へ行ってもらう」
「はあ？」
「すでに学院側には話は通してある。パージェス家の者が世話になる、と」

え？　何言っちゃってんのこいつ？
いや、まじで何言ってんの？

「をいをいをい。無理だろ。第一俺何も知らないぞ」
「慌てる事はない。お前の事を知る者は誰もいない」

呆れかえる俺に、グランは無駄に自信満々に言い切った。

「じゃねーよ。俺が何も知らないって言ってんだよ」
「なにしろエントラス学院はここから馬を飛ばしても三日は掛かる場所だからな」
「人の話聞けよ」

「ああ、すまない。父上には私から話しておく。キルミヤは早く学院に行きたくて挨拶もそこそこに行ってしまった。とね」
「無視かよ。ってかエントラスって魔導学の最高峰じゃ……」
「なんだ知っているんじゃないか」
「そこだけ聞くなよ！」
「やっぱり縁があるんだな。よし、フェイ」

グランの指示でがしっと俺の腕を掴むフェイ。

「え……」

嫌な予感しかしない俺をよそに、フェイは生真面目な表情を崩さず主に対して頭を下げると機敏に踵をかえした。むろん、俺の腕は掴んだまま。

「うおっ！　ちょ……ちょっと待て！　まじか！？　まじでか！？　冗談抜きで今からか！？　おいおーい。フェイさーん？　俺何にも持ってないんだけどー」
「用意は既にしてある」

言葉通り、少し歩いた先に二頭の馬が木にくくりつけられていた。

「あー……準備のよい事で。さすがグラン」

もはや乾いた笑い声しか出なかった。

さようなら俺の平穏……
さようなら俺の三食昼寝付き自堕落生活～……

第七話　流れゆく（後書き）

お気に入り登録に加え、評価もつけて頂きありがとうございます。
なかなか書き方の指標がないので、指標に使わせてもらいます。

追記：国名を間違えていました・・・
さらに追記：国名どころかキャラ名間違えてた・・・指摘ありがとうございます！！

第八話　出会いがしらにノックダウン

あといくつ残っているのだろう？

小さな袋をほどき書籍を机の棚に並べる己の手を見つめ、小さく息を吐く。

考えてはいけない。
疲れを感じる事など許されない。
まだだ。
まだ歩みを止めてはいけない。
歩き続けなければならない。
この使命が終るまで。
立ち止まる事も、力尽きる事も決して許される事ではない。
託された願いと思いに、必ず応えなければならない。
もう、いくら手を伸ばしても届かぬ場所へと逝ってしまった皆の為に。

“……”

不意に髪が風に遊ばれるように乱され、僕は驚いて目を開けた。
白い髪がふわふわと揺れている。窓は開いていない。ドアも閉まっている。

“……クスクス……”

さざなみのような笑い声が耳に伝わる。
それはここ暫く出会っていない懐かしい声。遥か昔には常にその声と共にある事が出来た。しかし、あの時から声は去ってしまった。

今の己には唯一と言える共通の時を抱く存在のはずだったのに。

「精霊が……どうして」

僕は惹かれるようにドアを開けた。

ガン

「え？」

空けた瞬間、何だかすごい音がして大きなモノが床に落ちる音がした。

ドアの向こう側を覗いてみると、青褐色の髪をした青年が突っ伏していた。

「え……」

まさか、ぶつけた？

慌てて青年に駆け寄り肩を叩いた。

「あの、大丈夫ですか？」

反応は無く、それどころか触れた手から青年がひどく体力を消耗しているのが伝わった。

額と首筋を確認すると、焼けるように熱い。意識も無く息は浅く速い。

“キルミヤ……キル……ミヤ……”

「キルミヤ？　この人の名前？」

空に向かって尋ねると、再び髪が乱される。

「キルミヤっていうんだね。君たちはこの人についてきたの？」

“キルミヤ……ずっと起きてる…家出てからずっと……疲れてる……休ませて”

一瞬、迷う。

今の自分と関わる事は誰であれ、不幸にしてしまう危険が高い。

だが、目の前で倒れているこの状況を放置する事も出来なかった。

「分かった」

僕は両手を胸に重ね、そこから白く淡い光を生み出し青年の額に押し当てた。

光が額に吸収されると、青年は小さく身動ぎをした。

「う……」

「大丈夫ですか？」

青年の意識はぼんやりとしている様子で、焦点が定まらず瞳が揺れていた。

「僕に捕まって歩いてください。療養室まで行きます」

青年の反応は鈍かったが、腕を肩にまわすと理解したのか壁に手を付きながらおぼつかない足で立ち上がってくれた。

年は十七か十八か。体格差があるので、重みに耐えられるよう足

に力を入れたが思ったよりも軽い重みに違和感を感じてみれば、青年の身体を必死で支えるように風が舞っていた。

なるほど。ここまで来れたのも彼らの支えがあっての事だろう。精霊に愛されし存在。まるで過去の自分のようだ。いや、過去の自分よりも多くの精霊に愛されている。

こんなにも愛されるとは、いつしか時の狭間に消えてしまった緑の聞き手のようだと思いつつ、学院の中に立てられた病人・負傷者を受け入れる療養室へと運び込む。

「すみません、この人を看てもらえませんか」

戸を叩き中に入ると、薬品の匂いが広がってきた。

「あら。見ない顔ね。今年の新入生？」

白いローブを着た背の高い女性が歩み寄ると、軽々と青年を肩に担いでベッドに放った。

雑なその対応に、まわりの精霊達が大ブーイングをはじめ、女性の髪をひっぱったりめちゃくちゃにしようとするが、何らかの護符でも持っているのか触れる前に弾かれてくやしそうな声をあげていた。

「あの……あまり手荒な事は。その人、状態悪いと思うのですが」

「え？　あぁそうね。この熱、いつからか分かる？」

僕は視線をそっと走らせた。

“夜になる前の夜の前”

「一昨日ぐらいからだそうです」
「あら。よく歩いて来れたわね」
「それは……廊下で倒れていましたから、力を振り絞ったんだと」
「このまま下がらないとまずいわね。でも残念。解熱剤が今無いのよ」
「え……」

女性はいきなりローブを脱ぎ捨てると、草色のマントを身体に巻きつけた。

「夕方までには戻ってくるから、よろしくね」
「え！？」
「汗かいてるから拭いてあげて、そしたらそっちの棚に着替えあるからそれを着せて。
毛布は重ねて使って、額は冷やしてあげて。あと熱が上がってきたらわきの下も冷やしてあげて。少しでも意識が戻ったら水分補給ね。じゃ」
「あの！」

女性は止めるのも聞かず、出て行ってしまった。

僕は久しぶりに困ったと思いながら部屋の中を見回した。
タオルは山のように用意され、着替えも言われたとおりの場所にあった。
青年のほかに病人はおらず、ひとまず彼だけを看ればよさそうだった。

「関わりを持たないようにしようと決めているのに……」

桶に水を張りタオルを浸して絞り、汗をふき取りながらついついため息が零れる。

“キルミヤキルミヤ……”

精霊たちは心配そうに青年の周りを飛び交っているようだった。目にすることは出来ないが、ここまではっきりといたるところから声が聞こえるので、よほど多くの精霊が部屋に集まっているのだろう。懐かしい彼らの気配に、僕は昔のように耳を傾けた。その瞬間、

「あははっ！」「何よ笑わないでよ！　私だってこれからなんですからね」

「何やってるんだ」「すみません」「これはどうしましょう」「それはそっちに、明日の朝使おう」「厄介ごとを……」「またこの時期か」「さてな。誰が狙うのやら」「期待されるべき人間がいるのか」「ガーナス家の三男か」「名門とはいえ、実力やいかに」

「！」

僕は驚いて反射的に同調を止めた。

まさかという思いで辺りを見回す。

「今のは……君たちが……」

“キルミヤ、さみしくない”

“キルミヤ、一人、でもさみしくない”

浅い息を繰り返す青年を見れば、眉間に軽い皺がよっている。

よく見れば、口元が小さく動き何かを呟いていた。

うるせー

僕は、もう一度辺りに視線をおくり首を横に振った。

「今はとても疲れているから、少し静かにしてあげよう？」

“だめ、キルミヤさみしい”

「大丈夫だよ。君たちがいるだけで、君たちの温もりが伝わっているはずだから。ね？」

“……ほんとう？”

「うん。それに、僕も伝えるよ。君たちがずっと傍に居てあげている事」

“ほんとう？”

「約束する」

“……しずか、する”

「ありがとう」

僕はほっとして、もう一度念のために耳を傾けてみた。

今度は、何も聞こえてこなかった。

はじめに聞こえた、音と声の嵐が嘘のようだ。

青年の額に刻まれていた皺が、綺麗になくなっている。こころなしか呼吸も少し落ち着いている。

「熱、下がらないな」

額に新しい水に浸して絞ったタオルを乗せる。
首筋に手を当てれば、やはり熱い。

「普通の風邪ならあれぐらいの癒しで十分なんだけど……」

この人の疲労はいったいどれだけあるのだろうか……

心配そうに囁く精霊たちの声。
そう、自分もこの声に囲まれていた。怪我をするたび、病気になるたび。
その心配する声は母の温もりを知らない穴を埋めてくれた。

“ねえ、キルミヤをたすけて”

「え？」

“しってる。キルミヤたすけれる”

「僕は……その、あまりこの力を使う事は」

“どうして、どうして、たすけれるのに”

「うん……そうだけど……」

“たすけられないのに、たすけられるのに”

非難の声に、僕は瞳を閉じた。
精霊の声に重なって少女の声が蘇る。

助けられるのに、どうして助けないの？
あたしじゃ助けられないのに、どうして助けてくれないの？

過去の悔恨がいまだにこの心を支配しているのか。

僕は己の弱さに自虐的な笑みを浮かべ、両手を胸に重ねた。
そこからゆっくりと両手を放し、白く淡い光を生み出す。
やわらかで暖かな光は先ほどより大きく、青年の身体を包み込んだ。

第九話　世話の掛け合い

天上が見えた。

ぼろ屋敷の天上ではない。
野宿の夜空でもない。
安宿の低いそれでもない。

「……あっれ？」

身体を起こそうとした瞬間、全身に鈍い痛みが走り声無く呻き枕に頭を落とす。

「気がついたのかい？」

女の声に視線を動かせば、白いカーテンをめくり背の高い女が覗いていた。
栗色のくるくると癖のある髪をポニーテールにしている。全体的にスレンダーだが、残念な事に露出は少ない。ズボンに手首まであるシャツと、その上からホルスターの様な革っぽいベストを着ている。俺の居た地方ではあまり見かけなかったが、話に聞く冒険者の姿に似ている。

俺……魔導学院に来てたよな？
確かに着いて、唯一主人主義鬼畜偏愛男のフェイに放り出されてー……どうしたっけ？

「その子に感謝しな。夜通し看病してたみたいだ。
あたしは帰るのが遅くなっちゃって、戻ってみればあんたの熱は

けろっと下がってたんだよ」

その子？　と、見ればベッド脇につっぷして眠っている白い頭の子供がいた。

「誰、こいつ」

「あんたの同室の子だよ。キルミヤ・パージェス。今をときめくグラン・パージェスの弟君？」

「あん？　何だよおばさん。何で知ってんの。あんた学院の関係者？」

びきっ

女の額にまぎれもない青筋が浮かんだ。

「おーばーさーんー？？」

「あ、ちょ、まって？　俺って結構な重病人？　だよね？　だよね？」

「そんだけ喋れる重病人がいるか！！」

バゴンッ！

持っていた盆らしき物で容赦なく殴られた。

「いってー！　うわ！　ひどっ！　身動き取れない病人殴るなんて！　なんて怖いんでしょう。ぷるぷる」

「……お前、本当にグラン・パージェスの弟か？」

「まことに遺憾ながら」

沈痛な面持ちというのを作って言ってやると、何故か女は笑った。

「お前は随分と兄とは違う性質のようだな。あちらはあちらでなかなか面白いが、お前もこの業界じゃあ、あまりみかけない性質だ。ま、せいぜい頑張ることだな。歩けるならさっさと部屋に戻れ」
「え～ここで寝てたら駄目なの？」
「ここは病人と負傷者の為の部屋だ」
「俺、まだその範疇にあると客観的にみても思うんですけど……」
「お前の回復力なら問題なかろう？　また倒れたなら、そのとき看てやる」
「わー……鬼発言だー」
「何か言ったかい？」
「何も……」
「よろしい」

俺ってこんな扱いばっか……

泣いて見せるが、女は見てなかった。
ちょっとむなしかった。

「……はー。やれやれ」

俺は全身に力を入れ、寝返りをして腕をつき何とか身体を起こした。
ベッド脇の水差しにそのまま口を付け飲みほすと、床に足を降ろし感触を確かめた。
全身の痛みは筋肉痛。だるさは発熱の後。だが、思ったよりも気分は良く、ふらつくのをのぞけば問題なさそうだった。
今までここまでになったケースと比べると非常に状態が良い。

「おーい。少年」

「……ぅ」
「寝てるとこ悪いんだが、起きてくれ」
ぽんぽんと白い頭を叩くと、少年は身動ぎをして髪とは正反対の真っ黒な眼を向けてきた。半分寝てると分かるぼやけ具合で。
「……おはようございます」
「おはようさん。部屋どこ？」
「……部屋？」
「あんたと俺、同室らしいから」
「……同室」
「おーい。起きてるかー？　ここは学院、でもって俺たち生徒。寄宿舎の部屋が同室」
ふっと少年の焦点が定まる。
「あ、すみません。部屋ですね、こちらです」
がたりと椅子から立ち上がり歩き出す。
「お世話になりました。失礼します」
「どーも。倒れたらたのんまーす」
対照的な挨拶を残して部屋を出ようとすると、何かを投げられ俺は反射的にそれを掴んだ。
なんだ？　と思って見ると、革の袋の中に薬を包む紙がいくつも入っていた。
「持っていなさい。でも、無理は禁物」

薬包の中身が何か分かり、俺はちょっと感心して女を見た。
上からすっぽりと白いローブをかぶり終わった女は、いかにも某RPGの白魔導師（回復キャラ）。にやりと笑む姿は似つかわしくなかったが。

俺は手をひらひらさせて戸を閉め、少年の後を追った。

隣の建物まで無言で歩き、二階の一番奥の部屋へと入る少年。どうやらそこが俺達の部屋という事らしい

「ここが僕とあなたの部屋になります」
「ほへー。思ったよりも広いな」

寄宿舎と言うからには六七畳程度の部屋かと思えば、ゆうにその三倍はあった。下手しなくても、俺が住んでいた部屋の面積を超えている。

「それは、この国で最も大きな学院ですから、貴族の師弟も集まります。あまり狭いと文句が出るのでしょう」

二つのベッドに、二つの机。クローゼットがそれぞれに用意されていた。
それなりの貴族の師弟にしてみればこれでも文句ものだろうが、あくまでも学生という身分上、これで我慢しているのだろう。

「……そういえば、静かだな」

ふと、キルミヤは辺りを見回した。
いつもなら俺の耳をイカレさせたいのかと言うほど、世界を満たしている雑音がほとんど聞こえない。
それこそ、いつも昼寝をしていたあの丘か、地下牢と同じぐらい

に聞こえなかった。

「それはお願い……しましたから」

「お願い？　あ、おい！？」

唐突に少年はその場に崩れ落ちた。

「何だよ、お前……熱か？　面倒だなー。さっきの場所で倒れててくれよ。筋肉痛で痛いんだよ」

仕方ないなーと、少年を抱えあげようとすると、少年は何故か身をよじってそれを避けた。

「何やってんの？」

「あそこへ……は」

「行きたくないの？」

微かに頷く少年に、俺は頭を掻いた。

「行きたくないところに俺はいたのかよ」

「そうじゃ……僕だから、僕は……」

「つってもお前、本当に熱がひどいぞ」

「……だいじょう……ぶ。あなたが、いるから」

「俺？」

「精霊が……いるから、力をわけてもらえるから」

「せいれい？」

少年は意識を手放していた。

少年の頭を小突いてみたが、反応は無かった。

「……ねちゃった」

俺は不意に声を感じ目を細め、ドアを見つめた。

「キルミヤ・パージェス！
カシル・オージン！」

大声とともに部屋のドアが開かれる。
部屋に入ってきたのは白髪が幾スジも見える魔導師。
が、部屋には誰もいなかった。

「何処に……入学式早々出席しないとは」
「あら～、クレイスター先生」
「ラウネスか」

背の高い療養室の女はにこにこと白髪教師に近付いた。

「キルミヤとカシルなら体調を崩してうちで預かっておりますよ。ごめんなさいね、連絡が遅くなってしまって。二三日すれば良くなりますから、ご心配なく～」
「それを早く言え」
「ごめんなさい～」
くすくすと笑いながらラウネスはクレイスターから離れた。

「あー……面倒とはいえ、最初からさぼっちまった。
ま、いーか。どうせやる気ねーし。昼寝したいしー」
学院の外に広がる林の中、巨木に身を預けて俺は大きくあくびをした。

「しっかし、何で俺がこんなガキの面倒見にゃならんのか」

膝には毛布で蓑虫宜しくぐるぐる巻きにされている少年の頭が乗せられている。

「どーすんだよ。あのおばさんとこ行きたくないって。俺医者じゃねーぞ」

教師に見つかればすぐに連れて行かれるし、あの場では部屋を出るしかなかった。

咄嗟に毛布を掴んできたが、熱が出ている人間をこんな外で転がしているのは問題だろう。仮にも看病を既に受けた身としては何とかしてやらなければと、珍しく俺は人道的な事を考えていた。

「大丈夫」

「起したか。悪い」

少年は目を閉じたままだった。

「僕は、大丈夫。あなたのそばには精霊がたくさんいるから」

「なんだよその精霊って」

少年の頬が少し動く。微笑んでいる。

「あなたは、本当に知らないのですね」

「なにを？」

「あなたは精霊に愛されし存在。あなたのまわりにはとても多くの精霊がいます。

あなたが倒れている時、彼らはとても心配していました。そして今も本調子でないあなたを心配しています」

「えーと。お前、不思議ちゃん？　変なものが見えたりとか、そっち系の人？」
「『そっち』という系譜については分かりませんが、見えているわけではありません。
僕は聞こえるだけです。むしろ、あなたこそそうではないのかと思っていました」
「なんだよ、俺はそっちの人じゃないぞ。一般人だ。一般人」
「ですが、人には聞こえない音を聞いているのではないですか？
例えば、遠くの人の声とか。聞き取りようもない程小さな音とか」
「……声、ねぇ」
「それは精霊たちが貴方に運んでいるものです。あなたがいつも一人でいるから、寂しくないようにと。そして、少しでも自分たちの存在に気づいて欲しいと。さすがに倒れている間は自粛してもらいましたが。今も静かにしてくれているようですね」
俺は軽く目を見張った。
「お前が？」
「お願いしただけです。彼らはあなたの事が好きだから僕の願いを聞き入れたにすぎません。あなたも彼らの声が聞けてもおかしくないと思うのですが……」
「俺が？」
少年は小さく咳き込んだ。
俺は肩の力を抜き、少年の頭をぽんぽんと撫でた。
「悪い悪い。寝ろ」
「いえ。話させて下さい。これぐらい平気です。
彼らが言うには、何かに阻まれているそうです。おそらく、あなたには封印か何かがかけられているのでしょう。何の目的があって

そうされているのか分かりませんが、憶測ではそれはあなたを守る為」

「俺を……守る？」

「それだけ精霊に愛されている存在は、かつての緑の民を彷彿とさせます。

緑の民。別の名を緑の聞き手。

緑の聞き手は、この世界のあらゆる事を知ることが出来ると言われていました。彼らの武器は精霊。精霊は世界中のあらゆる音、光、力を拾い、愛する存在へと惜しみなく与えます……だから」

咳き込む少年の額に手を置き、俺はもう片方の手を虚空に向けて突き出した。

魔術の基礎、大気の力を取り込む型。だったか。

まぁ、精霊の力をもらえるのか。もらったところでどうしようもないのだが、ものは試しというつもりで、少年に力をわけてやってくれと心の中で念じてみる。

「権力者は緑の聞き手を求めました。

あたなが本当に緑の聞き手なのかは分かりません。血族に近しい者、あるいは血に連なるものの誰かが、そうだったのだと思います。ただ、あなたの愛され方は尋常ではない。だからこそ、精霊の力を得たとき、あなたを欲するものが多く現れてもおかしくはないのです。

緑の聞き手、緑の民の存在はもう随分と忘れ去られてきましたが、いまだ権力者の中には伝説として記憶に留めている者もいます。ですから、あなたがその封印に気づいていて、それを解く為にここへ来たという事ならば、僕はおすすめしません」

「そんなんじゃねーよ」

「そうですか……良かった」
「人の心配してないで自分の心配しろ」
「大丈夫です。先ほどから精霊たちが力を分けてくれていますから。あなたがお願いしてくれたんですよね。ありがたいですけど、人前でやらない方がいいですよ。分かる者には分かります。特に魔術を扱う者たちは」

俺は頭を掻いた。

「お前も精霊に愛されし存在じゃないのか？」

少年は笑った。

「いいえ。もう違います。よしみで助けてくれているだけです。あなたがいなければ僕のまわりに精霊は集まりません」
「分かったよ……分かったから寝ろ」
「大丈夫ですから。それよりも、自身の危険性というものを――」

俺はため息をつき、仕方なく口を開いた。

「俺がこの学院に来たのは俺の意思じゃない」

「え？」

「従兄弟がな、放り込んでくれたんだ。お前の言うとおり、俺はささいな音でも拾ってしまう。それが遠くても、別の部屋でも、外からでも。
子供の頃はそれがどこで発生した音か分からなくて、メイド達の噂話なんかも拾ってしまってな。意味の分からない言葉があると、それを言っていたメイドに聞くんだ。どういう意味なんだって。そ

したらメイドは青ざめてどこでそんな事をと聞いてくる。子供の俺ってば素直だから、お前からって言うんだ。そしたらメイドはさらに青ざめる。

化け物呼ばわりさ。ま、おれ自身そう思ってたところもあるけど。なんにしても、それでも俺は領主の血筋だったから、なーんもしなくてもメシだけは食えた。昼寝の生活が気に入ってたんだが、次期当主の従兄弟がな、お前はここに居るべきじゃないって追い出してくれたんだよ。で、ここに放り込まれた」

「それは新しい世界をと……？」

「そんな優しいかよ。俺がここまで来るのにどんだけ大変だったか」

「は？」

「馬に乗ったことなんて無いのに、三日間のりっぱなし。休みなんて微々たるもの。早々に熱っぽいなーとか思ってふらふらしてても腰ぎんちゃくの野郎頓着せずだ。まじで死ぬかと思った」

実際、学院についてからの記憶が無い。

「……大変だったんですね」

「そーだよ。従兄弟はこの力をコントロール出来るんじゃないかと思っているけど。俺としては雑音から解放されたんならもうそれでいいわけ。封印なんてあったとしても、どーでもいいんだよ」

そう……ですか。

少年はそう呟いて、安心したかのようにしゃべらなくなった。

「……ったく。やっと寝たか」

手のかかる奴だと思いながら、俺は己の手を耳に当てた。

今は、本当に静かだった。風の音も、林のざわめきも、小さな生き物の気配も分かるようだ。

「世間ってのは広いんだねえ……」

第十話　どこの世も

入学式早々欠席してしまったが、結果としてそれ程目立つ事も無く教室の中に俺は埋没していた。
それぞれ有名な学院に在籍出来た事を喜び、良い成績を修めようという気持ちで高ぶり、他人の事をいちいち気にかける余裕を持ち合わせていなかったのが主な要因だろう。

こういうテンションは久しぶりに見るか。若いね～

休憩中は知り合い同士でひっきりなしにあれやこれや話し、授業中は興味津々の顔で齧り付く様に教師の話を聞いている。
それでも飽き足らず押しかけ女房のごとく質問攻めに赴く生徒まで出ている。俺としては引き気味なのだが、ここではそれが当たり前の反応のようで誰もかれもが当然の事として受け止めている。

まぁ模範生って事なんだろうけど……

盛大なあくびを噛み殺しつつ、俺は出会って早々変な世話の掛け合いをした相手、カシル・オージンに視線をやった。
カシルは生真面目な表情で魔術書を開いていた。ざわつく周囲とは完全に断絶された一個の世界を持っているかのような静謐さをたたえて、誰もが踏み入る事の出来ない一線を作り出している。

一度眠った後、カシルは嘘のように体調を取り戻し、それからは口を開かなかった。
あれだけしゃべりまくっていたくせに、一つも、何も言わなかった。からかってみても、からんでみても、まるでそこに俺がいないかのような無反応しかなかった。関わりたくないという意思表示で

あったが、どうにも俺には解せなかった。

何が要因でそんな態度を取るというのか。最初からその態度なら別段気に止めはしないのだが、最初の反応を見た後では違和感がありすぎた。と言っても、関わりたくないと意思表示をする相手にわざわざ関わるのも面倒なのでただ眺めるだけなのだが。

「キルミヤ！」
「あ、はいはーい。なんすかー」

教師の何度目かの呼びかけ――だったのだろう。目つきが剣呑だ――にようやく気づき、俺は暢気な返事を返した。
まだ若い教師は、ご立腹の様子で空に描かれた文字を指して言った。

「この効果を答えよ」
「分かりません」

即答。
あまりに早すぎるギブアップに、教師は頬を引きつらせた。

「……キルミヤ、もう少し考えてみろ」
「え、いや、本当分かりませんって。ちっとも」
「……私の話を少しでも聞いていれば分かるはずだが」
「え？　そうなんすかー？　あはは。ちっとも聞いてなかった。いやーすいません」

頭を掻き笑う俺に近付き、教師はおもむろに空をきった。
その瞬間、俺の身体は縫いとめられたごとく固まった。

えぇ……学生相手に空切り？　それはちょーっと大人気ないんじゃないんですか？

「そうしていれば嫌でも前を見ていられるだろ」

くすくすと忍び笑いがあちこちでもれる中、変な風が俺をとりまく。

あ。やべ。と思った時、

“いけない。君たちが動けば彼の立場が危うくなる”

ふっと風は収まり、誰も気づくことなく授業が再開される。

後ろを振り向く事は出来なかったが、俺は背中に感じる視線にため息をついた。

関わるなという意思表示をするくせに、これだ。

精霊とかいうやからの動きを、どうも少年は抑えている節がある。自分に何らかの魔術を扱われたり、危害を加えられようとすると決まって変な風が生まれ、その都度先ほどのような囁きが紡がれる。

屋敷に居た頃はこんな事は起こらなかったのだが、どうも周りにいるらしい精霊とやらは魔術に敏感に反応するようだ。

もし少年がその反応を抑えていなければそうそうに奇異の視線を受ける事になっていただろう。自分一人の事ならば別にそれでもいいのだが、パージェスという名を名乗っている為そうもいかない。

……なんか、むかついてきた。今度グランに会ったらぶん殴ろう。

よし、そうしよう。

心の中で固く誓い、俺はスムーズに実行出来るように授業が終るまで只管イメージトレーニングを敢行した。気付いたら授業が終わって術を解かれていたので、驚くほどの集中力を見せたと言って良いだろう。さすが俺。

それにしても固められたせいで、変に肩がこってしまった。ぐるぐると回してこりを解しながら椅子に座ると、俺の周りを取り囲むように同期生が数人集まった。

「お前、パージェス家の人間だそうだな」

そう言って侮蔑的な視線を隠そうともせず見下ろしてきたのは金髪碧眼のいかにもといった貴族ぼっちゃんだった。それを支持するかのように両翼に展開されるのは同じような色彩を持った、同じく貴族ぼっちゃん。

年はどれも少年よりは上のようだが、俺よりも若い。

「えーと。あんた誰？　知り合いだっけ？」

「誰が貴様などと」

金髪碧眼が口を開けば左右が追従した。

「そんなわけがあるか」

「フェリア様は元老院の円卓の一員、サジェス家の方。貴様などが同じ空気を吸うだけでも恐れ多いお方だ」

「そりゃすごい。それで？　その恐れ多いお方が俺に何か用？」

全く意に介さない俺に、取り巻きは鼻白んだ。

「ほう。僕が何者か分かってなおその態度か」
「何者って、ただの学生だろ？　用が無いんなら寝させてくれ。さっきの術のせいであんまし寝られなかったんだよ」

実際はイメトレに夢中で寝ようとしていた事を忘れていただけだったが、その辺を説明する義理もないので面倒くさいと手を振ると、フェリアなるぼっちゃんは鼻を鳴らした。

おぉ……鼻を鳴らすという芸風を生で見た。

「グランの弟と聞いたが……とんだうつけだな。貴様は」
「あいつは出来がいーの。俺は出来が悪いの。そんだけ」
「ふん。実の親にも見放されたのならば出来が悪いのは間違いないな」

実の親？　と、内心いぶかしむ俺。
そしてすぐに納得した。忘れていたが、自分は一応現当主の実子として扱われていたのだ。
何故に実子なのかと言葉を覚えた直後おっちゃんに聞いたら、ビビられた。生後一週間かそこらの記憶があるとはまさか思っていなかったのだろう。俺だって諸事情がなければ思わなかった。
それでもビビられながらもおかんが『何かあったら』そうして欲しいと手紙に残していたのだと教えてくれた。

俺の事を実子ではないと知るのはパージェス家に古くから仕えている使用人ぐらいなものなのだが、パージェス家は財政状況から使用人の新人さんはいない。従って、ほとんどの人間が俺は実子ではないと知っている。
だが、こうしてそれ以外の人間には実子という事で認識されている。

のだな、と初めて実感した。

……うん。思考力を大幅に使ってしまった。寝て回復しよう。

机につっぷし、ぐてりと寝る俺に興がそがれた坊ちゃんは背を向けたようだ。

「あーあ……お前サジェスを敵にまわすなよ？」

隣の席にいた、群青色の髪をした俺と同い年ぐらいの青年が苦笑交じりに囁いた。

俺は半目だけあけていた目をすぅっと細めた。

「なんだ、お前もそっちの人間か？」

俺の眠りを妨げんじゃねーとばかりに威嚇したら、パタパタ手を振られた。

「ちゃうちゃう。一応貴族と呼ばれる部類には属されるだろうけど末席も末席。

あいつらに言わせりゃ貧乏庶民と変わらんさ。

それよりお前、もーちょい真面目にしといた方がいいぞ。教師にあの態度は将来の職先が無くなる」

……似非関西人発見。

関西弁などこの世界に無いはずなのが、イントネーションがまさにそれで反射的に関西弁に脳内変換してしまった。

「……おい？　聞いとるんか？」

「あー平気。俺、働く気ないし」
「はぁ？　ここに来たって事は中央狙いちゃうのか」

やっべ。本当関西弁にしか変換されん。何だこいつ。

「ないない。あんたはそなの？」
「まぁ、稼ぎ頭として投資されたからなぁ。稼がないと家が潰れる」
「へぇ。そりゃご苦労様」
「お前は？　兄貴に続くんとちゃうのか」
「何で？」
「何でって、グラン・パージェスは出世頭やろ。そうなりゃ当然、家の人間がさらに登用されるんちゃうんか」
「やだよ。そんな面倒くさいの」

青年は目を丸くした。

「お前、珍しい奴やな」
「あんたはそーなの？」
「俺？　そりゃ家の再興を期待されて送り込まれたさ。実際は難しいやろうけど夢を見させるのも息子の勤めや」
「やるねー。俺なら逃亡してる」

青年は手を叩いて笑った。

「してないやろ。やる気がないくせに、逃亡せずに残ってる」

俺は頬を膨らませた。

「……かわいくない。むしろきもい」

ええ！？　そこだけ標準語ってどゆこと！？

内心の動揺を押し殺す俺。

「……難しい年頃に向かってそれは傷つくぞ。どーすんだ、傷が残ったら」

「野郎の傷は勲章だ」

「うわー。汗くさー」

「はいはい。冗談言ってないで移動するで」

「あれ？　移動だっけ？」

身体を起こして周りをみれば、残っているのは二人だけだった。

「お前次が何か分かってないんか？」

「メシ？」

「……分かった。興味が無いってのは本当なんやな。次は初の実技や。場所は結界場、寝てないで行くで」

襟首つかまれ、俺はずるずると引きずられていった。

それにしても、この青年も物好きだ。

さっきのような貴族の坊ちゃんたちの方が理解しやすいし、納得のいく言動を取ってくれる。が、この青年はわざわざ面倒な自分の相手を買って出ている。

お人よしを超えて馬鹿じゃなかろーかと思うのだが、軽口を叩きつつも真面目に面倒を見ようとするのでそれは言わないでいた。

遅れずに行くと――正確には引きずられて――、各々緊張した面持ちで整列していた。

俺と青年は後ろに並び――並ばされ――、教師の登場を待った。

俺が二つ目のあくびをして青年に殴られたとき、ようやく教師は現れた。

黒いローブを纏い、樫の杖をつきながら現れたのはいかにもそうですと言わんばかりの魔導師だった。

３０代ぐらいの男は、前置きも説明もなく唐突に蝋燭を取り出し、それに火をつけて見せた。もちろん、魔術で。そして蝋燭を配ると、同様の事をして見せるように言った。

生徒達は慌てて教科書を開いて炎を灯す術を探し始め、既に暗記しているものは早々に蝋燭に火を灯し始めていた。

見れば、早々のメンバーにはカシルも含まれ、彼は火を灯すと蝋燭を地面に置き、無表情でどこかを見つめていた。

壁を見てて楽しいのかねぇ。

「おい、お前も早く探せよ」

こずかれ、俺は隣で必死に教科書をめくる青年に気づいた。

「まだ探してるの？」
「何やってんだよ。お前もさがせよ」
「無理だって。俺、教科書持ってないし」
「はあ！？」
「まあまあ。こすれば付くさ」
「アホか！」

怒鳴られ、俺は肩を竦めた。

「わかったわかった。真面目にすりゃいいんだろ」

仕方がない。

俺はおもむろに蝋燭の前にしゃがみ込んだ。

青年は俺がようやく真面目に蝋燭に向き直った事でホッとしたらしく、改めて魔導書を開いた。

カチ　カチッ

「かちかち？」

青年が俺の手元を覗き込んできた。

「お前、何やってんの」

「何だよ、話しかけんな。結構難しいんだぞ。よっ」

何度目かのカチカチの末、俺の手元に小さな炎が灯った。

よし、ついた。さすが俺！

どうだとばかりに青年を見上げたら、顔面に魔導書がめり込んだ。

「！！！」

顔面抱えてごろごろ転がる俺

君……君ね、本の角って痛いって知ってる？　千ページは下らないぶっとい魔導書だよ？　その角だよ？

「誰がそんな方法で火を付けろって言った！」

いやーはっはっは。さすがに俺でもカチンとくる。人生二度目の俺でもきちんときた。

「知るかボケ！　方法なんか指示されてねぇだろ！」

「阿呆か！？　魔術でに決まってるだろこの馬鹿！」

「あ、馬鹿って言った奴が馬鹿なんだぞ。やーいばーか」

「お前はガキか！　さっさと真面目に火をつけろ！」

「真面目にやっただろ！　普通火打石っていったらおが屑とか枯葉とか、そういうのに火の粉を移して火を付けるんだぞ！　蝋燭にじかに付けるのって結構難しいんだぞ！」

「だーーー！　この馬鹿ガキ！　いいから魔術で火を付けろ！」

子供の喧嘩を始めた俺達の周りには、いつの間にか一定間隔の間が取られていた。

そして、いかにもといった魔術師の教師は俺達に歩み寄ると片手を挙げた。

「其はやすらぎの源　零々のゆえんたる汝をここへ」

ばっしゃん

「……」

「……」

突如頭から水を浴びせられ、俺達は沈黙した。

「キルミヤ・パージェス。

レライ・ハンドニクス。

着替えなさい。後で補習の日時を伝えます」
「はーい」
「……はい」
俺はこれ幸いにと、青年は歯噛みしてその場を立ち去った。

第十一話　魔法少女に必要なものは（前書き）

あっぷするのを忘れてました・・・すいません

第十一話　魔法少女に必要なものは

二人連れ立って寮に戻る道すがら、口げんかは継続。

「何で俺まで……全部お前のせいや」

何でか怒りの矛先をこちらへと向けてくる青年。

「騒いだのはお前だろ？」

言ったら、キッと睨まれた。

「どー考えたってお前のせいやろ！　もっと真面目にしぃ！」
「真面目に火を付けたじゃないか」
「どこが真面目や！　……あー……もういい。アホ臭くなってきたわ」
「なんだよーふっかけておいて」
「やる気が無いって分かってたんや。俺が大人にならな」
「うわっ一人だけ大人ぶってるよー。困っちゃうよねー俺だけ特別ーみたいなー」
「お前なぁ……」

どっぷりと疲労を滲ませた顔で肩を落とし黄昏始める青年。
これはちょっとからかい過ぎたかと俺は反省し、青年の気分が少しでも浮上するように明るく言った。

「そんな深く考えるなよ！　禿るぞ！」

「誰のせいや！！」

気楽に投げたボールが剛速球で返ってきた。

うむ。これだけ元気があればよいよい。

「だから肩肘張るなって～　どーせ魔術なんてノリと感覚が全てなんだからさぁ」

「ひとっつも使おうとせん奴に言われたぁないわ」

「つってもなぁ……魔術に魅力を感じないっていうか」

「はあ！？　何言うとんねん！」

「あ、最初はすげーなぁーと思ってたよ？」

手品師だと思ってたが。

そりゃまぁ某ＲＰＧ、某アニメ、某小説のごとくと、あらゆるジャンルのファンタジー業界において、魔法の二文字は欠かせず、それに対して憧れを抱く者も多く居た。職場に堂々グッズを持ち込み一人悦に入っている同僚も居た。

俺だって憧れと言う名の興味はあった。くそ恥ずかしい呪文だって使えるのならいくらでも我慢してやろうとさえ思えるぐらいには興味深々だった。

多勢に無勢を一発逆転。これぞ男のロマンだろう。

そんな状況に陥りたくないというそもそも論は見ない事にして、格好良さでいけば俺の中ではかなりの水準を維持している。

杖の一振りで並居る敵をなぎ倒す。無双だ。爽快だ。

その俺が今まで魔術の存在に気付いて何もしなかったわけがない。

俺だって試した。くそ恥ずかしい呪文だって真面目な顔して言ってやった。

「だけど、俺に魔術は向いてないんだよ」

がっくし肩を落として言ったら、青年は『何言ってんのこいつ』みたいな顔をした。

いや『何言ってんの』って、そのままだからさー。

「使おうとした事があるんか？」

「……ります」

鼻で笑われた気配。

何この心理的いぢめ！

分かってるよ！　師事なしにやろうとしても出来ないっていう一般常識は知ってるよ！

けど考えてみろ！　居候の俺が、「あの～実は魔術を習いたくてぇ～　（もじもじ）」とか無いだろ！！

既に化け物指定受けた後だったのに、いくらこっちの身体の可愛さ駆使しても、それこそ『何言ってんのこいつ』だよ！

てか、『こいつさらに化け物になる気か』だよ！

「そんなん出来るわけないやろ」

「っく。分かってる事を他人にも言われると無性にむかつく」

「拳握るな握るな。殴ろうとするな！」

スパンと頭を叩かれた。

あの……俺は殴っちゃダメで、あんたはおっけーってなして？

「一人で出来るわけがないんやから、これからやろ？　ここに入れ

たって事はちっとは勉強してたんやろ？　それを生かせ」

一向に俺の視線の意味に気付かず話を続ける青年。

まぁいいだろう。俺は大人だ。人生二度目の出来た大人だ。この程度で怒りはしないさ。

「勉強なんてした覚えはない」

「何を堂々と。そしたら試験はどないしたんや」

試験？

「……お前、受けてないんか？」

急に青年の目が不穏な形へと形態変化を始めた。

「そんなに見つめられても俺はノーマル。嬉しくない。つかキモイ」

「ふざけるとこちゃうわ！　なぁ！　ほんまに受けてないんか！？」

あんまり必死に言うので、記憶を引っ張り出してみる。

俺は自分からこの手の機関に接触した事はない。従がって俺自身が受けに出向いたという事は無い。

そしてニートで自堕落生活を送っていた俺の周囲でそんな事をしそうな相手はただ一人。

……あったな。

思い出した。思い出しましたよ。

女かと思うほど筆まめで、都に出てからもせっせと手紙を送ってきていたグラン。その手紙の中に魔術の基礎を問うものが何度も入

っていた。

何だ何だ～？　こいつも魔術に興味ある口か？　ぷぷ。一人で出来るわけねーじゃん。

とか思いながら、来るたびに適当な事を書いていた。

Q魔術の基礎となる元素を答えよ
Aすいへーりーべーぼくのふね　ななまがりしっぷすくらーくか

Q魔術を成立させる為に必要なものを答えよ
A愛と勇気と正義

Qまた、それはなぜ必要か答えよ
A魔法少女の基本装備だから

怒られた。

それでもって、何のために帰ってきたのか目の前に紙出されて、監視されながら三十枚にも上る問題用紙に回答させられた。

「あれだな……間違いなくあれだ」
「受けたのか？」
「遺憾ながら」
「なんでそこで遺憾になるんや」

だって学校とか今更めんどー

と、言ったらさらに殴られそうな気配がしたので、俺はごにょごにょと言葉を濁した。

「はー……まぁええわ。ちゃんと受けたっていうんなら、それだけの勉強してたって事やろ？
それを生かしたらええやんか」
「それとこれとは話が違うんだよ。言っておくが、魔術は使えた」
「な……ほんまか！？　なら！」
「使えるけど、使いたくないんだよ」
「……はあ？」

俺は『なんで？』という視線に耐えきれず顔を逸らした。

魔術はきちんと発動した。発動したのだが、結果が……俺、不器用さんでした。というだけ。
これはもう使えない。人前では絶対使えない。
それで泣く泣く魔導師になって千人切りルートは諦めようと決意していたのに。

「使えるんなら使えば――」

俺は青年の言葉を遮って口を塞ぎ、傍にあった木に押さえつけるようにしゃがませた。

第十二話　嘘つき？

突然口を塞がれ、覆いかぶさるように押さえつけられた。
いきなり何をするんやともがくと「静かに」と低い声が降ってきた。

キルミヤは薄い紫色の目を細め、周囲を探るように視線を走らせていた。
先ほどまでのふざけた態度とはまるで別人で、思わず手を払いのける事も忘れて凝視してしまった。

「お前はここにいろ」

そう言って寮とは違う方向へ走り出す。

「え、おい」

分けが分からなかったが、とにかくキルミヤを追った。
キルミヤはいつもの怠惰な挙動とは似ても似つかない動きで林の中を駆けてゆく。

こいつ早すぎやろ、隠しよって……

ようやく追いついた時、キルミヤは木の陰に身を潜めていた。

「どうし――」

キルミヤは俺の口をまたも塞ぎ、自分と同じように木の陰に引っ張った。

「何でついてきたんだ！」

小声で抗議するキルミヤに、眉間に皺を寄せ睨みつける。

「いきなり走り出すからやろ。どないした」

キルミヤは舌打ちをし俺の質問にも答えず木の陰の向こう側を窺った。

舌打ちをするのもそうだったが、焦る姿を見るのは初めてなような気がした。

大抵寝てるかわれ関せずでボーっとしているかの二通り。不真面目で馬鹿で阿呆のこの男がここまで狼狽えるとは、予想外だった。それだけに、何に焦っているのか視線の先を覗こうとしたら、すぐさま頭を押さえられた。

「どうも学院とは関係ない部外者が侵入しているようだ」

「は？」

あまり顔を出すなよと注意されて窺って見れば、確かに顔を隠した男たちが三人、小声で何かを話している。冒険者という類ではなく、明らかに裏側の類だと分かる。それに真っ当な来訪者であればこんな所でこそこそしている必要などない。

「なんやあいつら」

「分かんねーよ。けど……」

「けど？」

「誰だ！」

三人のうち一人がこちらに気づいた。

ぞくりと背中を悪寒が這い上がる。

魔術を一つも使えない学生の自分達が、見つかってただで済むわけがない。

逃げ切れるんか？

裏稼業の人間を相手に出来る訳がないと恐慌状態に陥る一歩手前の頭で考える。ならば、足の速いキルミヤを逃がして教師を呼ぶ。それしかない。教師が駆け付けるまで、とにかく逃げ続けるだけだ。

覚悟を決めた時、

「お前、ここから絶対出るなよ。いいか、絶対にだ」

「え、おまっ」

キルミヤは立ち上がり、止める間もなく陰となっている木から一歩踏み出した。

あ……あんの…あほうが！！

「……学院の生徒、か」

くぐもった声で呟く覆面の男。

キルミヤは薄い笑みを浮かべて男たちに近づいた。

敵うわけないやろ！　どないすんねん！！　今の内に助け呼べばいいんか！？　ってこいつ放置していけるわけないやろ！！

「おっさん達、学院の人じゃないよね～。すんげーあやしいしー」

俺の絶叫などどこ吹く風で、飄々とあの巫山戯た口調で話しかけている。

あいつは神経がいかれてるんとちゃうんか？　こっちは隠れてても足が震えて音を出さんようにするだけで精一杯やのに……

必死に恐怖を抑え込んで、少しだけ顔を出して様子を伺う。

覆面の男たちは視線を交し合っていた。どうする？　というように。

主格と思われる男は小さく頷いた瞬間、男たちは剣を抜き放った。

キルミヤは後ろに下がって距離を取りながら上着を脱いでよじると、振り下ろされた剣をあろうことかそれで受け止め絡めとった。絡めとられてもなお襲い掛かる男。キルミヤはすかさず剣を取り、男の蹴りを避けると懐に入って男の顎を剣の柄で殴った。

その後ろから、気を失った男もろともキルミヤを切り捨てる勢いの剣が振り下ろされる。

あかん！

「後ろ！」

キルミヤは俺の声に、気を失った男の胸倉を掴んで横に飛んだ。

「……もう一人居たのか」

覆面は呟き、姿を現した俺を見た。

「馬鹿が！　動くなって言っただろ！」
「うるさい！　危なかったやろうが！」
「俺は平気なんだよ！　お前に心配されるまでもないんだよ！　いいからとっとと逃げろ！」
「なっ！　お前を置いて行けるかぼけ！」

二人の覆面は視線を交わすと、一人はキルミヤに、もう一人は俺へと間合いを詰めてきた。

あかんあかんあかん！！

逃げようとしても足が地面に縫いとめられたごとく動かない。
俺は持っていた魔導書を投げつけるが、あっさりと避けられた。

「其は波動の素　零々のゆえんたる汝をここへ！」

突然キルミヤの声が響いたかと思うと、目の前を赤が躍った。

な……なんや！？

赤は炎。俺に襲いかかってきた男を飲み込み、さらに横手の林も飲み込んで物凄い熱風をまき散らせていた。

「其はやすらぎの源　零々のゆえんたる汝をここへ！」

ざあああああああ

続けてキルミヤの声が響き、空より大量の水が発生した炎の全てを消し去るように洗い流す。

俺は、キルミヤを見た。

だけどキルミヤは鋭い目で何かを睨みつけたまま。

視線の先には、服を焦がした男たちの姿がまだあった。

「お前らの相手は俺だろ」

声は地を這い空気を振るわせた。

少し巫山戯た調子の残る声。だけど俺は知らぬ間に、震える身体を押さえていた。

「貴様、白の宝玉の仲間か」

キルミヤは答えず、手にした剣を構えた。

「……退くぞ」

男は小さく言うと、倒れた男を抱えて林の中へと消えた。

キルミヤは男たちが消えた方角を睨みつけていたが、しばらくして手にした剣を捨てた。

剣を受け止める為に使った上着を拾い上げ、俺のところへと戻って来た。

「あーあ、ぼろぼろ……」

剣を受け止め穴が開いた上着を見てため息をつくキルミヤ。

「お前……さっきの何だよ」
「ほれ行くぞ。ここに居たら面倒だ」
キルミヤは俺の腕を掴みひきずるようにしてその場を離れようとした。
「なんだったんだよさっきのは！　お前……魔術」
「下手なんだよ。突っ込むな」
こいつ……本気で言ってるんか？
俺は耳を疑った。
あんな威力、学生ごときが出せるものじゃない。それどころか魔導師（エリート）団員だと言われた方が納得出来る。
「下手！？　あれで！？　どこがや！！」
「声でけーよ。あいつらは引いたと思うけどそんな騒ぐなって」
「あ……」
不安になって後ろを振り返るが、焦げた木々が見えるだけであの男たちは居ない。
「おいおいおい。だーいじょーぶだって。あれはぜってー引いたから」
「そう……なのか？」
「ぷぷ。こわがってやんのー」
ぐりぐりと頬を指で突かれ、俺は無言のうちにそれを叩き落とした。

「うるさいわ！　それより、さっきのはどういう事や」
「なにが？」
「とぼけんな。何で魔術が使えないふりしてたんや」
「あーひっぱるねぇ。しつこい男は嫌われるよ？　女の拒絶の言葉は半端ない威力なんだよ？」
「話かえんな。何で嘘ついてた」
「嘘？　嘘はついてないって」
「ついてるやろ！　魔術使えないふりして」

キルミヤはこっちが理性切れそうになりかけているのもお構いなしに気楽にパタパタと手を振った。

「してないしてない。使うのめんどーだから使ってないだけ。使えないなんて言ってないだろ？」

こいつ……は。

こいつはどれだけの人間が魔導師になれるのか、魔術を操れるのか知っているのだろうか。
魔術を操る素質を持つものが数百人に一人と言われ、その中で教育を受ける事が出来るものはホンの僅か一握りだ。
学院に通えるという事は、それだけ恵まれた環境に居るという事になる。通いたくても通えない人間は沢山いる。俺にしてみても、家の再興という使命のもとに相当な無理をしてここに通わせてもらっている。それなのに。

「んな怖い顔で睨むなよ……あのな、面倒だから言うけど、本当に巫山戯てるつもりはないんだよ」

俺の怒気に気付いたのか、キルミヤは少しだけ弱ったような顔を

した。

「へぇ、そうなんか？」

「さっきの術、俺はあそこまででかくしよーなんて思ってなかったんだよ。だけど、制御が効かない。小さいものになればなるほど制御から外れるから、人前じゃ出来ないんだよ」

視線を逸らして答えたキルミヤは、気まずそうに、加えて幾ばくか恥ずかしそうだった。

「もしかして……だからか？　授業で」

「細かい作業は昔から苦手なんだよ。ほっとけ」

蝋燭に火打石で火をつける事が出来るくせに、細かい作業は苦手だという。

なんやそれ。

「何笑ってんだよ。気色悪ぃな」

「何でもないわ。……なぁ、さっきの奴らを知ってるのか？」

キルミヤは黙り込み、しばらくしてから首を横に振った。

「分からない。多少の心当たりはあるけど、どうもそれとは違ったような……」

「心当たり？」

「グラン関係だよ」

「グラン……お前の兄貴か。あぁなるほどな。出世頭だから敵は多いかもしれんな」

「だけど俺の顔を見ても反応してなかったんだよねぇ……。ま、

なんにしてもさっきの事は誰にも言うなよ」
「何でや？　教師には話さな。そうすれば警備を強化してもらえるやろ。犯人だって捜してもらえる」
俺の言葉にキルミヤは微妙な顔になった。
「それは無駄だろ。ここにはあのサジェなんとかってぼっちゃんだとか、お偉いさんの子供がいるんだ。ざるな警備をしてやないさ」
「だからと言って、このままにしておくなんて出来るか？　お前だって狙われるかもしれんのやで？」
キルミヤは動きを止め、俺を見た。
「……な、なんや」
「はぁ……まぁ、そうだよな。俺たちが標的にされるかもしれねーし。わかったよ。お前の好きにしろ。但し俺の魔術については黙っててくれ」
「何でや？　教師に相談すればいいやろ」
「なんでもだよ」
「……なんやそれ」
相談すれば制御出来るように訓練をつけてもらえるかもしれないのに、このやる気のなさはなんなんや……
「さて、さっさとメシメシ」
早々に日常に立ち戻ったキルミヤは、『補習』の事などきちんと忘れ去っているのだろう。
一緒に襲われたというのに、あっさりと日常に帰ってゆく能天気なその後ろ姿を見ていると、侵入者について悩んでいる俺が馬鹿み

たいに思えて、笑いが出てきた。
命を狙われて身体を動かせない程の死の恐怖を味わったというのに、もう笑えている自分が可笑しくて、さらに笑いがこみ上げてきた。

「お前そればっかりやな。補習の事忘れるなや。それ以前に着替えやけど」

キルミヤに追いつき、スパンと頭を叩いて痛がるふりをしたところを襟首を掴んで逃亡を防ぎ、ずるずると進路を食道から寄宿舎へと修正して引き摺って行った。

第十三話　いいえ小心者です

俺は青年の口を塞ぎ、身を潜めた。

例の精霊さんとやらが運んでくれる声やら音は、体力が戻った後は元気よく復活してくれた。

以前ほどの喧しさでないのは救いだったが、それでも授業中に教師の話をまともに聞く気も失せる程の威力はある。

基本的に、俺にとってはうんざり要素の超高性能地獄耳だったが、ごく稀に役に立つ事もある。

?まだ見つからないのか？

?申し訳ありません。舎の方には……？

?結界場かと。ここまで入って特定出来ないとなると？

?他にも同様の箇所はあります？

一言で表すなら、不穏。

数ある雑音を電源オフにして聞き流しているが、その声は嫌に耳についた。

言葉自体は咎められるようなものではない。が、声の質とでも言うのだろうか。それが不安を掻きたてたのだ。

それにしても結界場かぁ……

結界場には同期生がまだ授業をしているだろう。本来なら、俺も

そこに居る時間だ。

いやぁでもなぁ、俺がらみじゃないよなぁ……？

嫌な汗を掻きながら、一先ず声の主が近くに居ない事を確認していると青年がもがき出した。

「静かに」

ここで見つかって、青年を庇いながら複数人勝負するというマゾい趣味は持ち合わせていない。

「お前はここにいろ」

下手に動かれて鉢合わせするよりはこのままジッとしていた方が安全だろう。

その間に相手を見つけて様子を伺えば誰が目的かも検討つく。と、思った。

伊達に雑音に苛まれ続けていたわけではなく、ある程度は音の発生源を割り出せる。さすがに目の前というか、周囲の音かはるか彼方の音なのか区別がつかなければ日常生活は送れない。そこまでの道のりは今さら思い出したくもないが。

過去の黒歴史をちょっぴり思い出しかけていた俺は、人の気配を感じて速度を緩めそっと木陰に身を寄せた。

？結界の可能性があるのは？

？療養室と教師塔、それから結界場です？

？三手に分かれますか？？

大当たり……

覗いた先にはご丁寧にも顔を隠した男が三人、ぼそぼそと囁き合っている。どこからどう見ても堅気の人間ではない。

どーしよー。どーしよっかー。どーしょっかなー。

あぁ俺、昔に比べて呑気になってきたなぁ。ガキの頃は慌てまくっておっさんのとこ駆け込んで呆れられて。

普通は焦るよな？　ガキの俺の反応間違ってないよな？　俺が呑気になったのは環境のせいであって俺は悪くないよな？

うんうん。俺悪くない。

自問自答で一人満足感に浸っていると、有り得ないものが視界に飛び込んだ。

群青色の髪から雫を垂らしたままの、おせっかい青年が息せき切らして走ってくる姿。

なしてー！！？

「どうし――」

俺は素早く奴の口を塞いで木陰に押さえつけた。音を立てなかった俺を褒めて欲しい。本当に、褒めて欲しい。

「何でついてきたんだ！」

青年は空気を察してか今度は抵抗を見せなかったが、そのかわりとばかりに眉間にくっきりと皺を刻んで睨んできた。

睨むな。睨むのは俺の方だと言いたいのを我慢して口を塞いだ手をどける。

「いきなり走り出すからやろ。どないした」

青年にとっては説明不足だったらしい。

俺の所為かーーー！！

？あまり時間はない？

あぁくそ……あちらさんは動こうとしてるし……

焦っているというのに青年は緊張感の欠片も無く頭を出そうとしたので慌てて押さえつける。

もう一度睨まれ、仕方なく事情を説明する事にした。

「どうも学院とは関係ない部外者が侵入しているようだ」

「は？」

突拍子もない話に目を点にした青年。

百聞は一見に如かず。論より証拠とばかりに、あまり顔を出すなと注意して様子を見させる。

「なんやあいつら」

ようやく青年も事態を理解してくれるが、そんな『どういう事だこれは』という顔を俺に向けないで欲しい。

「分かんねーよ。けど……」

「けど？」

「誰だ！」

うげっ！

うめき声はかろうじて抑えたものの、勘づかれてしまっては隠れていても仕方がない。

青年を見れば、顔色が面白いぐらいに急降下して真っ青を通り越し真っ白になっている。

さぁこの青年に向かって逃げろと言ってきちんと逃げ切れるだろうか？

答えは明白だ。俺自身が恐慌状態に陥った事があるから言える。高確率で、身体がまともに動いてくれない。

その状態で覆面男の内一人でも追われたら、まず逃げ切れない。

どーせならこういう場面は美女がいーんだけど……

「お前、ここから絶対出るなよ。いいか、絶対にだ」

「え、おまっ」

青年を置いて俺は木陰から姿を現し、相手に認識させた。

男は三人とも剣を履いている。こちらは素手のみ。

今さらだけどまずくない？　ねぇまずくない？　これ、死亡フラグ？

「……学院の生徒、か」

くぐもった声で呟く覆面の男に俺は言いたい。
学匠である青色の上着を着ている者で、学生以外に何があるのだと。あんたのボキャブラリーは枯渇しているのかと。

言ってもスルーされそうなので、俺は絞ったらたっぷり水が出そうな上着を外しつつ、男たちの左手に移動するようにゆっくり移動する。

「おっさん達、学院の人じゃないよね～。すんげーあやしいしー」

俺の軽口に覆面の男たちは視線を交し合っていた。殺るか？　と。リーダー格と思われる男が視線で肯を現し小さく頷いた瞬間、男たちは剣を抜き放った。

あはははは。きたよ。まじできたよ。やっべ……

俺は笑いそうになる膝に力を入れ、接近してきた男の間合いを外すように後方に下がりつつ途中まで脱いだ上着の袖を勢いよく抜いてよじり、振り下ろされた剣先を受け止めつつぐるりと一巻して剣の腹に肘を当て、そこを支点にして身体を捻り相手の手から剣を放させる。

それでもプロはプロ。戦意を失うどころか増して蹴りを繰り出してくるのを避けて、手から離れた剣を掴んで懐に入り距離を取られる前に剣の柄で顎を下から思い切り殴りあげる。

まずは一人だが、よっぽどお仕事大事なのか味方ごと殺ってしまおうと後ろから襲いかかってきている気配に溜息が出る。でも連携はあまり取れていない。リーダー格の男が連携に加われば逃げ道が無くなりそうだが、俺の事を過少評価してくれているのか動こうとしていないので、これぐらいなら大丈夫だろう。

「後ろ！」

え！？

青年の声がした事に一瞬反応が遅れるも、俺は気絶した男を掴んだまま横手に飛んで背後からの攻撃を避ける。

「……もう一人居たのか」

リーダー格の男は呟き、姿を現した背年を見た。

このっ……

「馬鹿が！　動くなって言っただろ！」

「うるさい！　危なかったやろうが！」

怒鳴ったら怒鳴り返された。

え？　え？？　ここ俺が怒鳴られるとこ？

ちょっと動揺しつつ、でも素直に受け取れない年頃（身体年齢）の俺はさらに怒鳴る。

「俺は平気なんだよ！　お前に心配されるまでもないんだよ！　いいからとっとと逃げろ！」

「なっ！　お前を置いて行けるかぼけ！」

青年。そーいうセリフは女の前で……言っちゃだめだな。言うって事は女を戦わせてるって事だよ。何してんだよ男が。

気絶した男をポイ捨てしてると残った覆面男二人は視線を交わし、リーダー格は俺に、もう一人は青年へとロックオン。
俺は一気に間合いを詰められて一瞬にして鍔迫り合いに移行した。一撃を受けた瞬間にびりびりと手が痺れ、せり合う今も馬鹿力で押され、少しでも力を抜けば剣ごと叩き切られそうな勢いだった。
それなのに視界の奥では魔導書を投げつけるだけで精一杯の青年の姿が入る。
命をかける事など貴族の青年には無かった事だろう。本を投げるという事だけでも動ければましなのかもしれないが、結果が伴わなくては意味が無い。

ああもう……

俺はガクンと膝をつき、男の重心が前のめりになった瞬間横に転がり起き上がりざまに剣を投げつける。追撃をかけようとした男は難なくその剣を弾くが俺にとってはそれで十分。手のひらを天に突き出し叫ぶ。

「其は波動の素　零々のゆえんたる汝をここへ！」

声に応じるようにして俺の手のひらに火炎が生まれる。
驚きにか目を見開く男に向かって、俺はそれを全力投球した。

ごうっ！！

唸りを挙げて業火へと膨らんだ炎は一瞬にして男を喰らい、さらに青年に迫っていた男も飲み込んで、その向こうに続く林の木々も包んでさらなる姿へと変貌しようとする。
俺はもう一度手のひらを天に突き出し叫んだ。

「其はやすらぎの源　零々のゆえんたる汝をここへ！」

ざあああああああ

今度は叩きつけるような雨が一体を襲い、広がる炎蛇を消し去る。

炎が通過した後は黒く炭化していたが、残念な事に男の姿はあった。

さすがに無傷というわけではなく、焦げた服の間から覗く皮膚は赤く爛れている。

「お前らの相手は俺だろ」

これ以上やるなら、俺は手段を選ばない。

俺の本気に、リーダー格の男は目を細めた。

「貴様、白の宝玉の仲間か」

俺は答えず、弾き飛ばされていた剣を拾い、構えた。

「……退くぞ」

リーダー格の男が小さく言うと、もう一人が気絶した男を抱えて林の中へと消えた。

俺は黙ってそれを見、気配が学院から遠のいたところで手にした剣を捨てた。

固まったままの青年の所へ行こうとして、上着が落ちているのに気付いて拾っていく。

「あーあ、ぼろぼろ……」

なかなかに高価らしい学匠の上着は、広げてみると刃を受けたところが切れて穴が開いていた。
荷物の中に用意されていたのは二着なので、もう一着が駄目になったら面倒だ。

「お前……さっきの何だよ」
「ほれ行くぞ。ここに居たら面倒だ」

さっきの炎といい水といい、遠目でも派手に見える。ぐずぐずしていると教師達が駆け付けてしまう。
俺は青年の腕を掴みその場を離れようとした。

「なんだったんだよさっきのは！　お前……魔術」
「下手なんだよ。突っ込むな」

心底突っ込んでほしくない。
分かっていたから使いたくなかったのだ。

「下手！？　あれで！？　どこがや！！」
「声でけーよ。あいつらは引いたと思うけどそんな騒ぐなって」
「あ……」

不安になったのか、後ろを振り返りきょろきょろとしている青年。

あ、まずった。まだ恐慌状態に近いわこいつ。

「おいおいおい。だーいじょーぶだって。あれはぜってー引いたから」

盛大に呆れて見せれば、怯えた目が俺に救いを求めるように向けられる。
これが美女だったら――美少女でも可。幼女……も、可――ガッツリ攻めに入るところなのだが、不幸にも相手は青年。

「そう……なのか？」
「ぷぷ。こわがってやんのー」

びびりまくっている青年の頬をぐりぐりと突いてやると、凶悪な目をして叩き落された。
地味に手が痛かった。

「うるさいわ！　それより、さっきのはどういう事や」

どういう事も何も事の成り行きは青年と一緒に見ているのだから、それ以上はない。
何を言わんとしているのか分からず首を傾げる。

「なにが？」
「とぼけんな。何で魔術が使えないふりしてたんや」

あぁそっちかと納得する俺。

「あーひっぱるねぇ。しつこい男は嫌われるよ？　女の拒絶の言葉は半端ない威力なんだよ？」
「話かえんな。何で嘘ついてた」

……嘘？

「嘘？　嘘はついてないって」

ないない、本当ない。
俺嘘つかない。
嘘つくイコール後が怖い。
俺チキン、イコール嘘つかない。

「ついてるやろ！　魔術使えないふりして」

あぁーなるほどね、君の中ではふりも嘘だという事かぁ～
そう言われちゃうとそうなんだけど、でも使えませんって自己申告するような言動は取ってないつもりなんだが。

「してないしてない。使うのめんどーだから使ってないだけ。使えないなんて言ってないだろ？」

確認してみるが、青年の凶眼は悪化の一途をたどるばかりで改善傾向は一向に見られなかった。どころか、なにやら黒いものを滲ませて来たので俺の本能がヤバいと訴え、慌てて言葉を追加する。

「んな怖い顔で睨むなよ……あのな、面倒だから言うけど、本当に巫山戯てるつもりはないんだよ」
「へぇ、そうなんか？」

青年の笑みが黒すぎて怖い。生ぬるすぎて怖い。
あまりに怖くて、俺は言う気ではなかった事までしゃべってしまった。

「さっきの術、俺はあそこまででかくしよーなんて思ってなかったんだよ。だけど、制御が効かない。小さいものになればなるほど制御から外れるから、人前じゃ出来ないんだよ」

この火と水の魔術、元はさっき授業で見たように些細な効果しかない初級魔術に位置する。それがどこをどう間違えばああなるのか俺自身にも分からないが、俺がやるとああなる。授業中に大真面目にやろうものなら蝋燭一本どころか何人燃やすか分からない。

つまり、千人切りコースは無理。味方巻き込み自爆コースなら可。という無能な俺。

「もしかして……だからか？　授業で」

「細かい作業は昔から苦手なんだよ。ほっとけ」

俺が視線を逸らせていると、くすくすと声が聞こえ、見れば青年が呆けた顔で笑っていた。

「何笑ってんだよ。気色悪ぃな」

「何でもないわ。……なぁ、さっきの奴らを知ってるのか？」

笑われたのはまぁいいとして、俺は心当たりを一つずつ照らし合わせてみる。

あの手の問題を引き寄せるのは俺ではなくてグラン。これまでにも何度かパージェス家の周りをうろちょろしている者は居たが、どれも偵察という感じですぐにグランの手の者に潰されていた。

「分からない。多少の心当たりはあるけど、どうもそれとは違ったような……」

「心当たり？」

「グラン関係だよ」

「グラン……お前の兄貴か。あぁなるほどな。出世頭だから敵は多いかもしれんな」

「だけど俺の顔を見ても反応してなかったんだよねぇ……。ま、

なんにしてもさっきの事は誰にも言うなよ」
「何でや？　教師には話さな。そうすれば警備を強化してもらえるやろ。犯人だって捜してもらえる」

そりゃあ捜すだろうが、相手が相手ならそれも意味が無いだろう。
それに学院に対する行為でないとなれば、各家の問題で、そこは自分ところで後始末してほしい。
学院の責任もあるかもしれないが、それに振り回される他の生徒はいい迷惑だろうし余計な不安を与える事になる。

襲われるかもしれないっていう圧迫は結構きついからな……

無駄と思いつつ、俺は反論してみた。

「それは無駄だろ。ここにはあのサジェなんとかってぼっちゃんだとか、お偉いさんの子供がいるんだ。ざるな警備をしてやないさ」
「だからと言って、このままにしておくなんて出来るか？　お前だって狙われるかもしれんのやで？」

……あ、そゆこと。

確かに目撃者の俺と青年は口封じに狙われる可能性はある。俺はグランの事があるから今更気にもしないが、青年にとってはとんでもない話だ。

「……な、なんや」
「はぁ……まぁ、そうだよな。俺たちが標的にされるかもしれねーし。わかったよ。お前の好きにしろ。但し俺の魔術については黙っててくれ」
「何でや？　教師に相談すればいいやろ」

恥をさらせと？　冗談ではない。

「なんでもだよ」

「……なんやそれ」

「さて、さっさとメシメシ」

それ以上の追撃を遮って俺は元気よく歩き出した。

「お前そればっかりやな。補習の事忘れるなや。それ以前に着替えやけど」

頭を叩かれ、襟首掴まれて愛しの食堂から遠ざかってしまう俺。

……そろそろ、いいかな？

……いいよね？　もういいよね？

俺はずるずると引き摺られながら、長く息を吐いた。

緊張を解いた途端、ガクガクと膝が笑いだした。

第十四話　要らないオプション

あ～やばかった。
あぁいう切った張ったは俺は向かない。デスクワークならどんとこいだ。

本当にどんと仕事を置いてくれた閻魔様は鬼だった……自宅の存在意義が掠れてたな……

こちらでは本当の意味でのデスクワークは限られる。流通、産業、工業、農業、畜産、全てが人の手に頼るためデスク中心に仕事をする人間は殆ど居ない。居るとすれば高官ぐらいだろうか？
就職するなら窓際デスクワークがいいなと思うけれど、そちらの道は果てしなく遠い。仮に成れたとしても国家に雇われるのは何かと面倒そうなので却下。
それならば身体を動かして働く方が気分も良く性にあっている。もちろん安全な仕事で。
でも地元だと身分が邪魔して職にはつけず――というか、基本的に職は親のを継ぐ形となっている為、領主の実子とされている俺が働ける所なんて最初から限られている。家の仕事か、王宮へ出仕するか。
パージェス家の仕事をすると周りが顔を顰めるのでアウト。王宮へ出仕するなんてチキンの俺が出来るはずもなくボツ。そしていつの間にやらこんなところへ放り込まれている現状。
グランのご期待には添えそうにもないが、勝手に期待したのは向こうなのだから、ここでどれだけ俺が落ちこぼれであろうとそこまでは知ったことではない。最低限、人としての常識ラインは保とうと思うが、それ以上は知らん。

段々むかつきが再燃してきたが、いい加減よれよれだ。
剣を向けられるなど、前世で例えれば夜道で笑ってるオッサンに包丁向けられるぐらい怖い。獲物が長い分恐怖心も増す。前世の記憶保持者の転生者ならば何か特殊能力持っとけよと思うが、あるのは地獄耳と疲れやすい身体。

地獄耳と疲労し易いって嫌がらせのオプションかよ。

地獄耳はどうやら精霊さんとやらが関係しているようなので何かの能力的なようなものだともとれるが、実益と不利益を天秤にかければ不利益に大きく傾く。

加えて疲労しやすいこの身体。
今年十七となる年齢を考えれば、二十歳超えて仕事をしていた前世よりスペックはいいはずなのに、その時より格段に身体が疲れるときた。

いや……まぁ……前の生は疲労を気の所為だと決めつけられてただけかもしれないけど……

気の所為だとしても、実際に身体が重くなって動かしにくくなるので性質が悪い。
七歳とか八歳とか、まだ小さい頃はこういう事は無かったのだが年を経るにつれて悪化している。かといって、どこか具合が悪いわけでもなく、たらふくご飯を食べれば回復する。もしくは糖分を摂取すれば。

あれ？　ただの成長期？　いじきたないだけ？

う～んと前世の十七歳、高校生の時を思い返してみるが、何か馬

鹿やっていた事しか思い出せず比較にならない。
ただ、買い食いはよくしていたので推測はあたっているのかもしれない。こちらでは高カロリーな食事はおいそれと口に出来ないので。

うんうんと考え事をしているうちにいつの間にか自分の部屋に放り込まれていた。
暫く床に寝転がっていたが、いつまでもこのままというわけにもいかない。へたばっている身体をずりずりと引き摺って引き出しから皮袋を取り、中から薬包を取り出して中身を口に入れる。口の中に広がる甘味を飲み込んで一息。
あのスレンダーさんが砂糖（コレ）をくれたのには驚いた。純粋な糖は滋養剤で値段も張るのに、一介の学生にあんなにも簡単にくれるとは思わなかった。出来れば定期的に頂きたいぐらいなのだが、こんな高級品をそう何度もくれるのだろうか？

「着替えた――何やってんねん」

俺は寝転がったまま入ってきた青年を見上げ指をさした。

「部屋に入るときはノックする。常識だろ」
「はあ？　今更お前が常識言うな。寝転がってないで着替え。ほらほら」

青年に急かされ、しぶしぶ俺は身体を起こしてもぞもぞと着替えた。
それを見ていた青年が深い溜息をついていたので、俺は親切心を出した。

「溜息ついたら幸せ逃げるぞ」

「誰のせいや」

コンマ一も無い綺麗な即答は俺に匹敵していた。

くっこの短時間でここまで技を磨いて来るとは……あなどれん……

「お前……今アホな事考えたやろ」

「はぁ～何いっちゃってんの？　なんも考えてねーよ。なになに？　お前の事でも考えてたとか思ったわけ？　やっだー自意識過剰ー」

「じ……じいし？　なんでもええわ。おちょくってないでさっさと行くで」

「は？　どこへ？」

「どこって、ヴェルダ先生のとこや」

「ヴェルダ？」

「……さっきの、実技の担当教師や」

「なんで？」

「なんでって」

俺はパタパタ手を振って青年の言葉を遮った。

いやいや、青年の真面目はよく分かった。それを止める気はないのだが、ちょっとね、俺にも限界というものがあるというか。

「俺もー眠いのよ。ほんともー起きてらんないぐらい眠くって眠くって、考えてみれば俺今日ほとんど寝てないわけだ」

「居眠りを睡眠に含めんな」

「ええ！？」

「驚くとこちゃうわ！！」

「だって！　それじゃあどこで寝ろと！？」

「夜！！！　夜以外にあるかあ！！！！」

「ふっ……青年はおこちゃまだな」

「何!?　何の話してんの!?」
「え?　聞きたいの?　もー仕方が――」
「するな!!　言うな!!!　聞きたない!!!!!」

段々と興奮してきたらしい青年をどーどーと馬にするように宥めると益々興奮されてしまった。

「落ち着けよ。発情するなって」
「するかっ!!」

頭を叩かれ、俺は叩かれたところを掻きながらそれでも人生の先輩として忠告した。

「ったいなー。いきなりはだめだろー。もっと丁寧に優しくだな」
「変な言い回しすんな!」
「え?　やっだー。何想像してんのー。きゃー不潔よーへんたいー」
「お……おまっ」

青年は顔を赤くして口をぱくぱくさせている。

面白い。実にからかいがいのある奴だ。と、遊んでいる場合ではない。限界というのは冗談でも何でもない。

「悪い。ほんと寝させてくれ。後で叱られでもなんでもするから」

言ってさっさとベッドに潜り込もうとして足元がふらついて豪快ダイブを決めてしまった。

「……お前、さっきので」

急に声に不安が混じったが、俺の意識はもう離れかけている。

「いんや～怪我はしてないよ～」

「怪我以外にあるんか？」

こいつ……微妙に鋭いな

と、思ったところで俺は気持ちよく枕を抱き込んで眠っていた。

青褐色の真っ直ぐな髪がさらりと顔に落ちる。
眠るその顔は見慣れたもので、しかし何時まで経っても慣れないと俺は思う。起きている時は言動が邪魔をしていて造作に気付かせない為、眠っているその顔が一番、元の造作が分かってしまうのだ。

にやにや笑いを浮かべず、呆れた表情も浮かべず、静かに眠る無防備なその顔は、すっきりとした鼻梁に薄い唇、形の良い眉に涼やかな切れ長の双眸。色は白く肌は深層の令嬢のごとくキメ細やかで、ひょろりとした身体に長い手足。
痩せすぎのきらいはあるが、間違いなく麗人と言われる整った容姿を保有している。だが、それだけではない。

貴族には見目の良い者は多い。サジェス家の者もそれに含まれる。金髪碧眼という貴族で持てはやされる色彩を持つフェリア・サジェスも上の兄たち程ではないが、顔良し家良し将来性在りの三拍子そろった嫁ぎ先候補の上位にあがっている。
しかし、キルミヤ・パージェスはそういう類とは違った。

薄い紫の瞳を細め、窓の外を気だるげに眺めていたその姿は孤高。他者を寄せ付けず、ただ一人己の道を見据え進む気高い狼。

そんな印象を、初めて会った時に受けた。
どこか現実離れをしているようで、別の世界の住人のような空気があって気になって目で追っていた自分が居た。

蓋を開けてみればどこが孤高、どこが気高いのだと己を罵倒してやりたいが、それでも眠っている時は同じような印象を受けてしまう。近寄りがたく、触れてはならない存在のように。

「お前の兄も似ているんかな……」

もしそうなら出世頭として噂に名高いグランの事も、その噂通りなのかもしれないと頷ける。

周囲の出方を伺い、虎視眈々と狡賢く立ち回る普通の貴族には無い異質な空気。もしそれを兄も持っているというのなら目立つだろう。そしてそれがプラスに働けば、人目につき出世のチャンスを掴んでいける。

「お前もなんやかんや言いながら、そっちに行くんかな……」

あれほど高威力の魔術を操ったキルミヤであれば間違いなく、その能力を高く買われるだろう。自分では行けそうにない世界へと楽々行ってしまうのだろう。

なんとなく置いて行かれるような悔しい気持ちもあったが、巫山戯た言動のキルミヤがそうなった時もこのままでいるのか見てみたい気持ちもあった。

第十四話　要らないオプション（後書き）

知り合いに２７時間勤務という笑える数字をたたき出した人がいました。
特定の職業では「あ～あるね～」だそうです。

さすがにそこまでではないですが、作者は先週から今週にかけて息絶え絶え状態。何度徹夜を覚悟したことか……帰っても呼び出し頂きましたし……

皆様も睡眠だけはきちんとお取りください。

第十五話　クロワッサン

魔道学院へと放り込まれてただ一つ良かったと言えるのはこれだ。

肉っ気さいこー！

パージェス家は財政難。グランがいくら出世街道に乗り始めているといっても、長年積りに積もったものがたかだか数年で振り払えるはずもなく、ガッツリ肉っ気のあるものは殆ど食卓に出なかった。

飢え死にする事はどうにか無かったが、それでも居候の身としてはちょーっとばかり悪いなぁと思っていた。何の役にも立たない生産性の無いお荷物を抱える程の余裕は無いと分かっていた。

グランには何でそんな食事しか出さないのだとキレられたが俺に

キレられても困るし、てめぇの家の財政状況具合把握しろと突っ込みたい。それにたらふく食える時点で恵まれているので文句の出ようはずもない。

はずもないが――やっぱり肉っていいねー！

もしゃもしゃと肉の塊を口の中で砕く。

肉の、塊を、が重要。

何？　肉の塊って何？　肉って塊なの？　塊だったの？　塊になっちゃうの？

まってまってまって、なんかうまうまな汁が口の中に広がるんですけどー!?

なんすかこれ!?　なんすかこれって!!?　――あ、うますぎて涙出てきた。

「……毎度すごい顔するんやな」

青年が疲れ切った顔でフォークを置くので、すかさず俺はリッテ――牛に似た生き物で豚の味――の香草ソテーをかっさらい、奪い返されてなるものかと口の中に入れてしまう。

「あ！　何でとるんや！」

「いーだろー　ほーせいっはいあるんだし」

「良くないわ！　口に物入れてしゃべんな！」

「どこぞのおかんかおまえは」
「早っ！　呑みこむの早っ！　お前の口どうなってんのや！？」
「はっはっは。地元ではまさに歩くばきゅーむかー……もとい、ブラック最終兵器ホールと呼ばれていたのだよ」

あっぶね、ばきゅーむかーて真逆だよ。やべーよ俺、脳細胞死んできたか？　通算四十四年も酷使すれば……そういや何で前世の記憶維持してんだろ？　脳細胞が赤子のものならそのなかに前世の記憶が保管されてるなんて事はないよな？　細胞分裂繰り返してる最中に電気的信号がどーたらこーたらで造り上げられたのが前世の記憶だったりしたらかなり恥ずかしいぞ俺。さんざん前の生は～とか繰り返しておいて実は思い込みでした。とか痛い子だろ。

「最終兵器なぁ……」

三回目のおかわりをしてきた俺は何やら呟いている青年を気にせず、三度目の合唱をしてうまうまな夕食たちを口の中へとせっせと運ぶ。

「お前、身体の調子はいいんか？」
「はにが？」
「だから呑みこんでからに」
「お前のタイミングが悪いんだろー」
「……っ当に早いな」
「なんだよなんだよ。何つっぷしてんだよー。髪がごはんたべちゃうぞー」
「食べるわけないやろ」
「きみきみ、人に注意しておきながら髪がごはんに、おいしそうなごはんに、すごくおいしそうなごはんに、触れてもいいと？　それはマナーに反してないと？　人の道に反してないと？」

「お前の突っ込むポイントがわからへん……」

疲労困憊ここに極まれりという顔で片肘ついて食事を再開する青年。

そうそう。ご飯は頂くものだ。粗末にするものではない。

「ここ、いいかしら？」

グリーンサラダとドルト――牛肉っぽい何か――の煮込みをエピ――麦の穂の形をしたパン――を挟みつつバランスよく食べていていると声がした。

顔を挙げれば、おなじみ貴族（金髪碧眼）の十三四頃の少女が居た。成長途中といった感じで凹凸に乏しかったが自己主張はかなりでっぱっているようで、視線を向けたままノーリアクションの俺を軽い苛立ちを込めた目で睨んでいる。

ここは食堂で、学生は決まった時間になると適当な席で食事をする。第七学年まである学院の総生徒数は二百弱。従って食堂もかなり広い。広いのは食堂だけではなく魔道学院そのものだが、とにかくわざわざ相席をしなければならない程席が埋まってしまってはいない。現に彼女のご学友と思われる数少ない女子生徒たちがちらちらと近くの席からこちらを伺っており、そこには丁度一席空いている。

「あっちじゃないの？」

青年もコクコクと人形のように首を縦に振っている。

奴が何を考えているのかは知らないが、俺としてはバイキング形式を最大限に生かしてウェイターとして培った技術を活用し並べら

れるだけ並べて置きたい。今は四度目のおかわりに備えてラスト二皿を残し食器は重ねて片付けてしまっているので、空いているように見えるが、俺にとっては空いていない。

「いいのよ私は――」

「っていうか、何でお前も俺の前に座ってんだよ」

奴がいなければもっと料理を並べられるのに、ちょっと皿から肉をくすねるだけで許している俺はなんと心が広いことか。

「え、今更!?」

「今更もなにもあるか。お前がいるから皿がおけん」

「はあ!? こんだけ置いておいていうんか!?」

前菜から既に五パターンも存在していたため、全料理制覇するために片っ端から置いた皿の数は八枚。総数は今の所二十一。青年が居なければ一度に十二枚は置けるのでデザート取りに行く一回分ぐらいは損している。

「ちょっと……」

「全然足りん。お前の面積分取ってくると言うのなら許してやってもいいが」

「なんで俺が給仕の真似事せなあかんねん!」

「ちょっと!」

なんではないだろう。常の俺であれば既にデザートに取り掛かっていてもおかしくないというのに未だ主菜の段階というのは明らかに青年が居座っているのが原因だ。

俺はビシッとナイフを青年に向けた。

「席料だ」
「んなもんあるか！！」
「ちょっと人の話聞いてるの！？」
「俺がいつお前が座ってもいいよっつった？　何時何分何十秒？」
「毎度毎度ガキかお前は！」
「話題のすり替えか？　罪を認めようとしないとは見苦しいな」
「何の罪！？　どこが罪！？」
「俺の食事を阻害する事即ち罪なり。俺を殺す気か」
「そんだけ食べてまだ言うんか！」
「人の……」
「ふっブラックボール（最終兵器）の名は伊達ではないのだよ若者よ」
「お前も若者やろ！」
「話を聞けーーーーー！！！！！！！」

バン　ガン

衝撃が俺達を突如として襲った。
一瞬静まる食堂だが、少女の一睨みでぎこちなく視線が外された。

目の前で頭を抱えて涙目になっている青年はまだいい。平な部分だった。
こっちは角だよ。いてーよ。ふつーにいてー。魔導書に続いてトレーって。今後も続くとかないよな？

俺はふぅと一つ息を吐き、紳士的な態度を心掛けて少女に向き直った。

「角はね、凶器になるんだよクロワッサン。そもそもなんでそんなに巻いちゃってんのクロワッサン。クロワッサンもびっくりな程のクロワッサンだよすごいよクロワッサン」

クロワッサンとはパンの一種で、パイ生地に似た触感でくるくると巻かれている前世で見たまんまのアレなのだが、それを再現しているがごとくのくるんくるんの天然ロールを俺は初めて見た。

「く……くろわっさん？」

俯き加減で呟いたクロワッサンの声は小さく聞き取りづらかったが、何故かザッと周り中で血の気が引く音がした。

よくわからないが、食事を中断させられている状況は嬉しくないので回れ右をしていただくために俺はさらに丁寧を心掛けて少女を諭した。

「それにねクロワッサン」

「誰がクロワッサンじゃ！！」

脳天を貫く二度目の衝撃に俺は意識を手放し――

第十六話　クロワッサンではありません

て、たまるか。目の前にメシあるのにそれを放置するような真似はこの俺の本能が許さん。

「んっふっふっふ……」

「な、なによ……」

笑い出した俺に、クロワッサンは一瞬たじろぐような顔をしたがグッとその場に留まった。

俺は平和主義者で温厚な性格。基本的には争いごととか嫌いっていうか面倒くさいからパスする。

が、メシがかかると言うならば辞さない。

ガッ

「だっ」

椅子を蹴立てて立ち上がろうとした俺は頭を捕まれ、力任せに押し戻された。

「ちょ青年？　いきなりされると首がぐきってなるんですけど」

「あああああの、こんなところで良ければどうぞどうぞ」

慌ただしく立ち上がり既に空いているところをさらに整頓しようとして意味不明に食器を動かしクロワッサンに席を進める。

「おいこら青年。地味にスルーするな。謝罪を要求する。そして席を勧めるな。面積が減る」

「だああ！　お前は黙っとけ！！！　取りに行くから！！　行くから黙れ！！！」
「じゃデザートね。全種類で」
「お……おう」

顔色が悪いままふらふらとデザート取りに行ってくれる青年。なんだかんだ言って根が素直ないい奴だ。
クロワッサンがさも当然の顔で座る結果に対しては減点だが。

「キルミヤ・パージェスよね？」

クロワッサンはトレーを置くと食事に手を付けようとせず手を組んでこちらを見た。

見るのは構わないんだが、お前トレー二つ持ってたのか。ご飯載せてるのと空のと。
片手でごはん持って片手で殴るとか何気に力あるだろ。そして何故空のトレーを持っていた。まさか突っ込み用に常備してますとか？　どんな装備品だ？　あ、いやでも某ＲＰＧでトレーって装備品だっけ？　でも見た目から貴族の少女がそんなものを装備するか？
あーでもうちみたいな貴族もいるわけだし……

「苦労してるんだなクロワッサンも……」
「は？」
「いや、自衛手段の用意は必須だよな。誰かに守ってもらえるわけじゃなし」
「は？？」
「でもな、そのトレー薄いから防御力は対して高くないと思うぞ」
「トレー？　ぼうぎょりょく？？」
「さすがに炭素繊維で編んだ防護服とかないと思うけど、こんぐら

いの太さの鉄棒の方が短くても刃物を受けるには適してるから」
「何の話してんのやお前は」
「お。青年、早かったな……って少なくね？」

青年は肩を落としてトレーからデザートを載せた皿を置いた。

「お前みたいにぎょーさん持てるか」
「えーー？　でもクロワッサン二つ持てるよな？」
「え？　わ、わたくし？？」
「さっき片手でご飯持って片手で殴ってただろ？　ってことは二つは持てるって事だ」
「え、えぇまぁそうね？」
「つーか二つ持つぐらい誰だって出来るだろー？」
「持てるとしても片手で持ったまま片手で料理取って皿に乗せてトレーに置けるのはお前ぐらいだ」
「確かに片手が塞がっている状態では難しいわね」

変なところで納得して頷くクロワッサン。

「んな事ないって腕に乗せればいけるいける」
「だからそれはお前だけだ」
「クロワッサンだって余裕だよな？」
「さすがにそれは……給仕の者でもそういう持ち方をしてるところは見たことはないわね」

そりゃまぁね、お貴族様の前でそういう持ち方する必要はないけど街中じゃあ普通だと思うんだよ。ウェイター一人で注文と配膳してたらそうなっちゃうんだって。俺の先輩なんか人間じゃない持ち方してたもん。

「え～～すーくーなーいーぜんぶ～」
「わかっとるわかっとる、まだ取りに行く途中や」
青年は、それからと腰を屈め耳打ちしてきた。
「目の前の方は第三皇女のベアトリス様や、アホな事ゆーてないでちゃんとし」
あそう。皇女様ですか。
俺は食べ終えた主菜の皿を片付けて、青年が持ってきてくれたデザートに手を付ける。
クレームブリュレ、サバラン、木苺のクレープ。青年が戻ってくるまでに無くなりそうだ。
「……こうじょ！！？」
え、え、えええ！！！！？？？
何でこんなとこにいんの！！！！？？？？？　お城は！？　お城の機能はどうした！！？？　お姫様いこーるイン城だろ！？
「うるさいわね。黙りなさい」
「はい」
言われるがまま沈黙を守るためにデザートを味わう事に専念しよう。そうしよう。
「はぁ……世間知らずと聞いてたけど私の顔も知らないとはね」
「……」
「まぁいいわ。私はベアトリス・ルイ・セントバルナ。知っての通

り第三皇女です」
「……」
「あなたの事はグランから聞いています」
「……」
「聴いていた通りの様子ですが、どうして手を抜いているのです？」
「……」
「少なくとも、初級詠唱魔術は丸暗記しただけで出来るように見受けられますが」
「……」
「聞いていますか？」
「……」
「……」
「……沈黙を解いていいですから」
「せいねーん。次はやくー」

クロワッサンは溜息をついて食事を始めた。

「クロワッサン、溜息ついてると幸せ逃げるぞ」
「私はベアトリスです。クロワッサンなどという名前ではありません」
「細かい事気にするなよ～禿るぞ～」
「は、はげ！？」
「ほらほら、今は食事の時間なんだからさ。それともアポなしで人の時間を占有するマナー知らずと言うのかな？」
「あなた……私が皇女と分かってその態度ですか」

うん。まーそりゃ怖いよ。

クロワッサンの目は上の人の目というのか、従わせる事が当然と信じて疑わないそれなので、それで睨まれるとチキンな俺は怖いとなるよ。なるけどね、さっきグランからとか何とか言ってたし？

グランがらみとなれば色々とこちらも考える事があるというか。
まぁ八割がた現実逃避なのだが。

俺は完食して、紅茶をすすりながら青年を待つ。

「皇女だろーと何だろーと俺にとっては関係ないの。無礼だ何だと言うならお好きなよーにしてくれたらいーよ」

逃げるから。
そしてかむばーっく！　せいねーん、はやくもどってきてー！！
俺の心臓持たないから！！　一人にしないで！！！！

「……そう。では皇女として聞いても個人として聞いても質問には答えてもらえないという事かしら？」
「さあ？」

バシッ
「っぶね」

後頭部を叩かれて危うく紅茶を零しそうだった。
コトコトと残りのデザートを置いていく青年を睨めば、睨み返された。

いや、いいんです。いいのですよ。きちんと戻ってきてくれただけで殴られようが蹴られようが許容しよーじゃないか！

「申し訳ありません。こいつ田舎者で礼儀も何も無いんです」

おお。青年が標準語になってるよ。

「かまいませんわ。私はここに在籍する間は皇女という身分で扱われる事の無いようにしております」

ほー。その割にはプッシュしてたような気もするんだけど。

「それで、その……こいつが何か？」

不安そうな顔で青年がクロワッサンの顔色を伺う。

クロワッサンは小さな口で意外とパクパク食事をしている。機嫌はいいのか悪いのか。先ほどまでの会話でいけば悪いだろうが、表情だけ見ればそうでもないように見える。

「レライ・ハンドニクス。あなたにも尋ねようと思っていました」

「お、わ、私ですか？」

「ええ。一昨日の昼過ぎ、どこに居ましたか？」

青年は俺を見てきた。

分かりやすい反応をしてくれる青年だ。あんまり駆け引きとか折衝とかやったことがないのだろう。

青年の年でうまかったら、それはそれで怖いけど。

お好きなようにと肩を竦めて俺は新たなるデザートに取り掛かる。

「結界場です。一年は初めての実技でしたから」

「その後は？」

「ちょっとありまして寄宿舎に戻って、次の授業で一棟に戻りました」

青年はあの侵入者の一件は言わない事にしたらしい。

「寄宿舎に戻ったのはあなた達二人だけ？」
「はい」
「その時、誰かに会わなかった？」
「誰か……とは？」
「誰でもいいわ。教師でも生徒でも、それ以外でも」
「いえ、特には……」
「では戻るときに火柱を見なかったかしら？」
「いえ……何も」
「そうですか」

クロワッサンは一つ頷いた。

第十六話　クロワッサンではありません（後書き）

どーでもいいですが作者はクロワッサン（食い物）好きです。
あの食感と風味がなんかいいんですよ。よくないですか？

第十七話　その名の通り試金石

「ところで王家に受け継がれる『試金石』という能力を知っていますか？」

青年は首を傾げ、申し訳なさそうに謝罪したが、クロワッサンは気にした風もなく話を続けた。

「試金石というのは金の純度を調べる時に用いられます。採掘した金の価値を測る手法としては容易で危険もありません」

はぁと相槌をうつ青年。

「王家の試金石とはそれに似たものです。

我が国は周辺国に比べて国土は大きいとは言えません。肥沃というわけでもなく、基盤は鉱山資源に頼るところがあります。それ故に資源を守るため少ない人力で軍備をまかなう必要がありました。

屈強な戦士はもちろんですが、それよりも一人で何百という兵力となる魔導師が必然的に求められ、それを見出せる者に権力が集中し現在の王家へと至りました」

御国のプチ歴史講座に、青年は盛大に戸惑っていた。

何が言いたいのか分からないといった様子で、それでも一生懸命考えているようで言葉を返す。

「ええと……では王家の試金石というのは魔導師を？」

「そうです」

正解に、青年はホッとした顔をした。

「私たちは見ただけでその者の魔導師としての力を測る事が出来ます」
「それはすごいですね」
「生来のものです。特別すごいというものではありません」

息が出来るからといってあなたは『すごい』とは思わないでしょう？　と、青年のよいしょをあっさり切って捨てるクロワッサン。
青年はどう反応していのか分からなかったのだろう顔を笑顔のまま引き攣らせ、曖昧に頷いた。

がんばれ青年。あとでいくらでも慰める。だから頑張れ青年。俺はデザートが早く食べてと急かしてくるので手が離せないのだ。これさえなければ俺だって青年の援護などいくらでもしたのに、実に残念だ。

「意識する事なく日常的に見ていますが、最近はあまり強い力を持つ者はいませんでした。一昨日までは」
「一昨日ですか……」
「一昨日、学園の結界が揺れていました。そしてその時、火柱があがっているのを見ました」
「火柱……」
「まさか初級詠唱魔術で結界が揺らされるとは思いませんでしたが、それを成した者の力は相当なものでしょう。それだけの力を持つ者が教師をしているだけというのは宝の持ち腐れだと思い聞いて回ったのですが誰一人として当てはまる者が居ませんでした」
「先生方ではないと……？」
「ええ。クレイスター・クライム先生がそうだと言われましたが、彼の力ではそこまでの炎は出せません。良くてたき火程度でしょう。何故隠すのか分かりかねますが、仕方がないので学院にその日居た

者全てを対象として調査しました」

クロワッサンはナプキンで汚れてもいない口元を軽く抑えると、こちらにひたりと視線を合わせた。

要りません。その真面目な視線要りません。

「あなたたち以外、どこで何をしていたのか判明しています」

「……」

青年頑張れ、沈黙しちゃ負けだぞ！

「一昨日、どこで何をしていましたか？」

「……」

青年、こっち見んな。クロワッサン、目つきこえーよ。

……

あぁもう分かったよ。

「先生に怒られて水ぶっかけられて着替えてた」

「火柱は？」

「先生なんだろ？」

「違います」

「じゃあ宇宙人の仕業だな」

「う、うちゅう？」

「我々は宇宙人だと自己主張も甚だしい体格子供の極細生命体だ」

「ご、せ、せいめいたい？」

「言っておくが探しても無駄だぞ。奴らはシャイで有名だ。会いたいと思っている奴は会えなくて、へっそんな奴いるわけねーよと思

っている小心者の前に現れる」
「待ちなさい。何の話をしているのです」
「え？　知らないの？　宇宙人は有名だよ？　奴らの技術はとてもじゃないが真似できないと言われてるんだよ？　火柱ぐらい簡単にやっちゃうでしょ？　空飛ぶ円盤持ってるならそんくらい出来ちゃうでしょ」
「技術？　そらとぶ、えん？」
「まぁ空飛ぶ円盤が奴らの持ち物だとは分かってないけどね」
「一体何の事なのですか」

やや苛立ったようにクロワッサンがこめかみを抑えるので、俺は追加説明した。

「空飛ぶ円盤っていうのは、まんま空を飛ぶ円盤状の物体のこと。一般的に未確認飛行物体の一種とされてて、目撃された形態が円盤型とか皿の形をしてる。常識的に考えて人工的な飛行物体と考えにくい異常な形態のものも含める場合があるけど、まぁそれはいいとして、色は銀色。ＵＦＯいこーる空飛ぶ円盤って言われる事が多いけど、意味合い的にはＵＦＯの方が科学的で空飛ぶ円盤の方がオカルトちっくな感じかな？
ちなみに空飛ぶ円盤が宇宙人のものだと確認されれば、定義上はＵＦＯじゃなくてＩＦＯとなっちゃう」
「……さっぱり分からないのですが」
「まだまだだね～　下々の情報は仕入れておいた方がいいよ。そんじゃごちそうさま」

合掌。

カチャカチャと皿をトレーに片付ける。

「……何をしているのです」
「何って片付け？」
「必要ありませんが」

うん。かわいい女の子が片付けてくれるのは知ってるよ。
でもね、この量の食器を片づけさせるのはしのびないでしょ。

「俺、男だしね」
「は？」
「勝手にやってることだから気にしなくていいよ。じゃあ青年とごゆっくり」
「え！？」
「それと、質問したければいくらでどーぞ。
……いくら青年を問い詰めても仕方ないと解ってるだろ？」
「……」
「……」

無言になった二人に肩を竦め、俺はさっさと食器を片づけに席を離れた。

俺はあんまり化かし合いというのは得意ではない。が、黙っていようとしてくれる青年ばかりに押し付けるわけにもいかないだろう。
ああいえばクロワッサンは直接俺を相手にするだろうから、これで青年は大丈夫だろう。
問題は俺がどこまでクロワッサンを煙に巻けるかという事だけだ。

……面倒だよなぁ。

第十八話　追われるよりも追う方が好みです

追いかけられるわ追いかけられるわ追いかけられるわ。お前はストーカーか。金魚のフンごとくしつこくしつこくしつっこく。

有名人がついてくるものだから俺まで悪目立ちして何やかんやのやっかみを言われる始末。

どうもクロワッサンは天才と言われる類らしく、十二歳にしてこのエントラス学院に入り僅か二年で最終学年に進級している。卒業までは秒読みと言われ、上から男女男女女と男女比率若干女高め兄弟の中でも希代の魔導師になると評判の末っ子。その名も――

その名も……その名も……なんだっけ？

なんかもーその縦ロールが強烈すぎてクロワッサンクロワッサン言ってたらクロワッサンで定着しちゃったよ。

「なぁクロクロ～」

「何ですかそれは。何度言えば分るんですか。クロワッサンでもクロクロでもありません」

「便所ついてくるつもり？」

「……さっさと行きなさい」

「はいはい」

頼むから出待ちとか止めてね。

客室としか思えないようなトイレに入りほげ～としながら用を足す。

あー……もー……めんどー……

よし出よう。

手を洗い、そのまま小窓を開けてよいせと身を乗り出しじゃーんぷ！

と大げさに言うまでもなく着地。一階だから当然だ。

などと巫山戯ている場合ではない。クロクロに見つかる前にさっさと部屋に戻ろう。寄宿舎まで戻れば男女で分かれているのでさすがに来ないだろう。

授業サボることになるがもういい。もう面倒い。寝る。疲れた。

つかあいつのおかげで既にサボり中。

「キルミヤ！」

泣いていいかな……

数十メートルも歩かないうちに前方から来るのは生真面目似非関西青年。

「どこ行ってたんや、次の授業始まるで！」

駆け寄る青年に俺はため息をついた。

「クロワッサンに例のごとく付け回されてたんだよ。巻こうとしても巻こうとしてもいつの間にか現れるとかこわくね？」

「まさかさっきの授業中ずっと？」

「ずっとだよ。延々延々延々延々ずーっと。疲れたよ」

「そ、それは大変やったな」

「ということで俺は帰って寝る」

「なんでやねん」

青年にはたかれ、俺は膝をついた。

「え？　お、おい！？　大丈夫か！？」

まさかはたいただけで膝をつくとは思っていなかったらしく、慌てだす青年。

慌てるぐらいなら普段から優しくしてほしいなぁ。

「いや……俺ってほら身体弱いでしょ？」

「侵入者を撃退しといてどの口が言う」

「えー……」

そういう問題ではないんだけど……

「もーいいから……寝る……」

「は？　ここで？」

ずるずると草むらに倒れこみ、身体を丸める。

どーせここは二棟と一棟の間の裏で誰も来ない。昼食まであと二つ授業あるとなればもはや寝るしかない。

となりでぎゃーぎゃー言っている青年を無視して俺はさっさと瞼を降ろした。

様子がおかしいとは思っていた。
授業中は寝てばかりで、それ以外も殆ど動く事が無かった。怠惰だと言えばそれまでだが、僕にはそれが迫られてそうしているように見えて仕方が無かった。

「待ってください」

キルミヤを起こそうとしたレライ・ハンドニクスを止め、草の上で身体を丸める青年の様子を見ると、思った通り、青白い顔色をしている。

「どうしたのです？」

二棟の影から現れた人物は、最近キルミヤに接触していると噂の第三皇女。
そういう事かと僕は理解した。

「病弱なものを執拗に追い回すというのは王族と言わず人としてにあるまじき行為だと思いますが、何を考えておいでなのでしょう。ベアトリス様？」
「……あなたは？」

僕の姿を見て、皇女は眉を潜めた。
そうだろう。僕の容姿はこの国にはそうそう無い。この白い髪は少なく、そして黒い目をした人間はおそらく僕を除いて居ないはず。

「名乗ったところで貴族ではありませんからお分かりにはならないと存じます」
「それは……私を侮辱しているのですか？」
「侮辱？　あなたは己の事しか見えていませんね。まっさきに出て

くる言葉がそれですか？」

すっと皇女の表情が冷たいものとなる。

敵とまではいかないが、警戒相手と判断したのだろう。

それを見て、僕の心もますます冷えていく。

「目の前に倒れている者がいるというのに口に昇るのが名乗りだの侮辱だの」

それまでも顔を引き攣らせていたレライは、完全に色を無くして僕を見ている。

きっと彼の中では前代未聞の事態に思考が停止してしまっているのだろう。

階級制度の中に組み込まれた人間としては当然の反応だけど、あまり見ていて楽しいものではない。

「もうすぐ授業が始まります。お戻りください」

皇女は僅かに顔をしかめたが、それ以上声を発する事はせずこちらを睨むだけ睨んで背を向けていった。

「あなたも授業に遅れますよ」

「え……や、せやけど……こいつ」

レライは青い顔のままキルミヤを指さした。

この状況で彼を放っていかないところを見ると、階級制度に組み込まれているだけの人間とも評しがたいと言えるかもしれない。

「気にしないで行ってください。同室ですから面倒は見ます」

「けど……」
「欠席すると後が大変ですよ」
彼は随分と迷っていたが、黙って見ているとやがておずおずと引いた。
「……ほな、頼むな」
「はい」
レライが走り去るのを見送って、僕はキルミヤの隣に腰を降ろした。
林から抜ける風が涼しく、木陰になっているこの場所は昼寝にはうってつけだろう。
但し、眠る気のある人間にとってという注釈がつくけれど。
「いつまで狸寝入りしているんですか？」

第十八話　追われるよりも追う方が好みです（後書き）

あっぷしてそっこう誤字訂正……

後、書き忘れていましたがご感想ご指摘ありましたらお願いします。

第十九話　二択だけど、ほとんど一択

うっすらと開いた瞳は澄んだ紫。
理知を示すその色に、不快に染まった感情が静けさを取り戻す。

「そこまでなるまで付き合わなくともいいのでは？」
「付き合ってねーよ。どこをどー見たらそうなる」

疲れた声音で言い、溜息をつくキルミヤ。
出会った時から思っていたけれど、彼には違和感がある。幼子のような言動を取るくせに気だるげな目はじっと何かを考えているように揺るがない。

「寄宿舎までは追って来ないと思いますが？」
「万一来たら鬱陶しいだろ」
「それは……僕がということですか？」
「いや俺が。
男子寮に抵抗なく来るようになったら俺の安息地が消える」

真面目なふりをして言う彼が可笑しくて、笑いそうになってしまった。
どう見ても同室の僕を気遣ってそうしなかったとしか思えない。

「来ないだろうと踏んでいるのに、そんなになるまで付き合うのは馬鹿ですね」
「お前なぁ、人の話聞いてた？　付き合ってないって。追い回されてただけで。
それに少年。馬鹿って言った奴が馬鹿なんだぞ」
「はい。そうですね」

「……つまらん」
「すみません」

笑いを堪えて言うと、キルミヤは再度溜息をつき僕に背を向けるように転がった。

地面につけた掌に返る熱を確かめながら様子を伺うが、まだ顔色は悪い。

こうなる事を分かって受け入れたのかわけも分からずに受け入れたのか、そこは知れないけれど、少なくとも何も知らずにという事はないだろう。

「あれは言い過ぎだろ」
「え？」
「クロワッサン泣いてたぞ」
「くろわっさん？　……あぁ皇女の事ですか。すみません、苦手なので」
「苦手って……大した拒否反応だな」

声に呆れが混じるが、弁明のしようもない。

それは僕も出さないようにしようとは思っている。先ほどもあんな事を言うつもりは無かった。だけど、あの眼を見た瞬間記憶が蘇り気が付いたら口にしてしまっていた。

「……すみません」
「謝る必要はないけど、正論が通る世界はあんまり多くないと思うからなぁ……」
「……そう……ですね。自重します」
「そんな素直な反応されるとわが身が痛いんだが」
「痛い？　キルミヤさんは素直だと思いますが？」

「やめて……精神攻撃やめて……」

何故か顔を覆ってしくしく泣き出すキルミヤ。

「冗談です」

「まてこらてめぇ」

起き上がり睨んでくるキルミヤ。涙の後などもちろん無い。

それが可笑しくて、ずっと堪えていたのに笑ってしまった。

皇女の眼と正反対の暖かな眼が不機嫌に細められるけど、それでもちっとも冷たくはならない。

「少しは楽になりましたか？」

尋ねると、キルミヤは目を瞬かせ、気付いたように頷いた。

「お前、何かしたの？」

「少しだけ。

その体力の無さ、原因は分かっているようですね」

「成長期だからな」

「そうですね」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」
「……」
「……ごめんなさい」
「あの、謝られても困るんですが」

キルミヤはブスッとして胡坐をかくと膝に肘を載せてひどく行儀の悪い姿勢でこちらを見上げてきた。

それにしても彼はセントバルナの出身ではないのだろうか？
胡坐をするのは南のフルクという国だったと記憶している。

「で？　少年の見解は？」
「見解……ですか？」
「そう。根拠があって言ってるんだろ？　それともカマ？」
「カマかと聞いている時点で肯定しているも同然でしょうに……」
「もうめんどーなの。手短にしたいの」
「はぁ。見たままの適当な反応……いえ、えっと、以前封印の話をしましたよね？」

視線が分かってるからそれ以上言わないでと訴えてきたので、慌てて話を進める。

「あー……したね」
「あの時は気付きませんでしたが最初にかけられたものとその次にかけられたもの、二つの封印がされています。
一つめの封印は他者の力を核として成されていますが問題は二つ目、上に重ねがけされている方です」
「ふんふん」

絵に描いたような適当な相槌に、聞いているのだろうかと疑念が

わくが、たぶん聞いているのだろう。

「それはあなた自身の力を核としています。力を封じているのにあなたから力を引き出し、それでさらなる封印を。
はっきり言って正気の沙汰ではありません。普通なら死んでいるところです」

力を封じられている中でそれを糧とする術を絶えず使用すれば代用として生命力が使われるのは道理。
キルミヤが生きていられるのはひとえに精霊が失われる生命力を補っているからに他ならない。
精霊が術に対して過剰反応していたのは十中八九それが原因だと言える。

「……んー……やっぱ？」
「やっぱり？」
「カロリー不足だとか成長期だとか気分で見て見ぬふりしてたけど、さすがに疲れすぎるもんなー。不健康体の時より劣るってさすがにな。俺でも変だとは思ったけど、不吉な事は全力でスルーが基本だったし？
即死かじわ死か言われたらもう後者しか選べないっしょ。ねえ？」
「……その場で殺されるか、それともその封印を受け入れるか二択を迫られたのですか」

尋ねると言うより、確認するつもりで聞くと、キルミヤは目を丸くした。
わざと分からないように言っているのだろうけれど、さすがに想像はついた。

第二十話　少年も大概しつこい

「誰にされたんです」
「さあ。初対面の奴だった」

驚きに見張られた目は、既に気のない目に戻っており、驚いた事自体見間違いだったかのようだった。
動揺を即座に沈めるこういうところが、言動から乖離している。

「理由もなく？」
「さあ？　向こうにはあったんじゃない？」

それは、あっただろう。
魔力と同調力を封じる技術は失われて久しい。今では忘れ去られた禁術の一つに数えられていたはず。
それを掛ける者も相当な力を必要とする。二つ目はともかく、一つ目はおそらく命がけで掛けたと思われる。理由もなくそこまでの事をやる者など居ない。

「精霊の声を聞いた事がないと言ってましたね」
「電波を受信した事はないな」

でんぱ？　精霊の言葉をそういうのだろうか？
結構な国を渡り歩いていると思っていたけれど、時々分からない言葉がある。

「それなら、物心つく前に一つ目の封印を掛けられたという事ですね」
「……物心ね」

複雑そうな顔をして呟くキルミヤ。

「物心つくの、けっこー早かった自信があるんだけどねぇ……」

「赤子の時にされては分かりませんからね」

「……まぁそうだね」

「一つ目はともかくとして、二つ目は外しませんか？」

いくら精霊に愛された存在だと言っても二つ目のソレは問題がありすぎる。

療養室の担当者が砂糖を渡していたが、魔力消費の応急処置で誤魔化されるようなものではない。

僕としては至極真面目に言ったつもりだったのだけど、何故かキルミヤは目を点にした。

「……え？」

「ですから、解除を」

「いやいや……『弱み握ったぜ』的な流れかと思ったんだが」

……？

僕も目が点になった。

「何で僕があなたの弱みを握らなければならないんですか？　しかも既に弱っているのに」

「……うぁぁ」

キルミヤは悲愴に顔を歪めると両手で覆った。

「やめてくれよー。もーなんだよー。めちゃめちゃ自意識過剰じゃんか俺」

何だかよく分からないがキルミヤはゴロゴロと悶えるように転がりはじめた。奇行に走り出した経緯が見えないが、体調が戻ったらしいのは分かったので良かった。

「今まで総無視決め込んでた奴がふれんどりーになってんだからフラグだろ？　赤信号以外ないだろ？　面白がってペラペラしゃべった自分が厨二みたいで恥ずかしー」

体調が戻ったのはいいけれど、僕は周囲の揺らぎを感じて慌てて言った。

「あの、取り乱しているところ申し訳ないのですが、落ち着いてください。

あなたが乱れると周りの精霊も引きずられます。魔力も同調力も封じられていると言っても精霊の祝福までは封じれてませんから、人よけの術が破綻してしまいます」

「俺は乱れてないよ！？　清く正しく生きてるよ！？！」

「はあ？　あ。いえ、分かりました。分かりましたから落ち着いてください」

「分かってないだろ！　そんな生暖かい目で分かりましたとかとりあえず言っとけみたいなアレだろ！

本当だぞ！　俺は誓って清く正しく――」

「分かりましたからっ！」

両腕掴んで迫ってくるキルミヤに若干引きながら、声を大きくすると漸くキルミヤは大人しくなった。

それでもブツブツと「本当にだな」とか「そりゃ意識する事は」

とか「でも普通だろ？」とか呟いていたが、さっきに比べれば問題ない。

「それで、どうしますか？」
「なにが？」

切り替えが早いと言えばいいのか、ゴロゴロ転がっていた事など微塵も感じさせない返答を見せるキルミヤ。
この年頃なら、気になる事があったらそれを引き摺って顔に出そうなものなのに、一切それが無い。
思い切りがいい性格なのか、それとも育った環境がそうさせたのか。

「封印の解除です。一つ目はあなたの存在を周囲から守る意味がありますが、二つ目のそれは枷以外のなにものでもない」
「枷……」
「死を選ばせるような者に掛けられたものなど不要だと僕は思います」

キルミヤは口を噤むと、じっと僕の顔を見た。

「少年は何故俺を助けようとする」
「助けられる者を助けるのに理由は必要ですか？」

違う。助けられるのに助けなかった者達の方が多い。
ここでキルミヤに力を貸すのは僕自身の為だ。僕が呵責に苛まれたくないから、過去に囚われたくないから。
耳障りのいい言葉を紡ぐ己の口に怖気がする。なのに、

「……ないね。確かに全く持って、ない。少年の言うとおりだ

な」

キルミヤは、僕には勿体ないぐらいの笑顔を向けた。
僕はその顔を見てられなくて視線を逸らしてしまった。

「あー、悪い。ちょっとな、掛けていった奴の仲間かもしれないとか思ったんだよ。
これ分かるのってアイツ等ぐらいだと思ってたからさ」

決まり悪げに頭を掻く姿を見て、心が重たくなる。
彼の疑いは尤もな事で気にする必要はないのだと言えればいいのだけど、それすらも言えなかった。その澄んだ目を見る事が出来ない。

「外してもらえるんなら有り難いが、一つ聞いていいか？」
「なんでしょうか」
「掛けた奴には外したって分かるか？」

内心の葛藤を抑え込んでキルミヤに視線を戻す。

「……分かるようにしてありますね」

そう言うと、キルミヤはへらっと笑った。

「ならいいわ」

清々しく、さっぱりと、一欠けらの迷いもなく言い切った。
何をと思ったのが顔に出ていたのか、キルミヤは続ける。

「いやぁ～　ちょっと相手がね、粘着質なタイプっぽかったから、

下手すりゃ外した人間の事までバレちゃうかもしれない。
そうなったら俺にもどーしょーもなくなるから」

あははははは。と笑う。

呑気なその顔に、自分の顔が対照的に固まっていくのを感じた。

「そのままではいつ死んでもおかしくないと、分かって言っていますか？」
「やめてー。わりと真剣に目ぇそらしてんだからさー、事実の再確認とかやめてー」
「ふざけてないで、ちゃんと答えてください」
「えー……」
「……」
「……」
「……」
「……」
「……」
「……」
「わかったよ。わかった」

お前はどんだけ沈黙耐性あるんだと、訳の分からない事を言いながらキルミヤは肩を落とした。

「あのな？　俺だって一応普通の神経持ってるよ？
いつ死ぬかもしれないのはこえーよ。だけど、それが怖いからって他人を死亡フラグ満載なルートに引っ張り込むだけの度胸も無いんだよ」

キルミヤの顔から笑みが消え、一瞬、悲しみがよぎった。だけどそれが何かを突き止める間もなく苦笑いに染まる。

「少年もほいほい命粗末にすんな。母ちゃんはすんげー大変な思いして少年を生んだし、少年も大変な思いして生まれてきたんだ。人生楽しく生きろ」

「それはあなたも同じでしょう」

「だから、それは俺のルートであって少年のルートじゃないの。わかんないかなー」

「わかりました」

「お？　……いやいやいや。その顔はぜってーわかってないだろ」

僕は余裕たっぷりに笑って見せた。

「要するに、気付かれなければいいという事ですね？」

第二十一話　過去の淵

今でもあれは、あまり思い出したくない。

――選ばせてやろう　父母の下へと今すぐ逝くか　それとも　あえかな光に縋るか――

そんな問いを八歳児にしないでほしい。

小学二年の時の記憶などとうに忘れて久しいが、阿呆な見栄を張って無駄な喧嘩を繰り返していた気がする。一日一日で完結し、翌日に持ち越される問題など無かった。宿題を含めて。宿題に関しては俺が覚えてなくとも先生が覚えているので自動的に翌日嫌という程自覚させられたが。

とにかく興味ある事を追及して、同じ興味を持つ奴と競い合って、全力投球しっぱなし。よくも疲れないなという毎日を送っていたと思う。たぶん。

ともかく、勝負相手や渡り合う相手は同じ年齢（レベル）で、大人（上位）との経験など無かった。

どういう設定になっているのやら、間違いなく今生はハード設定に違いないと現実逃避をする反面、俺の口からは獣のような低いうなり声が絶えず出ていた。

背を踏みつけられ腕を捻られた状態にもかかわらず、俺の身体は

勝手に抗い目玉が飛び出そうなほど目を開き相手を睨んでいた。

肩にかかる髪は新緑を思わせる鮮やかな緑。冷笑が浮かぶ双眸は切れ長で、瞳は赤くも見える濃い紫。

誰に言われなくとも説明されなくとも、それがおかんを殺した相手だと分かった。

根拠などトブに捨ててやる。そんなものは必要ない。俺の全身全霊がそいつを拒絶し嫌悪し破壊しつくしてやりたいと叫んでいた。

だけど、いいのか悪いのか俺にはそいつを殺せるだけの力は当然のごとく無く、変わりに格上（上位）との経験を持つ精神があった。

その精神が、抵抗するだけ危険だと判断した。

暴れ狂う心を理性で覆い、現実逃避という名の弾幕を張って自分自身を惑わし、俺は男と対峙した。

「子供相手にいい大人がムキになるなよ」

息を整え、獣を腹に納めて軽く挑発すると男は目を細め口角を少し上げた。

幼児を踏みつけたまま笑う男の顔は狂気に満ちていたと思う。まともな子供が見れば泣くか失禁するか暴れるか。

「目の色が変わったな」

「変わるかよ。俺は生まれたときからこの色だ。目が悪いんじゃねーの？」

男は暫し吟味するように俺を観察すると、手を離した。足は俺を地面に押さえつけたまま。

「面白い。ここで殺すには惜しいやもしれん」

そうして俺は決まり（ルール）を一方的に言い渡された。

「か……大丈夫ですか？」

ふと、俺は瞼を抑えている事に気付いた。

「あ。悪い、聞いてなかった」

少年は眉を寄せ、首を傾げる。

「それほど心配しなくても、本当に大丈夫ですよ？」
「その自信はどこから来るのか。少年は学生だろうに」
「それはそうですが……一応こちらで習得出来るものは既に習得してしまっていますし」

おいおいおい。

「じゃ何で入学してんだよ」
「……まぁいろいろと」
「ふーん」

少年もなかなか面倒臭そうなものを抱えていそうだ。
下手すりゃ俺より面倒なのかもしれない。それなのにまぁよくも手を貸そうと思ったものだと思う。

人目に付かない場所に移動しながら、小さな背を眺めていると「あぁそうだ」と少年は振り返った。

「封印を解除してから祝福の方も何とかしましょう」
「ん？」
「今のままでは魔術が使えないでしょう？」
「……え……もしかして知ってんの？　俺のノーコン（制御皆無）っぷり」
「はい」

青年だけだと思ったのに、ここにも居ましたよ。
ここんとこダメージ受けてばっかなんですけど俺。ガリガリガリガリ削れちゃってるんですけど。もうちょいしたら泣きながら駆けていきそうな自信あるんですけど。

「あの……落ち込む事じゃないですよ？」
「生暖かいよ。さっきから少年が生暖かい目で見るよ。掘削機のごとく削られるよ」
「くっさく？　なんですかそれ」
分からないなら説明しよう。
「掘削機、またの名を油圧ショベル又はパワーショベル。俺的には後者が好み。
複数関節のアーム先端が付け替え可能な自走式建設機械。主に下向きバケットを取り付けたバックホー形態が一般的。
ちなみに俺が削られたイメージもこれ」
痛いよ？　痛いよっていうか血をみるよ？　土石相手の代物だからこれ。
「いや……あの、そんな『どーだ』という顔をされましても……余計に分からなかったのですが」
「はっはっは。分かったらむしろすごい」
「……」
精霊に愛されし者の多くは、どうしても魔術のコントロールが苦手になるものです」
あ、すごいスルーされた。
グラン以来の清々しいスルーだ。クロワッサンはいちいち拾ってくれるから面白かったが、少年はあんまし拾ってくれないらしい。
「普通は同調力があるので、それで精霊を抑止するんですけど」
「あぁ、俺には無いから難しいんだ？」

「はい。なので、定量を決めておきましょう」
「定量？」
「後で説明します。
その前に、魔導と魔術の違いを知っていますか？」

俺は、はて？　と首を傾げた。
魔導と魔術は同じ意味で使われているものだと思っていたのだが。

第二十二話　講義は真面目に

魔導と魔術の違いと言われても、より有能なものが魔導と言われているぐらい。
魔導書と魔術書は存在するが、属性だとかに差は無いし、やり方もそう対して違わない。違うところがあったとしても術ごとに変わるものなので、それが魔導と魔術の違いとは言えない。

ノーコンだったから途中で覚える気無くしたんだよねぇ。

「さぁ。違いなんてあるの？」
「今は明確に区別する必要が無いほど魔導師の数が減りましたからね」

首を傾げた俺に、少年は苦笑気味に頷いた。

「もともと魔導師は魔を導く者。魔術師は魔を創る者と言われていました」
「魔を創る？　なんか魔導師よりそっちの方が強くね？」
「それは個人の力量に左右されると思います。
魔は未知なるもの、不可視のもの、神なるものという意味があり、世の理から外れた現象を示します。
魔術師は魔を自ら創り出し、魔導師は精霊の力を導いて魔を現します。
この時用いられる力が魔力と同調力です」

道なき道、獣道に入っていきながら話す少年。
息切れ一つせず話せる事が羨ましい限りだ。

不意に、目の前に手が差し出され、顔を挙げると少年が立ち止まってこちらを見ていた。

「手を」

「……そこまで体力無しじゃないぞ？」

「いいから」

ややキツく言われ、どーしたものか。

背丈も低い年下に心配される俺って、傍から見たら限りなく情けなくない？

でも少年は引き下がる気ゼロのご様子で手を差し出したまま止まっている。

しぶしぶ手を取ると、思ったよりも強い力で握られ、掌から暖かさが伝わってきた。

「……少年、手」

「この力の事は黙っていてもらえると助かります」

再び前を向き歩き始めた少年は早口で言った。

あーいやー、それではなくて、手が硬いなぁと思っただけなんだけど……

なんか前のめり思考になっちゃってるから黙っていよう。

「魔術師は魔力を用いて、魔導師は同調力で」

「え？　まだ講義続くの？」

「……」

「やめて、無言の威圧とかやめて」

振り向き何も言わない少年に繋いでない方の手を挙げ降参をアピ

ール。

まったくもう何なんだ。

俺は不真面目代表生徒だぞ？　そんな俺に講義したところで覚えるわけがない。

「ちゃんと聞いて覚えてください」

「読心術の使い手！？」

「顔に書いてあります」

顔が引き攣った。

やばい。身体の年齢に精神がひっぱられている可能性がある。

しっかりしろ俺、平々凡々ライフ目指すならポーカーフェイスは必須スキルだ。

「簡単に言えば魔術師は自分の力で、魔導師は精霊の力で魔を発現するということです。

魔導師が優れていると言われるのは同調力は消費されるものではないからです。魔力は消費されるので限界がありますが、精霊を集められる限り魔導師に限界は理論上ありません」

「そりゃすごい」

「……」

「……」

ちゃ……ちゃんと聞いてるよ？

へ？

「分かりませんか」

「魔導師とは精霊に愛されし者の事です」

あぁ。なるほど？

「今魔導師と言われている者の多くは魔導師ではありません。
魔術師は多かれ少なかれ同調力を持っていますから、ある程度なら擬似的な事が出来ますが同じことは出来ません。
貴方が先日使った初級魔術と呼ばれるものは、魔術師が魔力切れの時に代用といて編み出したものです。
本来の魔導には言葉も型もありませんから」

……これ、何て言えばいいの？
何でお前が知ってんだよ～　って言えばいいの？　それとも空とぼけるべき？

「精霊の加護を求め精霊を集めその力を借り受けたいという意味の術ですから、貴方が使えば精霊が飛びついて力を貸すのは当たり前と言えば当たり前で、同調力を封じられている貴方に制御出来ないのも当然です」

はい。空とぼけるのはアウトですね。
何で知ってるかね～

「そのままでは危険ですから、封印を外した後に集まる精霊を制限しておきましょう」
「そんな事出来んの？」
「あなたの為なら精霊は協力してくれます。
ただ、魔術の使用は控えてください。生命力を使用する事になりますから」
「魔力無いなら失敗じゃないの？」

「……普通はそうだと思いますが」

ちらっとこちらを見て、どことなく疲れた顔で溜息をつく少年。

「をいこら。人の顔見て溜息つくとはどういう了見だ」

「仕方がないじゃないですか。試金石に目をつけられるだけの素質を持っているという事なんですから」

「……試金石……ってなんだっけ？」

また溜息を付かれた。

第二十三話　はしゃいでしまった

「皇女から説明を聞かれたと思うのですが」
「全く記憶にない」
「威張らないでください」

脱力する少年を慰めようと口を開きかけたが、先に少年が話を進めた。

「王家の試金石は簡単に言えば魔術師の力を測る能力です」

こいつどんだけ講義したいんだよ。周りが段々鬱蒼とした感じになっているのに変わらずのペースで淡々と続けるって。

っていうか、学院の敷地にこんな鬱蒼とした森があったっけ？

これかなり広いだろ。下手すりゃ迷うぞ。

「魔力を蓄える器の大きさ、魔術を構築する精神の強度、思考の速度。この三点を見ています。この内、魔術の成功率に関わるのは精神の強度と思考の速度。目を付けたという事ですから、下手ではないでしょう。ただ器が大きいだけならいいのですけれど」

迷子になった奴居ないんだろうか。居たら苦情になってるか。とするとやっぱし居ない？

あぁ、皆様真面目だからこんな所来る暇など無いと。コレだな。

「あなたは希代の魔術師にも、忘れられた過去の魔導師にもなれ――何を考えているんですか」
「聞いてる聞いてる。
クロワッサンのお眼鏡に適ったんだから魔術師として器用な部類

に入るんじゃなかろーかと。こういう事だろ？」
「はい。出来れば学院を辞めて戻られた方が」
「そうだな。面倒事は避けるに限る」
「同感です」
「苦労してそうだね～　少年」
「苦労なんて人それぞれですけどね。着きました」

少年は俺の手を離さず、ガサガサと片手で細枝をかき分けて突き進む。
茂みを抜けると、少し開けた場所になっていた。

「あ、泉？　水がわいてるのか？」

開けたと思ったのは泉があったからで、水面を覗いてみると規則的なうねりがあり目を凝らせば水底から湧き出ているのが見えた。
水は透き通っている。どれぐらい深いか分からないが、底までクリアに見えるのでかなり綺麗なのだろう。

「ここは精霊が集まりやすいポイントです」
「あぁ通りで騒がしい」
「まだ？」
「前に比べれば多少はマシかな」
「すみません」
「謝るとこ違うから。少年は謝りすぎじゃない？」
「そう……でしょうか」
「事あるごとに『すみません』だろ。無駄に多いんだよ。必要ないとこで合いの手のごとくいれてるし」
「はぁ……自分ではよく分からないですが……
いえ、それよりも早くしてしまいましょう。こちらに」

俺は少年の前に言われるまま立つ。

「力を抜いていてください。すぐに終わります」

「りょーかい」

任せてくれ。ボーっとしているのは得意だ。

早速俺はだらけまくった。立っている為に必要な力だけを残してほげーっとしてみる。

考える事は特になし。強いて言えばご飯について。ここの食事は本当に素晴らしいのだ。

退学した場合、ここの食事と同レベルを維持しようとすると大変だ。

どうしよう、死活問題が発生してしまった。

少年に言われるまでもなく、適当なところで脱走するつもりだったが、食事については考えていなかった。腹に入ってしまえばみな同じとはいえ、おいしいものを食べたいのが人情と言うものだ。あと肉。

収入源さえ確保するのが難しいと思われるのに、食生活の事を望むのは高望みだと分かっているが……までまて、飯屋に入れたら良くね？　あ、いやでも一か所に留まるのは無理か。見つかる。

となると、移動しつつ稼ぐ方法を考えないと駄目で……やっぱり傭兵兼冒険者か、行商か。

「終わりました」

俺の鳩尾の上、やや左側の心臓あたりと思われる箇所に手を置いていた少年が手を外していた。

痛みも何も無い。変わったと思う所もなにも。
試しに両手を握ったり開いたりしてみるが、変化は無い。
俺は泉に目を向けバサバサと上着を脱ぎ捨て、怪訝な顔をしている少年を横目に勢いよく飛び込んだ。

水は冷たく、一瞬にして筋肉が収縮する。久しぶりの感覚に口元が緩んでしまう。
グッと足に力を入れ、身体を反転させ潜水を開始。五度目の蹴りで底に到達したので、やはり見た目以上の深さがあった。水中メガネが無いのでぼやけた視界だが、底から水が絶えず湧き上がっているのが分かる。

あーやべ。めっちゃたのしー

そろそろ息が苦しくなってきたので水面に浮上すると、真っ青になっている少年が居た。

「良かった！　上がってこないから！」

若干涙目だった。

……はしゃいだ俺は反省するところですね。

ざばりと水から上がり、縁に腰掛て大丈夫だと手をひらひらして見せアピール。

「すごいわ。水の中は体力食うから潜水出来なかったんだよ」
「喜んでもらえて幸いですが、無茶しないでください。まだまだあなたの身体は弱っているんですから」
「う～ん。でもそんな感じはないぞ？」

首を傾げると、少年は目を細め俺の周りを注視した。

「あなたが喜んでいるのが嬉しくて、精霊がはしゃいでいますね。生命力をわれ先にと与えているようです」

ええ！？　実況されると気になるじゃないか！　いつの間にやらだったらいいけど、今まさにそうですとか言われたら気になる！　どこで！？　どこから！？　どうやって！？

「じゃあ次は精霊の数を制限しますね」

「まてまて少年、俺の動揺と疑問とちょっとばかしの不安を解消してからにしてくれ」

「精霊がどうやって生命力を与えているのかは説明出来ませんよ」

「何故わかる！？」

「顔に書いてあります」

ま……負けた。

少年に負けるおっさんって……

「では始めます」

突っ伏している俺を無視して淡々と作業を始める少年。

くそう！　見た目軟弱そうなくせして押しが強いとか反則だろ！

「エーネルフィ　アオウル　レ　キルミヤ・パージェス　ソレライン　ウル　ハーサグレナムス　ロウ　アラレキ　ウル　エンディル」

“――”

聞き取れない言葉を紡いだ少年の後に、何かが囁いたような気がした。

第二十四話　完敗

「出来ました。試してみてください」

囁きに集中していた俺は我に返り、些か腰が引けつつ魔術を使った。

「其は波動の素　零々のゆえんたる汝をここへ」

ぽっ

手のひらに現れた炎に、俺は目を丸くして少年を見た。

少年は小さくえくぼを作り、頷いている。

「あなたにずっと寄り添っていた精霊（子達）に、他に集まった精霊（子達）を抑制してもらいました」

「へえ～　こうも結果に出てくるとは」

「力を貸すのも必要最低限にしてもらいましたから」

「そんな事が出来るのか」

何というか、何でもありだなこの少年は。魔術はぽいぽい出来ちゃうし精霊と交信出来る時点で不思議ちゃん決定だったが、ここまで来たらトリッキーだ。これで空も飛べますとか、地中に潜れますとか、水の中で息出来ますとか、瞬間移動出来ますとか、動物と話せますとか言われても不思議じゃない気がする。

「僕がすごいというわけじゃないですよ？」

「……顔読むのやめてくれ」

もう極細だよ。俺の残精神。

「すみません」
「いや、謝んなくてもいいけどね」

少年は目を瞬かせ、あぁ本当だと言うように口に手を当てた。
その仕草が子供っぽくて、こいつは本当に子供なんだよなぁと俺はしみじみ思った。

「暫くはこれで持つと思います。様子は見ますが、なるべく早く戻られた方がいいと思います」
「そのつもりだが、少年も辞めるのか？」
「え……？」
「その口ぶりだと長くここに居ないと言っているように聞こえるぞ？」

少年は一瞬迷うように視線をゆらし、やがて分からないというように首を振った。
視線を俺へと戻した少年は先ほどまでの子供らしい気配など無く、仕事に疲れ切ったサラリーマンのような目をしていた。

「あなたは……どうして知り合って間もない僕を信用出来るのですか？　どうして無防備になれるのですか？　何をされるのかも分からないのに、どうして――」

少年は言葉を詰まらせ俯いた。

……ぇえ……今更聞くの？
そういう事は色々やっちゃう前に聞くものじゃなかろーか？　やっちゃってからそれはないだろー

内心呆れてしまったが、少年が深刻そうなので流石に揶揄するのは止めた。

「どーしたんだよ。何かあったのか？」

顔を覗き込もうとすると、さっと少年は自分から顔をあげた。

「何もありません。それより、この間の侵入者ですが」

「え？　あ？　あぁ、それが？」

「何か言われませんでしたか」

「何か？　何かねぇ……問答無用で襲ってきたからなぁ……あ。白のなんとかの仲間かとか何とか言ってたかも」

少年の眼がスッと細められた。

「……なるほど。あなたは何と答えたのですか」

「なーんにも」

カシルは細めた目を開き、呆れたという顔をして溜息をついた。

「どうして関係ないと言わなかったのですか」

「んな事言われてもな。何の事か分かんなかったんだよ。嘘はよくないだろ？」

「……。分かりました。その事、誰にも言わないようにお願いします」

「それは無理」

「え？」

「だって青年――あいつ何て言ったけ？　俺と補習受けた奴」

「……レライ・ハンドニクスの事ですか」

「それ、レライ。あいつが先生方に話すって聞かなかったから好きにしろって言っちゃったんだよねぇ。その場に居たから白がどうのとかも話してると思う」
「……分かりました。では、あなたからレライにあまり騒ぎ立てないように言ってください。教師陣、その上の人間もうやむやにするしかない事なので」
「上……ね。まぁ了解した。青年も今更騒ぐとは思えないけどそれとなく言っとくよ」
「お願いします」
「話はそれだけ？」
「はい」
「そんじゃ――」

俺は言いかけたまま、自分の腕を掴む少年の手を見た。

「――なに？」
「なに。ではありません。何をする気ですか」
「聞くまでもないだろ～　もちろん泳――」
「駄目です」
「えー何でー？」

ひくっと少年の頬が引き攣った。

あ。やば。

「キルミヤさん……」
「……はい」
「あなたは先程歩く事も出来ない程でしたよね？」
「……」

でもね。ここまで歩いてきたじゃないですか。

「ここまで来れたのは僕が補填していたからです」

じゃあ大丈夫って事じゃ？　それに精霊とやらが不思議ぱわーをくれているわけだし。

「精霊に力を与えられているとしても、すぐに全快は無理です。暫くはこれまで同様気を付けてください」

……もういいか。開き直ろう。気にしていても仕方がない。むしろ何も言わなくても顔読みで答えてくれるのは楽チンと考えよう。そうしとこう。……うう。

俺は両手で顔を覆っておいおい泣いた。

第二十五話　忘れかけた友の影（前書き）

非常に短いです。

第二十五話　忘れかけた友の影

大きなあくびをして背を伸ばし、さっさと引き返すキルミヤ。
僕はその後姿を見つめ、小さく首を振った。

どうして何も聞かないのだろうか。
侵入者は何者か。僕と関係があるのか。僕は何者なのか。

他にも、どうして無視していたのか。
どうして精霊の事に詳しいのか。
どうして魔術に詳しいのか。
魔術に詳しい者がどうして学院に入っているのか。

「おい、ぼさっとしてないで」
「あ、はい」

慌てて走って追いつくと、キルミヤはまた歩き出した。

「あなたは変わった人ですね」

キルミヤは眉を寄せて不機嫌そうな顔をした。

「お前に言われたか無いね」
「僕が何者か気にならないのですか？」
「聞いたら答えるのかよ」
「いえ」
「じゃ、聞いても仕方が無い」
「そこで納得するのが変わっているんですよ」
「うっせ。人にはいろいろ事情ってもんがあるだろ。そんなのいち

いち聞いてられるか」
「……そうですね」

それはそうなのだけれど、好奇心を抱きそれを止められる者は少ないとよくよく思い知らされてきた。
最初から興味すらなければその限りではないけど、僕が追いつくのを待っている所を見れば何の感心も無いという事はないだろう。
それでも何も聞かないのは彼が生きてきた人生（道）ゆえか。

なんだか似ているなと思ってしまった。
姿かたちは全く違うけれど、あの人に会っているような、そんな気になってしまう。

「何笑ってんだよ気色悪い」
「すみません。また明日から僕は無口になると思いますが、気にしないでくださいね」
「へいへい。お前は電波ちゃんだからな」
「何ですかそれ。良い意味ではなさそうですね」
「いやいや。褒め言葉だよ？　俺の地方じゃもうすんごい褒め言葉」
「……しらじらしいんですよ」
「ひどいっ。純真な少年を捕まえて」
「少年って……もう大分厳しいでしょうに」
「うわー。容赦ないな」
「すみません」
「ったく」

僕は大きく踏み出しキルミヤの前に出た。

「あなたが同室で良かった」
「んだよ気色悪い」

心の底から嫌だという顔に心がほころぶ。

「いいですよ。気色悪くても。明日からは石ですから」

そういって走れば、溜息を付きながら追いかけてくる足音が聞こえた。

第二十五話　忘れかけた友の影（後書き）

次から二章に入ります。

第二十六話　これまでにないほど熟考中

――

キルミヤ、突然の事に驚いている事だろうね。
急な事で悪かったと思っている。だが、今回の事は随分前から考えていた事なんだ。
キルミヤの力はおそらく魔導に通じるものだと思う。そこで魔導を学べば、制御する事が出来るかもしれない。
それに、あそこではキルミヤの力を怖れるばかりだ。そこなら、そんな事はないだろう？
これは私の願いだが、キルミヤが卒業して中央に来てくれればと思っている。
無理はせず、そこでキルミヤらしく過ごしてみてくれ。

グラン・パージェス

――

そういう事は最初に言えと、俺は思う。
グランが何を思って俺を外に出したのかは分かっていたが、それでも外に出す本人には言っておくべき事だろう。
どうもお貴族様という輩は勝手が過ぎるというか、猪突猛進というか、周りが見えないというか、我が前に道あり故に我が道なりというか、思い込んだら一直線というか。
あまりにも面倒くさすぎて溜息が出てしまう。

「ふん、余裕だな」

俺の目の前にはお貴族様の大好きな色、金髪碧眼を持つ坊ちゃんが腕を組み鼻を鳴らしている。
少年よりは上で俺よりはたぶん下の。名前は……取り巻きが二人いたのは覚えてるんだけど……あぁもーいいや。

「坊ちゃんはやる気満々だねー」

俺はやる気ゼロですよー。やる意味ないですよー。とあぴってみた。
が、坊ちゃんは増々目を吊り上げてきた。

「そんな挑発に乗るとでも思っているのか」

挑発？　してないしてない。止めない？　って言ってるだけですよ。本当。
だいたい決闘なんて百害あって一利なし。俺には懸けて守る名誉など何も無いし、それよりも怪我とかそっちの方が嫌だ。
何で坊ちゃんが俺に決闘を申し込んできたのかはクロクロが関係しているんだろうなぁと『貴様ごときがお言葉頂くだけでも不相応』だとか何とか言われれば容易に想像つくのだが、何で決闘が成立するんだよと突っ込みたい。
学院、禁止しろよ。

何でも精神も強くあれという方針があるそうで、教師立ち会いの下でなら可能なそうだ。
決闘独自の緊張感の中でも力を発揮出来るようにという事なのかもしれないが、後々禍根が残りそうな方法を取らなくてもいいのにと俺は思う。

「両者、位置に」

俺と坊ちゃんの間で指示を飛ばす立ち会いの教師は、一度と言わず何度も世話になった――糖分補給という意味で――療養室のスレンダーさん。療養室の者ならば怪我しそうなこんな事止めればいいのに、むしろこの人面白がってます。表情は真面目そのものなのだが、目が笑ってる。

他にも監視という名の野次馬と化した教師が何人か。どいつもこいつも面白がってる。

そりゃまぁ坊ちゃんは成績優秀者。実技の方もトップよりの成績だ。実戦に近い形でどこまで出来るのか見てみたいと思うのは仕方がない。仕方がないが、片や最下位成績者の俺の心配をしないものだろうか？

つらつらと考え気分を紛らわしながら坊ちゃんと距離を取る。

だいたい二十歩程離れたところで、スレンダーさんが後ろに下がり手を挙げる。

「始め！」

振り下ろされた手が合図となって即座に坊ちゃんは両手を交差させ契約の言葉を口に乗せた。

「其は無束の主　おのが力を示し峙するモノを切り裂け！」

カマイタチかぁ。いきなり不可視の攻撃あんど殺傷目的ので来るとは、なかなか吹っ切ってますねー

ひょいひょいと避けてスレンダーさんに視線を向ければ、くすりと笑われた。

え？　笑うとこ？　こらこらこら。俺は止めてって言ってるんですけど？　こんな当たれば血がどぱどぱ出そうなもんぶっ放してる状況を笑うの？　下手すりゃ死んじゃうよこれ。……そーかそーか。そーですか。分かりましたよ。

なぜだ……なぜだ……なぜだ……なぜだ…なぜだなぜだなぜだ！

なぜ当たらない！！！

不可視の風の術であれば避ける事など出来ないはずなのに、風幕で防御するならまだしも、何故当たらない！

「何故当たらない！」

「当たったら痛いだろーが」

うるさい！　そんな事は聞いていない！！

ちらっと周りの教師を見れば、興味が私から奴へと移っていくのが見て取れた。

「くそっ！」

最大数の火炎を作り出し飛ばずも全て避けられる。

負けられない……こんな所で、こんな奴に！

次期当主として父の補佐をしている長兄、軍に入り功績を挙げている次兄。ならば自分はそれ以外の道でと考えた。

第三皇女も在籍しているという学院で、もし接触する事が出来、目に留めてもらえれば卒業した暁には間違いなく魔導師団員となれるだろう。そう思って努力してきた。

それなのに！　それなのに！！

キルミヤ・パージェスはヒラヒラと容易く避けて、こちらを嘲笑う。

こんな落ちこぼれに負けたとあってはサジェスの名折れどころか、

兄や父に何と言われるか分かったものではない。

こうなったら……

俺は坊ちゃんの手元を見ながら体を動かし先を予測する。

こうしてじっくり見ていると、少年が言っていた魔術と魔導の違いが何となく分かってきた。

明確に見える訳ではなかったが、何となく流れが分かる。

坊ちゃんが使っているのは魔導を模した魔術。周りの力を使うタ

イプだ。手の動きと口頭契約で、意思を持って坊ちゃんに集まる流れがある。その流れが一度坊ちゃんの手で凝縮されて、俺に放たれる。

軌道は全て一直線なので至極読みやすい。

変わって授業中に教師から受ける拘束は、魔術。己の力を使うタイプ。たぶん。

もう一度じっくり見ようと思って見ればわかるだろうが、周りからの流れは無かったような気がするのでそうだと思う。

坊ちゃんは攻撃が当たらない事にかなり焦っているようだが、俺にしてみればそんな分かりやすい手順を踏んでいて分からない方がおかしいと言いたい。周りの教師達も一体何を考えているのか俺へと視線をシフトさせている。

いやいや。誰か教えてやれよ。軌道、見えちゃってますよ！　って。

それにそんなに見つめられても俺に決定打は何一つないですよ。

学院の決闘だから、さすがに殴り合いとかではない。そこはやっぱり魔導なり魔術なり使わなければならず、それ以外は認められていない。

少年によって、ようやく正常レベルの威力となった俺の初級魔術ごときではせいぜい威嚇がいい程度だろう。

決定打が無くなったと言っても後悔はない。まさかここで坊ちゃんを丸焦げにする訳にもいかないので、少年には本当に感謝している。

決定打がないので、どうやったらこの茶番劇を終わらせる事が出

来るかを考える。
手っ取り早いのは俺が負ける事だが、痛いのは嫌だ。坊ちゃんの攻撃はあたったら絶対痛い。しかも、かなり、痛い。ちょっとぐらいならいいかなぁと思うが、あれは嫌だ。

という事で、別の手段を考え中。
俺が使えるのは魔導を模した魔術。魔術は命削ると聞いたからには遠慮。
覚えている初級魔術は、最低レベルのもののみ。

……最低レベルでやべーって思ってそれ以上はやっちゃ駄目だと思ったんだよなぁ……もう少し努力してれば何とか――なってないか。同調力とやらが無ければノーコンに変わりないわけだから。

でもまてよ？

俺は改めて坊ちゃんを観察する。

流れは、分かる。
周りの力を使っているのも、分かる。

これって、俺がエネルギー（生命力）貰ってたのと同じじゃね？
って事はだ、魔術的手法に乗っ取らなくても力を借りられるって事じゃね？
確か、少年が熱出したときに力分けてくれ～的な事を考えてたらそうなった様子だったっけ。
じゃあ……おーい。居たらちょっとばかり協力してくれないか？

と思ったらすぐさま俺の周りで風が躍った。

わ……分かりやすい。これ、同調力とか要らないんじゃ……

ちょっと驚きながら、次の行程を考える。

ここで炎だのカマイタチだのやってみよう。坊ちゃんはきっと怪我するだろう。血も出るだろう。親御さんが出てきたら大変だ。

となれば跡が残らないものでなくては。

……酸素奪って窒息？

第二十七話　出したものはしまってください

やめよう。

窒息させるとなると酸素を動かせばいいが、電波な存在に酸素が通じるか分からない。空気を無くされた日には真空パック坊ちゃんの出来上がり。火傷や切り傷どころではなくなる。

何か無いのか。こっちの常識でなくたっていいんだから。

えーと……防犯グッズ。防犯グッズでいけば、警報音。唐辛子スプレー。スタンガン。

……出来るかなぁ？　下手すりゃ昇天だよなぁ。

なぁ、雷って分かるか？

俺を包む風が動きを速める。

「まてまて！　落ち着け。すぐにやろうとするな」

慌てて言えば、動きは納まった。

あー焦った。こりゃ駄目だ。スタンガンも無理。電波ちゃん相手に威力これぐらいで～とか調整が難しすぎる。

他に何か無いのか防犯グッズ。使おうなんて考えたことが無かったから他に……

そーだよ！　逆だよ逆！　犯人の思考でいけばいいんだよ！　クロロホルムだ！　違った、イソフルラン！　いや違ってはないけどイソフルランで！

って、電波ちゃんに分かるかよ！

俺は拳を握りかけたところで、己に突っ込んだ。

結局のところ電波ちゃんとの意思疎通がままならないと、どうにもこうにもやりずらい。うん。同調力は必要だ。

でもまぁこれなら何とかなるだろう。ついでに、坊ちゃんも焦って大技出そうとしているようなので、このあたりで終わりにしないとこちらが拙そうだ。

眠る、眠たくなるって分かるか？

ふわっと風が舞う。

何だか不満げな感じがするのだが、不満という事は分かるという事だろう。

あの坊ちゃんを眠らせられるか？

この問いには、簡単だと言うように動きが早まる。

それを確認していると、ぼっちゃんの大技が完成したようだ。俺も電波ちゃんに頼んでみる。

じゃ、やってみてくれるか。

片手を空へ、片手を地へ向けたぼっちゃんが不自然にたたらを踏んだ。

おーーぉう？

が、ぼっちゃんは踏みとどまり最後の口頭契約を唱えあげた。

「其は波動の素　其は基の要　汝ら集いて爆と成せ！」

坊ちゃんの両手に集まる流れが凝縮され――

と、そこでぐらっと姿勢が崩れてゆく。既に目に力はなく閉ざされかかっている。

「ぅをいっっ！！！？？」

何て中途半端なところで終わっちゃうの！！

そんな危険物持ったまま寝るなよ！！　やったの俺だけど！　でもそのタイミングは無いだろ！！

突っ込む暇も無い。俺は猛ダッシュ。

口頭契約の内容からして火系統よりの何か。とっておきなのだろうから威嚇程度の威力ではない事間違いなし。それを手のひらに出現させたままとなると完全に自爆。

「せめて消せってんだよっ！！！」

倒れた手から離れかけた見えないソレを思いっきり蹴り飛ばす！

空高く飛んで行ったソレは、暫し経ったところで盛大な爆発を起こした。

あー……なるほどねー……

俺を爆殺しようと。

あの規模だと余波は避けられないし、吹っ飛ばされた地面やら石

やらが地味に怖い。

ふぅ嫌な汗かいた。

額の汗をぬぐい振り返ってみると、何故かみなさんずっこけていた。

をいをい皆さん。今の試合のどこにふぁにーな要素があったと言うんだい？　こちとら殺されかけてんですよ？　そんなにおもろければ変わってくれれば――

あ。いや、寝てる？

教師以外にも学生がかなり居たのだが、学生の方は軒並み野外で昼寝を始めていた。教師の方はふらついているのが二人程、もう三人は真顔でこちらを睨んでいる。

え……え…？？

「勝者キルミヤ・パージェス！」

突然名前を呼ばれてびくっとして見れば、スレンダーさんにニッコリと笑いかけられた。

「キルミヤ・パージェス。夢魔の檻を解きなさい」

むまのおり？　……むま……夢魔？　夢魔の檻？　……あ。

はい。

俺は手を横に振りながら電波ちゃんたちに眠りを解除するように頼む。

手を振ったのは、それが魔術でよく使われる解除の型――だったような……

こうしておけば、電波ちゃんじゃなくて魔術によるものと思うだろう。たぶん。

審判のスレンダーさんも夢魔（魔術）の檻だと思ったらしいし。たぶん、大丈夫。たぶん。

「キルミヤ・パージェス。勝負はつきました。宿舎に戻りなさい」

いつもより丁寧な口調でスレンダーさんは俺に言い、くいっと顎で行けと命じる。

ぼちぼち目を覚ましだした生徒達が何が起きたのかとざわめきだしている。これで坊ちゃんが起きたら卑怯だ何だと言われそうなので、そそくさと退散した方が良さそうだ。

一応礼儀かなと思って、まだ寝ている坊ちゃんに一礼してすたこらさっさとその場を逃げた。

第二十八話　面白い反面悩みどころ

術に慣れた教師に対しても効果を発揮した上級魔術、夢魔の檻。
学生ではひとたまりも無かっただろう。見たところ避けるばかりで口頭契約を唱えている様子は無かった。となれば空切。解除も空切りしていたところを見ればそれが正解だろう。一見すれば。

話では初級魔術さえ使えないと聞いていたが、とんだ狸だったわけだ。
さすが、あのグランの弟というところか？

「くっくっくっく……」
「……う…」

密かに笑っていると、サジェス家の三男が目を覚ました。
頭を振りながら体を起こすが、何が起こったのか分かっていないのか、周りを見回し相手が居ない事に眉を寄せてこちらを見て訝しがっている。

「勝負はつきました。フェリア・サジェス」
「！？　それはどういう――」
「貴方は戦闘不能となり、負けました」
「なっ……」

目を大きく開き、信じられないという顔をする三男坊。
これがかの腹黒一家の人間かと思うと、可愛い反応だ。どれだけ甘やかされてきたのか、それとも期待を掛けられなかっただけなのかどちらだろうか？
何とも素直な子供の反応についつい悪戯心が出てしまうではない

か。

「そして、貴方はキルミヤ・パージェスに助けられました」
「……は？」

予想外の言葉に、三男坊は固まった。

「どこまで覚えていますか？」
「え……」
「どこまで覚えているのですかと聞いています」

少し威圧を込めると顔が強張り、口を震わせながら動かした。

「膨爆（イストス）を……使って……」
「そこから先はどうですか？」
「……」

動けないでいるので威圧を緩めると、三男坊は怯えながらゆっくりと首を横に振った。

「貴方は膨爆を完成させてキルミヤ・パージェスの術に掛かりました。
結果として制御は失われ、収束点である貴方の手の中で発動するところでした」

みるみるうちに顔色を青ざめさせてゆく。
あまりに素直すぎる反応に、どちらかというと教育の手を抜かれたのではないかというような気がしてきた。
かの一族ならば顔芸などお手の物だろうに、この三男坊にはそれが何一つ備わっていない。

これだけの教師が集っていながらみすみす生徒を殺すような馬鹿は居ない。それが分からないのだろうか。先程も結界を張ろうとしていた。

ただし、結界でしのいだ場合は三男坊の手は軽くない怪我を追っていただろうが。暴発の怪我が片手で済めば安いものだ。

「ですが、発動する前にキルミヤ・パージェスが蹴り飛ばしました」

そう。あの弟は事もあろうに蹴っ飛ばしたのだ発動体を。

本人にしか操作出来ないはずの術に干渉して。

「け……け？」

蹴り飛ばしたというのは三男坊も意外過ぎたのか、言葉にすらなっていなかった。

そうだろうと、そこは私も同じ思いだ。

膨爆は着弾点で爆発する。例外は術者で、それ以外の物理的接触は全て爆発へと繋がるはずだった。

他には、物理的以外の接触。即ち、魔力による接触だ。とはいえ、魔力による接触とは術操作の干渉というもので、決して蹴っ飛ばせるようなものではない。あと可能性があるならば、魔力コーティングを施して即席の物理結果と成すぐらいだが、あの短時間でそこまで出来る人間がこの国に何人居る事だろうか。魔術師団員と言っても昨今は戦争もなく平和ボケしかけている連中に咄嗟の行動でどこまで出来るか分かったものではない。

「貴方を含めここに居る者に怪我一つ無いのは、それが理由です。誇りを大切にしたい気持ちも分かりますが、無関係の人間を巻き

込んでも良しとするだけの誇りかどうかは考えてください」

三男坊は唇を噛みしめ、俯いた。

これは相当悔しがっている。二度三度と繰り返すかもしれない。

今回はグランの弟が何とか治めたが、次もそううまく行くとは限らない。

どこかで一度痛い目にあった方がいいだろう。

「宿舎へ戻りなさい。

他の者も、宿舎へ」

手を叩くと、眠らされていた生徒達も訳が分からないまま不満そうな顔でぞろぞろと戻って行った。三男坊も他の生徒に半分支えられるようにして逃げるように去って行った。

残ったのは、夢魔の眠りを耐えた教師の面々。

「ラウネス先生、今のは上級魔術でしたな？」

白髪が幾スジも見える、ここで十何年も教師をしているクレイスターが渋い顔をして言った。

同意を示し軽く頷くと、他の教師からうめき声があがった。

「何と言う事ですか。あれだけの実力を持ちながら今日まで隠しているとは」

そう言ったのは、最近着任した教師のヴェルダ。一年の実技を担当している教師だ。

彼からしてみれば実力がありながら不真面目を通している生徒は

許しがたいのだろうか？

「ヴェルダ先生、落ち着いてください。彼も何か理由があったのではないですか？」

「理由とは？」

魔術構築と理論を担当している老齢のテリオスがわざとらしく目を丸くした。

「さあ、それは今のところ何とも。この中でキルミヤ・パージェスと正面から話した者は居ないでしょう？　一度話して見ると面白い事が聞けるかもしれませんね」

実際、話すだけでも面白いのでいい暇つぶしの相手にはなる。この魔導博愛精神の人種が面白いと思う感性が残されているのかは別の話として。

「ではラウネス先生、キルミヤと話してみて頂けますか？」

「あら。私がですか？」

クレイスターの言葉に、何故と問うと決まり文句が返ってきた。

「講義を受け持つ者が生徒一人に接触するのは平等性に欠ける事ですから」

何だそれはと私はいつも思うが、ここの人間には当然のルールなので反論したところで無駄だ。

いいですよと返事をして、ここは切り上げよう。

一つ頷き了承を伝えると、渋い顔のままクレイスターは去り、テ

リオスは探るような視線を寄越してからその後を追うように行った。

「……ラウネス先生、一つ気になるのですが」

一人残ったヴェルダが迷うような顔でいた。

「……あれは、本当に魔術でしたか？」

「魔術以外には無いと思いますが」

ヴェルダは説明しずらそうな顔で、眉間にしわを寄せたまま言葉を紡いだ。

「確かに上級者になれば手順を踏まずに使う事が出来ます。魔力を操る事に長けていれば手順の補助は必要ありません。

でも、そういう感じがしなかったんです。魔力を練っている感じが」

彼はどうやら嗅覚が他の者よりも良さそうだ。

だが生憎、そこから先へと進む知識は持ち合わせていないだろう。

「しかし、魔術以外には有り得ませんよ？

あれは確かに範囲にわたって眠りの作用をもたらしていました。

そんな事が出来るのは夢魔の檻ぐらいでしょう」

「普通なら私もそう思います。でも違和感が拭えないのです。

世界を巡った経験のある貴方であれば何かご存じではないかと思ったのですが……」

「ご期待にそえず申し訳ありません」

ヴェルダは力なく首を振り、弱く笑った。

「私の勘違いであれば問題ありません。時間を取らせてしまい申し訳ありませんでした。キルミヤの事をお願いします」

頭を下げたヴェルダは、少々意外だった。

ここに集まる魔術師達は大抵魔導博愛主義だと思っていたが、一生徒の為に頭を下げる者がいるとは思ってもみなかった。

ヴェルダは律儀に礼をして戻っていった。

完全に後ろ姿が見えなくなって、溜息をつく。

個人的には興味深く、面白いので観察する分には全く問題はない。

しかし、一体どこまで報告したものか……

第二十九話　特技：見なかったふり

何か、嫌な感じがする。

こう背後から忍び寄る悪寒っていうの？　ぞくりとする寒気に顔が引き攣る。

これはアレだほら、夜中一人でトイレとか行ったりすると遭遇しそうな、夏場の例の風物詩。何故か男女の親睦の場と化す意味不明のイベントの元なるアレ。

……俺は別に怖くなんかない。子供じゃあるまいし、番組見た後一人暮らしの狭い部屋に怯えて友人宅へ押しかけたりするような事は無い。部屋のトイレに行けなくてコンビニに走ったとか無い。断じて無い。無いったら無い。

故に俺は振り向かない。怖いからではない。そんなわけがない。見る必要が無いからだ。そう、必要が無い事をわざわざする必要がどこにあるというのだ。

……

俺の足音の後に重なるようにもう一つの音が連なる。

……

言いしれず圧し掛かってくるプレッシャーに俺は徐々に精神を蝕まれていき、とうとう振り向いてしまった。

そこには、やや俯き、顔が前髪で隠れた女。うっすらと見える口元は笑みの形に吊り上がって――状況認識放棄。戦略的撤退を選択。

「でたーーーー！！！！」
「え？　え！？　あ、ちょっと！！」
何か聞こえた気がするが無視。
「待ちなさい！！　あなた人を化け物か何かのように見ないでくださる！！？」
気の所為気の所為。俺には残念ながら霊感は無い。
「ちょっと！　待ちなさいって言ってるでしょ！！」
今の俺は体力ふりーだむ！　持久走ならどんと来い！！

撤回。

昨今の超常現象は持久力があるようだ。

「……」

「……」

「……」

「……」

超常現象ことクロワッサンはぜーはーいいながらこちらを睨んでいた。

一般人代表こと俺もぜーはーいいながらクロワッサンを睨んでいた。

「……なんで……にげるの」
「…にげない方が……どうか……してる」
「なに……よ、それ」
「……うつむきかげん、で、うすら笑い……は、反則……」
「はあ？」

ちょっとタンマと手を挙げ、一先ず呼吸が落ち着くまで無言の停戦を提案。
クロクロもやっぱりしんどいのか同意を示すように眉を顰めて呼吸を整える事に専念した。

何の因果かここは二棟と一棟の間の裏。めったに誰も来ない件の場所。

よーやく落ち着いて草の上に座ったまま胡坐を掻いて膝に肘をあて顎を手のひらに乗せる。
クロクロは最初こそ両手を地面についてへたり込みそうになっていたが、今はもうお淑やかに足を横に曲げて背筋を伸ばし座っている。

うーん……やっぱりなぁ、そうだろうとは思ってたけど、このお姫様はあれだ。

「なあクロクロ」
「なんですか」
「猫かぶりしんどいだろ」
「なっ……何の事ですか」

狼狽えるあたりが実直で単純な性格を表している。
最初こそ手札を一枚一枚切って見せ、追い詰めるような話しぶりを見せたがそれから後はひたすらネチネチ纏わりつくだけ。搦め手を使うわけでもなく、追い込み漁をするわけでもなく、ただただ阿呆と言えるぐらい正面突破できていた。

それに、

「一番最初に俺がクロワッサンって言ったら、『誰がクロワッサンじゃ』って言ったよね？
『じゃ』って言ったよね？　普通お姫様が『じゃ』は無いよね？」

俺の知識としてはお姫様が『じゃ』はあり得なくはないが、この世界ではたぶん無いだろう。
物語でもそういう口調のお姫様は無かった。

クロワッサンは悔しそうに唇を噛みしめ、やがて諦めたように溜息をついた。

「苦手なのよ。堅苦しい言葉は」

取り澄ましたような殻が外れ、力の抜けた顔でクロワッサンは言った。

「なかなか堂に入っていると思うけど？」
「世辞はいらないわ。貴方は相変わらず無礼ね」
「そうか？」
「……説く事は諦めるわ。
それはそうと、何故逃げるの」

俺は一つ溜息をついた。

「だーかーらー。後ろに俯き加減で口裂け女ごとく笑ってる奴が居てみろ。しかもしょっちゅう。びびるわ。悪夢見るわ。しまいにゃ泣くぞ」

「……本当に無礼ね」

「自覚ないわけ？　あれは超常現象レベルだよ？　昼間でも気配無く現れては追いかけられるって、小っちゃい子だったらトラウマ確定だよ？」

「誰が幼子にするか！　そもそも幼子であればもっと素直に話を聞くわよ」

俺は恐ろしいものを見たという顔で口を覆った。

「そうやって洗脳して下僕を増やすのか！　こわっ！　皇女こわっ！」

「何故下僕！？　いついったいどこでそんな言葉が出てくるの！」

「素直だとか言っちゃってるあたり、言う事聞く忠実な下僕を求めてる感じだよねー」

「言わせておけばっ！　私はこの国の為を想い力ある者には相応しい働きをと」

「だーかーらー、それが下僕思想だっつってんの」

「はあ！？」

「そりゃこの国にとっちゃ大切な事だろうよ。でも個人の大事と国家の大事は違うだろ？

主人でもない限り命じる事は出来ないだろうが……

……あれ？　俺って一応貴族だっけ？」

俺の言葉に眉を顰めていたクロワッサンは、ハタと気付いた俺に

何を今更と首を傾げていた。

ちょっと待ってね、今俺整理中。

えーと、一応俺は貴族に位置する人間だ。非常に驚きだが。

そうなると、形式上、王に仕えている事になる。絶対王政なのだから。

ってことは、クロクロがその王権を発動してきたら俺に抵抗する術は無くなる。

……えーと。えーーっと。

……見なかったことにしておこう。

第三十話　ましなコマンドを希望

「まぁいいや。そんで今度は何の用？」

ごまかし紛れに今更に聞いてみよう。

案の定クロクロは盛大なため息をついて口を開いた。

「何故力を隠しているの？」

「してないしてない」

パタパタ手を振ると、さらに溜息をつかれてしまった。

これは意見の相違だろう。俺としてはただ全力投球してなかっただけだ。と、誤魔化しても仕方がないか。

確かに隠す気は初めからあった。それを誰かに非難されるとは考えてなかったが。

「だったら初級魔術を使って見なさいよ」

ふっふっふ。いいだろう。無問題だ。

俺は掌を前に出して口頭契約を唱える。

結果は嬉し恥ずかし、マッチ火が灯るのみ。

いやーいいねー。安全って最高だと思うわ。

俺が満足して内心頷いていると、対照的にクロクロの視線が凶悪なものへと変わっていた。

「……どうあっても見せる気は無いと言う事ね」

「あのさぁ、勝手に人の事を過大評価するのやめてくれる？
何と言われようとこれが俺の実力だし、クロクロが望むような…
……そういや何を望んでるんだっけ？」

クロクロはがっくりと肩を落とした。
そんな気落ちしないでほしい。聞いたかもしれないが一回聞いたぐらいじゃ忘れる。口頭での内容なんて議事録にでもして残しておかないと言ったうちには入らない。それが大人の世界というものだ。
何度それで泣きを見たことか。

頑張れクロクロ、大人への道のりは遠いぞ！

無駄に応援していると、諦めきった顔でクロクロは再び口を開いた。

「魔導師団員に入らないかとずっと聞いてるでしょ。
きちんと実力を出せば私が口を挟まなくても問題ないとは思うけど」
「ないない。魔導師団員（それ）は無い」
「どうして？　誰もが羨む魔導師団員よ？　一員となればパージェス家としても何かと都合がいいんじゃないの？」
「まぁパージェスとしては願ったり叶ったりかもな」
「でしょ？」
「でもマッチ火（これ）だからね」
「本当に嫌になるわ。
貴方、決闘の時に上級魔術を使ったでしょ」

……そうか。あれは上級に位置づけされてしまうのか。ちょっと迂闊だったな……

誤魔化そうにも、あれだけ教師が居合わせた中で判断されたものを否定するのは不自然だし、だからといって肯定するのも避けたい。となると、

「何で決闘の事知ってんの？」

昨日の今日でと首を傾げて聞いてみれば、呆れたという顔をされてしまった。

「学院中知ってるわよ。サジェス家の人間が決闘を持ち出して挙句の果てに負けたって」

「げ……」

「げって何よ。勝っておいて、げ、はないでしょ」

いや、げ、だ。まさしく、げ、だ。げ、で間違ってない。

だってあの坊ちゃんだよ？　鼻で笑うという天然記念物級の特技をお持ちの方だよ？

それが学院中に負けたと広まれば報復に出てこないはずがない。

俺の平々凡々ライフがどんどこ遠ざかってしまうではないか。

ここに来ている時点で彼方へと行ってしまっている事はこの際気にしない方向で。

「勝ったってつもりは無いよ。ただ穏便に済ませたかっただけで」

「穏便ねぇ。それなら負けてしまうのが一番良かったでしょうね」

「……あの攻撃に当たれというか。さすがクロクロは超常現象族。鬼だな」

「人を化け物の類にしないで。何よ、ちょーじょーげんしょー族って」

「一言で言うと『自然科学では説明されない現象』が超常現象だな」

「しぜんかがく？」

「自然科学っていうのは、科学的方法により一般的な法則を導き出すことで自然の成り立ちやあり方を理解し、説明・記述しようとする学問の総称かな」
「かがくてき方法？」
「物事を調査し、結果を整理し、新たな知見を導き出し、知見の正しさを立証するまでの手続きであり、かつそれがある一定の基準を満たしているもののこと……だったっけ？
簡単に言えば、誰が見てもそうだねって言える方法だって事だ」

噛み砕いて説明すると、クロクロは考え込むように眉間に皺を寄せて視線を落とした。

「つまり……私は誰が見ても説明できない現象だと言いたいわけ？」

おお！　すごいすごい。ここでは意味不明の言葉ばっか羅列したのにクロクロが順応しようとしている。

「当たり当たり。クロクロは頭いーね」

拍手しながら言ったら殴られた。

「私はそんな変なものじゃないわよ！」
「つっても気配なく後ろに立たれたらびびるわ」
「それは、立場上稽古してなきゃならないから自然と身に付いたもので」
「気配なく後ろに立ってする事……暗殺？」

再度殴られた。

「逆よ！　何で私がやる側になるのよ！」

「え？　クロクロって暗殺されかけた事あるの？」
「ないわよ！」

力いっぱい否定された。
そんな経験もってない方がいい事だとは思うが、そんなに力いっぱい否定しなくてもと思ってしまった。
ついでに、もしもの為の護身術を身に着けている事はよくよく分かったが、それが人の後ろに気配を絶って近づく理由にはならないと思うのは俺だけだろうか。

「もういいわ。
そうやって隠そうとするのなら、何故隠すのかを突き止めるまでよ」

自信満々に言いきられてしまった。
押してダメなら引いてみろという思考回路は持ち合わせていないようだ。ガンガンいこうぜ！　みたいな思考回路しかない感じで。
もっとましなコマンドアクションはないのだろうか？

言うだけ言って満足したのか、クロクロは立ち上がって服についた葉っぱを払い行ってしまう。

これで何度目になるか。サボり。
魔導師団員うんぬん言う以前に退学になりそうな勢いだ。

第三十一話　聞いてない・・・

段々溜息をつく回数が増えていっている気がする。
それもこれも坊ちゃんの決闘騒ぎ、元をたどればクロクロが原因だ。
順調に落ちこぼれ街道を突き進んでいたというのに今では実力を隠していると囁かれるようになり、何より実技で出来ないと言っても何度も何度もやらせようとしてくる。魔導を模したものならばまだよいが、純然たる魔術となってくると、出来るとは言えない。

さあここで問題が出る。何が模しているものか、純然たる魔術なのか、どうやったら分かるのか。
魔術と魔導の区別もされていない教育体制では誰に聞くわけにもいかない。少年も宣言通りアナタドナタデスカ状態に無視してくれている。こうなったら取れる手段はただ一つ。

……勉強。

つかれた。ほんっとうにつかれた。
法則を見つけるまでどんだけ掛かったか。

いわゆる上級魔術と言われる類のものは総じて純然たる魔術に部類される。
推測半分の見解だが、同調力があまり無い者では最大出力もあまり大きなものにはならず、研究対象としての魅力が無かったのではないかと思われる。
少年曰く、魔術師がガス欠起こした時用の非常手段なので、そもそも高出力を期待もしていなかったのだろう。
ついでに、上級中級初級の判断基準は扱う難しさ半分、威力・効

果が半分。従って高威力・高効果でないものは中級とされる模様。
役に立たないものは評価されないというのは中々シビアだ。

そんでもって中級はほとんど魔術。一部が違う。
簡単な見分けは口頭契約の有無だが、魔術もそれと同様の手順を踏むものがあるのでそれだけでは分けられない。で、次の見分けはその内容。魔術で使用される文言と魔導を模しているもので使用される文言は異なる。
何故異なるという事が分かったかというと、そうかなと思われるものとそうでないもので対比表を作ったから。
何で文言の対比表を作るに至ったかというと、文言どころじゃなく動作から系統から思いつく限りの要素を表にしたから。

角が当たったら泣く程痛いあの本が相手。しかも何十冊も。果てそうになった。
疲れるわ飽きるわめちゃくちゃ面倒臭いわ。状況が状況でなかったら絶対にしなかったと確信を持って言える。

いやもう本当に、仕事でもここまで短期間で調査した事ないぞ俺。

「いい加減真面目にしろよ」

目の前の青年にそんな事を言われてしまった俺。
そんな青年に自信を持って言おう。

「通算人生中、最高レベルの集中力を発揮し続けた俺の残体力はゼロだ」
「なんやそれ。どーでもええからさっさとし」

なんだか投げやりな調子の青年と俺は、ただ今実技の補習中。

青年は出来そうなのに出来ないという何とも惜しい部類だが、俺は完全放棄。

お題が純然魔術……純魔でいいや。それなので、やる気が出るはずもない。

ほげーとしながら両手を前に突きだして同じ言葉を繰り返す青年を体育座りで見学していた。

教師は居ない。最初は居たが、途中で自習と化してしまった。職務放棄万歳。これで青年がいなければさっさと宿舎に戻れるのだが。

「ほら、見てないでコントロールの練習でもし。避けとったら上達せぇへんで」

その通りだが、その件については理由を聞いてスッパリ諦めている。

少年のおまじないがいつまで持つかは分からないが、なるようになれだ。対策は一応考えているし、それにおそらくその時までここに居られるとは考えていない。

「そんなんやったら野戦で苦労するで？」

「やせん？」

「野外戦闘実習や」

おいおいおい……いきなりキナ臭いぞ。今まで実技に講義とごくごく一般的な学問の一つって感じだったのに。

屈強な戦士はもちろんですが、それよりも一人で何百という兵力となる魔導師が必然的に求められ――

魔導師は兵士。それも絶大な兵器という役割。

クロクロの言葉が蘇り、思わず顔を顰めてしまった。

「んな顔せんでも危険は無いんやで。やる場所も学院奥の森や」

あれ？　学院奥の森って少年と入ったとこじゃ？

ん～やっぱりは普通は入らないところみたいだ。

「立ち入り禁止にはなってるんやけど、魔物はおらんし、害獣も気性荒いのおらんて聞く」

居ないどころか、一匹たりとも出会ってない。

「まあ部隊行動が出来るようにっていう練習なんやろうな。確かキルミヤはサジェスとの班だったと思うで。上級生はさすがに覚えてへんけど」

「は！？」

「四年までで、各学年二人ずつの八人が一班になるはずやで」

「へ～縦割りか。連帯と規律がメインになりそうだな。ってちがーう！！

「怠けてたら容赦なく先輩にたたかれるで」

「違う！　そこじゃない！　そこは気にしてない！」

「？」

「ハテナじゃない！　何で俺が坊ちゃんと一緒の班なんだよ！」

「あー……それはなぁ、俺かてそう思うけど、ここで和解しとけゆうことやろ」

「出来ればとっくにしてるわ！」

「せやな」

「えーん。青年の反応が薄いよー」

「泣くな泣くな。分かったから」

適当な青年の反応も分からないでもないよ。どうしょうもないも

んねぇ。
ないけどもうちょっと付き合って欲しかった……

「ちなみにいつ？」
「野外？　来週末やで」
「早っ　そんな早いの？」
「……入学の時に話あったで」

入学の時ですか。
はい。しっかりサボってました。少年と。

「内容はあれか。行軍練習みたいな？」
「大体はな。戦闘訓練も兼ねてるから一回ぐらいは害獣とやりあう事になるって聞いとる」

害獣か……まぁ害獣ならなんとかなるか。先輩方が居るならばバッチリそちらはお任せして、一年生はプルプル震えて縮こまっていよう。それはそうと、

「なぁなぁ青年」
「なんや」
「収束点どこにしてる？」

手元を指さし聞いてみれば、は？　という顔をして右手を出した。

「青年ってさ、利き手左だよな」
「あぁ、それが？」
「収束点を左にしてみれば？」
「はあ？」

教科書とも言える魔術書では、収束点の基本中の基本は右手とされている。

青年が右手を出したのもそれは当然の事で不自然ではないのだが……

訝しみつつも青年は再び手順を踏み、今度は流れが左手へと集まった。

そして、ボフンと音を立てて青年を中心とした風が巻き起こった。

第三十二話　気遣い

ぽかん。とした顔で突っ立っている青年。

「おーい？」

「……出来た」

呟いて左手を凝視している。

出来ちゃった事に驚いているようだが、そんなにびっくりする事でもないだろう。

青年から流れた力（？）が右手に集まりかけながら、何でか左にも流れようとしていたのだ。

無意識に利き手に集めようとしてしまうのか、そのせいでうまく収束していなかったので、最初から収束点を左にしてやればすんなりと集まりましたと、それだけの事。

でも、出来たら嬉しいのは分かるかな。

俺の場合は火災発生で焦りまくったけど。

「おめでと～」

青年はまだ鈍い反応で、ゆっくりと首を動かしこちらに視線を戻した。

「なんでや？」

「いや、出来たからおめでと～」

「手」

「て？」

「左って」

「左？」
「言っただろ左やって」
「言ったけど……それが？」
「なんでや？」
「なにが」
「だから手」
「てってなんだよ」
「左だって」
「左がなんだよ」
「言っただろうが左やって」
「だから言ったけど何なのよ」

何この無限ループもどき。飛んでくるボールが明後日すぎてキャッチ出来ない。キャッチボールというのは相手が取れるボールを投げるのがマナーだというのに。

俺がうまく投げれているかは知らんが、内容がほぼオウム返しなので意味わかりませんよ～って事ぐらいは伝わっているだろう。

それが証拠に、ぼんやりしていた顔がもどかしそうな苛立ちかけたものになっている。

「まーまー落ち着こうよ青年。ほらほら座って」

トントン地面を叩くと、青年は大人しく俺の前に座った。

いや、別に目も据わらせなくてもいいんだよ？

正面からそれはちょっと向けられたくないんだけどなぁ。悪い事なんてしてないのに逸らしたくなるというか、ほら、パトカー見たら無駄に緊張するというか、それと似たようなものというか。

「で？」
「青年、もうちょっと説明してくんない？　何が何やら分からないんだけど」
「ほんまに言うとるんか？」
「わりと真面目に」
「……はぁ」
「溜息つかれたー。やだー。この状況やだー。説明早くしてー」
「……はぁ」

長っ。
しかも無性に悲しくなるじゃないか。そんな『あほらし』みたいな顔されたら。

「なんで収束点を左にすれば出来るようになるって分かったんや？」
「そんな事かよ……目が据わってるから何事かと」
「そんな事やないわ。ええから答え」
「えー……うそですごめんなさいなんでもないですこたえますいますぐこたえます」
「ええから、はよ答え」

うう……本当に青年が怖い。全く相手にしてもらえてないよ。

「左でやれば絶対に成功するとは思ってなかったけど、右よりは確率が高いと思っただけだよ」
「なんでや」
「右に力を集めてただろ？」
「……あぁ」
「でも同時に左にも流れてたんだよ。で、青年って利き手が左だったから、無意識にそうしちゃったのかと思って。だったら始めから左でやればいいかと」

「……やっぱりか」

肩を落として、ははは と乾いた笑いをあげる青年に俺は何と答えたらいいのだろうか。

いい加減お尻が冷たくなってきているので帰りたいな～とか思っているのだが、言ったら帰らしてくれるだろうか。

「キルミヤ。言うとくけどな、それは見えるもんやない」

「……ほ？」

「ほ、やない。収束点なんて本人にしか分からへんし、流れなんて論外や」

「……見えてるってわけじゃなんだが、何となくというか……」

「それでも分かるっていうのは普通やない」

俺はもじもじと体育座りから似非正座にポジションチェンジ。

かれこれ一時間近く座ってたから、もうお尻限界。

「聞いてるんか」

「聞いてるよ。けど、そんな事言われてもな」

「目立ちたくないんやろ？　その事は口にせん方がええ。言うたら絶対騒がれる」

「……おぉう。なるほど、そうなのか。お？　や。ちょっと待って。

俺決闘した時、たぶん収束点に集まったそれっぽいのを蹴っちゃったんだけど……」

「は！？　蹴った！？」

「あ、でも待てよ。その時はほとんどが昼寝開始してたから……見てたのは教師が何人かぐらいか？」

「ちょっとまて！　お前、今、蹴ったって言ったんか！？」

「もー何だよ。声でけーよ。興奮すんなよ血圧上がって血管切れる

よ？」

うわー　と、青年は俺の言葉を無視して頭を抱えだした。

「有り得ん。有り得なさすぎるわ。蹴るってなんや？　蹴るって発想自体なんや？　阿呆か？　阿呆なのか？　せえへんやろそんな考え。出来るなんて思わんやろ普通。そんなんものが着弾爆発だったらその時点で終わりやろ。そんなん誰がしようと思うんや。出来る出来ん以前にやろうとする頭の方がどうかしとるわ」

ひ……ひどくね？

そこまで言わなくてもよくない？

「分かった。お前は出鱈目や」

決然とした表情でいきなり言われても反応に困る。

しかしあれかな。俺が派手なノーコン魔術を黙ってて欲しいと言ったり、とことん実技で出来ないを繰り返しているのを青年なりに解釈して助言してくれたって事なんだろう。

そうだとすると、青年はこの先大丈夫だろうか。

家の再興を目指しているのなら、上へと昇るという事だろう。そうなれば俺からしてみれば楽しいその性格が、どこかで邪魔になるかもしれない。そうなった時、青年はどうなるだろうか。

って余計なお世話だな。そん時はそん時。青年がどうにかするだろう。

俺がじっと青年を見ていると、青年は眉を潜めて怪訝そうな顔を

した。

「なんや？」

「いや、教えてくれて有難う。今度から気を付けるよ」

「ぇ……いや……別に」

照れてる照れてる。ほほえましいなぁもう。

青年にとっては気恥ずかしくて勘弁してくれっていうところだろうが、こういう事はちゃんと言っておきたかった。

言える時に言わないと言えなくなることもあるからね。

第三十三話　そこまで飢えてはない

ざくざくざくざく。
がさがさがさがさ。
……。

これ程楽しくない遠足があるだろうか。
前を神経質そうなあんちゃんに、後ろは殺気立った坊ちゃんに挟まれた始終無言の歩行作業。
逃亡したくても今の俺には青年によって強制参加という名の暗黒魔法が掛けられている為、列から外れる事も出来ない。

それにしても何の訓練もしていないのに行軍訓練なんて変だなとは思っていたが、何となく分かってきた。
一年から四年までで参加人数は百ちょい。中隊規模。最小単位の班は各学年二人、一年と二年は二人から三人の、八人から九人で構成されている。
普通班の単位は四人から六人だろう。それよりも多い人数で組まされているという事は、一年は完全に見学兼、上級生にとっての足枷だ。
班長から上、士官の役どころを教師ではなく全て上級生で分担しているところを見てもそうと思われる。
何の訓練も受けていない一年を彼らの通常ペースで歩かせると、簡単にへたばるし、先頭にも後尾にも置けない。お、となると一種、護衛のスキルも上は要求されちゃってるわけだ。
この森で何から護衛？　というぐらい穏やかな森だけど、訓練上はそうなるだろう。

「でも普通の軍隊と比べると随分と変則的だよな……」

「パージェス、何か言ったか」

ぼそりと呟くとすぐさま前を歩く神経質あんちゃんが振り返る。

全面的に俺が悪いけど、振り返るなよ。今は全体で動いているからいいけど、班行動となった場合は前方警戒の要なんだから……

「いえ、何も言っておりません」

びしいっっと背筋を正してはきはき答えると「私語は慎め」とだけ言って、前を向くあんちゃん。いつもの俺とは百八十度態度が異なるが、この場面で適当な事を言ってうだうだ説教を喰らう事を考えればお安い対応だ。

俺の後ろでチッと舌打ちした坊ちゃんが後ろの三年の先輩の気に障って睨まれているが、お家の権力が轟いているのか何かを言われる事も無かった。

顔を合わせた時もだが、先輩方は貧乏くじをひいたという顔を現在進行形で披露されている。

そりゃまあ学院中に決闘の件が広まっちゃってるわけだから、俺と坊ちゃんの中が悪いのは知っているだろう。さっきの反応から見ても坊ちゃんの家を把握してるからして、ストレス発散先は俺に限られてくる、はず。これが明日の夕方まで続くのだから逃亡したくもなろう。

救いなのは、班長のあんちゃんが神経質だが生真面目な人物なので謂れのない叱責は無いという点。これが俺の聞きかじった荒事専門の方々の場所ならばどうなっていた事か。

気を取り直し軽い荷物を背負い直し、さくさく足を進める。

この荷物も随分と軽い。この手のものは一般人には重くて重くて小一時間も歩けない代物だ――と、勝手に想像していたが、想像だとしても実際軽いだろう。

何せ魔術師、火器を持つ必要が無く通信機器も同様。水もほいほい出せる。食糧は必要最低限で現地調達せよとの事なのでそちらも質量は大したものではない。他に入っているのは簡単な医療キット。これも大したものではない。

それでも二時間程も歩けば坊ちゃんを初めとして、一年の息はあがっている。

平気そうなのは青年と少年と、あと名前知らない若者二人。

どうだろうかこの現代っ子のごときヘタレッぷり。たまたま全体の指揮を執る四年の精悍な顔つきをした赤髪の恰好いいあんちゃんを見たとき、あんちゃんは無表情だったが、参謀役らしき女顔の綺麗どころは渋い顔をしていた。

大変そうだなぁと思っていると綺麗どころと視線がかち合い、慌てて逸らす。

何か言われるのも嫌なのですぐさま隣の列の影に重なるようにずれ、視線を前に戻して脈打つチキンハートを宥める。

目的地はこの先にある開けた場所、このペースでいけばあと一時間弱だろうか。

休憩地点のそこでそのまま野営するので、おそらく一時休憩は取らずそこまで行くだろう。短時間の休憩だと一年は逆に速度が鈍る可能性が高い。

一年がぜぃぜぃ言いながら目的にたどり着いたのは予想よりも遅く、一時間ちょっと過ぎ。昼の手前。

どうやら班ごとに食糧調達と野営地の防壁づくりをする二手に分

かれるようで、殆どの一年は防壁づくりに割り振られていた。防壁といっても、ちょっとした高さに土を盛る程度なので初級魔術を野営地をぐるりと囲むように地道に使っていけば完成する。三年一人と二年、一年の分担というのが恒例という様子だ。上級生の動きによどみが無いのでそんなところだろう。

そして何故か食糧調達組になっている俺。

そりゃ土系統の初級魔術が出来るかと確認を取られた時に「手のひらに土を出すぐらいなら出来るかも」と答えたけど、恒例を無視して迷いなく決められたのは……

と、悩んでいると体力残ってそうな青年、少年、若者二人も食糧調達組だったので、なるほどコレも恒例かと納得。

意気揚々と班ごとに食糧調達に出かけたのだが、いやぁやっぱりこの森は食材の宝庫だね。

「……パージェス。それは？」

前を歩いていた神経質あんちゃんが振り返ったとき、足を止めて俺を見た。

それにつられて後ろに居た先輩方も周囲へ向けていた注意を俺へ移し、『何してんのお前？』という顔をした。

そんな変な事はしていないと思うのだが、どうも予想外の行動をしてしまったらしいので手にもった袋を出して説明した。

「山菜です」

あんちゃんは袋の中を覗き込み、一瞬言葉を詰まらせた。

「……パージェス、芋もあるのだが？」

芋？　と、後ろの先輩も覗き込み芋を視認すると微妙な顔になって俺を見た。

「いつ、掘ったんだ？」

「先輩方が獲物を探してるときに」

どうせ俺は見学ポジなので、実際に狩りを行うのは先輩方だ。

傍で見学しているだけというのも時間の無駄なので、目に入った山菜をぷちぷち取りつつ、個人的に好きな芋も掘っていた。

掘る時はさすがに道具がないのでこっそり電波ちゃんにお願いして土をどけてもらったりしたが、俺が手にした木の棒と芋とを見比べ三年の先輩は押し黙った。

そうだね。木（コレ）の棒で掘ったとしたら、どんだけすごい勢いで掘ったんだろうね。

分かるけど、そんなかわいそうな子を見る目で見ないで欲しい。

お腹空き過ぎて一心不乱に芋掘ってる後輩だと思ったのは分かるから。分かるけど違うから、生暖かいそれを止めて欲しい。

いや腹へってるのは合ってるけど。

「……そうか」

もろもろの言葉を呑みこむようにあんちゃんは言った。

第三十四話　ややこしそうな関係

ようやく戻ってこれた。

毎度毎度この時期に召集を掛けるのを止めて欲しいと思うのだが、これればかりは権威と力を誇示する事でしかバランスを保つ事が出来ない世情を変えない限り無理な話だろう。

新たな学生が入る時期ぐらい腰を落ち着かせようとするのが常識だと言っても、優先順位が上回れば肩書きが何であろうと関係は無いのが実力主義のこの国の特徴。仕方があるまい。

もはや馴染んだ黒檀の机にはサイン待ちの書類が積まれ山を作っている。

一息入れたいところだが、このままにして置くわけにもいかない。

外套を脱いで掛けておき、じっとりとした年月を思わせる重厚な造りの椅子に浅く座り書類に一つずつ目を通し確認を済ませてからサインをする。

殆どはここに来るまでに確認され認可されてきたものなので目を通さなくてもいいが、それでも全てに通さなければならない。それが、私がここに居る意味なのだから。

コンコン

「開いています」

「やっと戻ったか」

挨拶もなく入ってきて勝手に長椅子に座り足を投げ出すのは、癖のある栗色の髪を一つに束ねた女。細身の体からは刃物のような闘気を纏っており、白のローブ(救護)がこれほど似合わない者を私は知らな

い。

ラウネス・ルウェン。

世間では単独で竜を狩る最強の女傭兵と噂される。今は面白そうな仕事が無いと言って勝手に押しかけてきて居座っているので、食い扶持ぐらいは働くようにと簡単な仕事を任せている。

「何かありましたか」

「あったな。実に興味深い事が」

ラウネスが面白い？

それは碌でもないという事では。嫌な予感しかしなかったが先を促す。

「あんたが気にしていた弟君、皇女様がご執心らしくてね、サジェスの三男が喧嘩を吹っかけた」

「喧嘩？　まさか決闘を持ち出したのではありませんね？」

「持ち出したね」

一年の主担当はクレイスターだ。彼は何をしていたのか。いくら認められていると言っても使われたのは四十年以上昔の事。何かあれば良家の子女が集うこの場では煩わしい事にしかならないというのに。

「クレイスターは権威に弱いだろ？　サジェスと聞いただけで許可を出していたよ。

さすがに拙いと思って審判はあたしがやったけどさ」

……はぁ

「だけどそのおかげで面白いものが見れた」

いつの間にか机の前に立っていたラウネスが、見ていた書類を奪い子供のような笑顔を近づけてくる。

「弟君、魔術を使わずに勝ったんだよ」

書類を取り返そうとしていた手が空を切った。

「……魔術とは、魔術ですか？」

「他に何がある？　本人はよく分かっていない様子だったけどね、感覚的に使っているみたいだ」

……魔導を使う者ですか。

ある程度は予想していた。

あの瞳が先祖がえりというだけなら、然程心配は要らない。

しかしパージェスは長老達の警戒対象となっている。今回も監視するように言われラウネスに任せていたが、もし例のものに関わりがあるような事があれば、何においてもこちらの管理下に置かなければならない。

「それはないんじゃないかい？」

「何を根拠に」

相変わらず人の思考を先読みするのが得意らしいラウネスに目を細めれば、書類を返され「話してみればわかる」と言われた。

「そういえば、結局今年も変えられなかったみたいだね」

「野外戦闘実習の事ですか……」

気の重くなる話題に、逸らされたと分かっていても溜息が出るのを止められなかった。

野外戦闘実習は学者肌の魔術師にならない為には必要不可欠なもので、意義も必要性も理解している。しかし、それを行う場所が問題だった。

「いつまであの場所でやらせるんだ？」
「分かっていて聞かないでください。こちらもどうにか変えさせようとしているのです」
「変えられるかねぇ」
「代用の地を考えています」
「だけど蒼の聖地程手頃で安全な場所はないんじゃないかい？　近いし」
「わかっています。しかし、あの場所程危険な場所もありません」

ラウネスは腕を組むと、『そりゃあねぇ』と同意を示すように苦笑した。

「知っていればそうだろうけど、知らなきゃどうにもね。まぁ、ここで飯を食う時ぐらいはあたしも気にかけておくよ」
「……有難うございます。姉様」

言った瞬間、ラウネスから表情が消えた。

「ルーネ学院長。あたしとあんたは他人だよ」
「相変わらず、貴方らしくない事に拘るのですね」

ラウネスは栗色の髪と暗褐色の瞳。それに対して私は一族の色を濃く受け継いだ白髪と銀の瞳。

千彩の民に埋没した今となっては、そのような事に拘る姉も長老達も本末転倒と思えど、それを口に出す事は出来なかった。

抜身の刃を喉元に突き付けられているような錯覚に囚われたまま、冷たい眼差しを見つめ返す。威圧に耐え、見つめ返すだけで精一杯だった。

じっと見つめているとラウネスは鼻に皺を寄せ視線を逸らし、くるりと背を向けるた。

「言われていたもう一人の白髪の坊主。あれは相当な腕を持っている。弟君よりも警戒した方がいい」

「まさかそちらも魔導――」

「いや。あれは魔術だ。魔術だけならあんたに並ぶかもしれない」

「それは……魔術以外も？」

「傭兵の気配に似ているんだよ。身元は分かっているんだろうね？」

「入学の手続きに不備はありません。元魔導師団長のカルマ様が後ろ盾です」

「そいつは強固な後ろ盾だ。探り切れるのかい？」

「何とも。ですが長老が動けば探りきれないものなど無いでしょう」

「頼もしい限りだね」

ラウネスは薄く笑って出て行った。

私は肺の中の息を吐き出し、椅子の背に凭れた。

気分屋の姉（ラウネス）が何を考えているのか、昔からよく分からない。こちらは読まれてばかりだというのに。それでも私が不利になるような事をした事はない。

だから誰よりも信用出来る。そのラウネスが怪しいというのならば、早々にカシル・オージンの調査を進めなければならない。

キルミヤ・パージェスについても王家とサジェス公爵が興味を示していないか確認しておく必要がある。

やらなければならない事がありすぎて頭痛がしてきた。

第三十五話　余裕が無いのは誰もが同じ

自室の椅子に腰かけ、溜息を一つつく。
学院側の配慮という名の隔離で一人部屋となったその部屋で、いつもの癖でくるりと自慢の髪を指に巻きつけた瞬間、

クロワッサン

「どこが！？」

あの気の抜けた声が甦って思わず息巻いてしまった。

一体どこをどうみればそんなものに見えるんだか分からない。
艶があって、綺麗に巻いていて、手櫛でも簡単に整うこの髪のどこがパンに似ているのか、順を追って説明してみろ。
納得いくまで聞いて――

「違う。そんな事を考えてる場合じゃないわ」

そんな無駄な事に思考を割く余裕は無いのに毒されている。
元魔導師団長に匹敵するあの力が欲しい事に変わりないが、あそこまで変な人種は見た事が無い。

だいたいあれで貴族だというのが何かの間違いだとしか思えない。
質問にまともに答えない。ふざけた事ばかり言う。やる。挙句の果てに逃げる。
グランの弟だとはとても信じられない。あれでは周囲から浮くだろうと思えば案の定、サジェスを筆頭とする者達からは毛嫌いされ嘲笑の対象となっている。

キルミヤ・パージェスについて一年に聞いてみれば、それが十二分に伝わってくる。

ただ――レライ・ハンドニクスは別として――ごく一部の者には然程反感が無い。

あれでどうしてと疑問だったが、それも見ていて分からなくもないかもしれないと思えてきた。

基本的に、あれはあのまま。

相手が学生であっても教師であっても貴族であっても平民であっても裏切り者の誹りを受ける者であっても変わらぬあのまま。裏表という言葉の意味すら知らない如くに、私に見せるあのままの態度。

もうそういう奴だという諦めの境地に達するのも理解出来なくもない。

そういえば身体はいいのだろうか？

草の上で平気で転がっていると思っていれば、病弱と言われて驚いた。

見れば確かに顔色が悪く、追い詰めたのかと冷や汗が流れた。倒れる程身体が悪いとはグランから聞いていなかった。

でもあの時以来顔色が悪そうな事もなく、この私の体力を尽かせる程走り回っている。

「だったらあの時はどうして……だから違う。そうじゃなくて」

そっちも気になる事やら調べたい事は山ほどあるが、今はこちらが問題。

指に巻きつけた髪がさらりと解けて、手紙に落ちかかる。

――

カシル・オージン　十四歳
スルで起きた戦乱で孤児となる。三年前に元魔導師団長カルマ・リダリオスに拾われ師事。

――

カシル・オージンを見たとき、キルミヤ・パージェスを見た時以上に驚き、戸惑った。
予想が外れていなければ、試金石が――反応しなかった。

物心つく前から、魔導師として力を持つ者は見れば重いと、そうでないものは軽いという感覚がある。兄弟の誰よりその感覚が鋭いと言われてきたのに、カシル・オージンに対しては何も感じなかった。多少の魔術を扱えるだけの者でも感じるのに、まるでそこに存在していないかのように空虚だった。
そんな相手、今まで一人として居ない。

「機能してないなんて思いたくないけど……」

気になるのはそれだけじゃない。
カシル・オージンの後見人を元魔導師団長のカルマがしているという点。

彼はカルマの親類ではない。カルマはリダリオス伯爵家の前当主。スルとは全く血の繋がりはない。

親が知人だった？

そんなわけがない。その程度であのカルマが後見人になるわけがない。

「誰かの後見人になっていた事自体驚きだけど、その事実が耳に入らなかった事が問題よ」

明らかに作為を感じる。

隠さなければならなかった？

それとも周囲に詮索されるのが煩わしかった？

カルマの後見を得られれば将来が約束されたようなもの。

力が伴っていれば魔導師団長も最短で成れる。今の団長、ケルンがカルマの後押しをどれだけ欲しても得られなかったのに……

不意に目を思い出し、身体が震えた。

あんな奥底まで凍りついた冷たい目、見た事が無かった。自分の何もかもを否定するような目を。

何故そんな目を向けるのか。問いただす事も出来ず怯んで、逃げ出してしまった。

私はこのセントバルナの第三皇女。何よりもこの国の平穏を守らなければならない。個人の感傷など二の次。もし、彼がセントバル

ナに仇名す者ならば捨て置く事は出来ない。カルマが許したのなら有り得ないと姉は笑い飛ばすかもしれないけど、それでも絶対ではない。

今はまだ私の手足となって動いてくれる者はないのだ。学院を出てから増やす予定だったが、それが悔やまれる。もっと早くに力を認めさせていれば良かったけど、今更遅い。

「不穏だというこの時期に……」

毒づいても仕方がない、とにかく出来るだけの事をしなければ。

第三十五話　余裕が無いのは誰もが同じ（後書き）

ご感想にて１ＣＰ頂きました～（クロワッサンポイント）

でもって登録がすごい事になってビビり中～

なのに仕事で帰れず更新ストップ～（泣）

遅くなってすみませんでした。

第三十六話　初めての共同作業は（前書き）

多少血なまぐさいところがあります。
苦手という方はお気を付けください

第三十六話　初めての共同作業は

さくさく続ける軽作業。

山菜を仕分け、二年が持っていた鍋に魔術で水を入れてもらい、切ってそれにつけておく。

それが終わってから上級生が狩ってきた獲物を捌いているはずの坊ちゃんのところへ行ってみると、物凄い真剣な顔をしてママンを見つめている坊ちゃんがいた。

ママンはどこにでもいる小動物で、大きさは小型犬ぐらい。

ふさふさの毛に覆われており、危険を感じると丸まってボールのようになる。大きな目はひじょーに愛らしく、短いピンと立った耳と相まって特に女の子には人気。

と同時に、女の子にとってはトラウマ第一号。

何せここは食肉加工の産業は発達していない。

食肉を生の状態で保たせる方法が乏しく、燻製や乾燥させるしかなく、生肉の入手手段は現物を捌く事になる。

大きな街ならそれでも肉屋で捌かれたものを購入する手段もあるだろうが、それをするのは一握りで、俺が知る町や村では普通に主婦が捌いている。

そう。主婦が。

つまり、元女の子が。

女の子なら誰もが克服しなければならない関門であり、それが女へと至る第一の壁となる。らしい。

あくまで俺は地獄耳で聞きかじっただけなので、実際に女の子が

苦悩する姿を見たことはないが、真顔の坊ちゃんを見てこんな感じじゃないだろうかと思ってしまった。

どうしよう。声かけるべきなのか？

いやでもなぁ……さっき『お前に捌けるはずがないだろう』みたいな顔されたからなぁ……

現在ママンは絶命しており、丸まる事もなく短い手足をぶらんとさせている。

坊ちゃんは微妙な距離感を保つように腕を伸ばしたままそれを掴んでいるのだが、そこから一向に距離が近づかない。

周りを見てみれば、そこここで同じ状態の一年生が見て取れた。

あ、違った。

なんでもありの少年はその称号にふさわしく、既に捌き終わりトップを独走中の模様。この分でいけばあの班が最速で食事にありつけるだろう。

……いーなー……

「さっさとするんだ」

一年の監督役に残っていた二年の先輩に急かされ始めるが、坊ちゃんは上級生を睨むと、再びママンを一方的に見つめだす。

周りは焦れた二年にどやされ気味に作業を始め出してきているが、坊ちゃんは頼もしい限りのマイペース。

いらん。そんなマイペースいらん。捨てろ。捨て去れ。彼方へ葬り去れ。

祈りを込めて念じるが通じる気配は皆無。

くそー……腹減ってきた。

目の前に食材があるのに作れないとは何の拷問だこれは。

と思っていたら坊ちゃんに動きがあった。

伸ばしていた腕を曲げ、もう片方の手にあったナイフをママンに当ててて――――――離すなよ！

喉元まで出かかった突っ込みを呑みこんで視線を逸らす。

ぁー……だめだ。見てたら突っ込む。無茶とはわかってても容赦なく突っ込む自信がある。

でも腹へった。むちゃくちゃ腹へった。今なら棒切れで芋掘れる。芋ほり最短記録だしたろか。もう勝手に掘って食ったろ……いかんいかん。

落ち着け俺。どーどー俺。ただ今団体行動。単独プレイは叱責対象。

だから落ち着け。頑張れ俺。まだ頑張れる。大丈夫だ。うん。

「パージェス」

「まだまだいけます」

「……どこに行く気だ」

二年の先輩にちょっとどころではなく、かなり怪訝な顔をされてしまった。

「えぇと……」

ちょっとそこまで？　と、可愛らしく首を傾げてみたかったが、お互いに腹が減っている殺伐とした空気の中でかませる勇気はなかった。

何て答えようと首をひねっていると、二年の先輩はため息をついて顎をしゃくった。

「パージェス、お前がやれ」

坊ちゃんから獲物を取り上げて俺に寄越さないあたり、微妙な遠慮があるのだろう。

権力が絡むと変な人間関係になりそうだなと思いつつ、上級生のお許しを頂いたので俺はさっそく坊ちゃんに手を出した。

「貴様に出来るものか」

低い声で威嚇されたが、いいかげん俺もこの状況は打破したい。

俺と坊ちゃんだけならお互い不干渉で勝手にすることも出来るが、他にも班員がいる。彼らの補給を妨げ続けるのは役立たず以上のお荷物にしかならない。

坊ちゃんが壁を超えるのはまたの機会という事で、勘弁してもらおう。

「出来るか出来ないかじゃなくて、やるかやらないかだ」

言って獲物を取り、毛を寝かして素早くナイフを入れる。

「目を逸らすな」

目を逸らした坊ちゃんを二年が咎めた。

その言葉に坊ちゃんは眉根を寄せて、不快も露わにして俺を睨んだ。

まぁ、その行動は分からないでもない。

俺もここでは捌くような環境には無かったが、幸い前は若干そういう環境に在った。

大物は捌いた事は無いが、鶏をはじめとした小動物なら経験はある。

学校から帰ってみたら、畑に鶏のく……まぁ、子供心に衝撃を受けつつ、夕食の鶏肉をうまうま食べて。中学に入ったら親父が妙にそういう事をさせたがって叱られながら捌いた。

初めて親父が捌いているところを見たときは、手元を直視できなかった。どこへ向けていいのか分からない視線を親父へと向けて、それで見ているふりをした。

何と言っていいのか分からないが、ただ怖かったのは覚えている。自分で捌く時も怖かった。

そんな小心者の俺が坊ちゃんの反応を笑えるわけがない。

今は出来るけど、でもそんなものだ。

さくさくと捌き切り、あく抜きをしていた山菜を水から引き揚げ、鍋を洗ってからもう一度水をはってもらい、坊ちゃんが付けた火に

かける。
それに携帯食の乾燥させた穀物を入れて沸騰するのを待つ。
沸騰してきたら肉を切って入れ、火が通ってきたら芋を投入。最後に山菜を入れて軽く煮立つのを待ち、持ってきた調味料で味をつけて山菜雑炊もどき完成。

できたよ～と、上級生に声をかけてやっとこさ鍋を囲んだ時はもう昼を幾分か過ぎた頃。
やっとかよ。という先輩方の視線が周りに比べて具材に彩りがある鍋を見て、何故か俺へとスライド移行してきた。

いや。あく抜きの時間はあったからえぐみは無いよ？

……あれ？　そう考えるとこれってある意味坊ちゃんとの共同成果？

第三十七話　見られていた

先輩たちは緑鮮やかな雑炊に躊躇いがちに口をつけていたが、途中からがっつくがっつく。一年が食事を作るまで上級生はずっとゲリラ戦もどきを強いられ、出来た班から終了していたらしく、なんかもぅ申し訳ない程がっつかれてしまって俺はひたすら給仕に徹した。

差し出された椀にすくっては入れすくっては入れ、何気に差し出された坊ちゃんの椀にも入れ――――ぇえ!?

思わず二度見しそうになり、慌てて何でもないふりして返したが、危なかった。

なにしてくれるんだ？　こいつは。

めちゃくちゃ吹き出しそうになったじゃないか。

あ～もーこいつ、いい根性してるよ。俺よりよっぽど太いよ。

将来大物になるんじゃね？　だって他の班ではグロッキー状態で食えない奴がちらほらいるんだよ？

かくいう俺も初回はのーさんきゅー状態でへたばった。

笑いを噛み殺しながら必死で給仕に徹して、片づけをする頃には疲れ果ててしまった。

ただ幸いにも、食事の後は二年から上の集団戦闘訓練が始められ、一年は総じて見学態勢に入ったので疲れ果てたところで支障は無かったが。

一年が陣取たのは、指揮官がいる四年の天幕近く。

本来は天幕内で指示するのかなと思うが、見せるという目的の為

か外で指揮を執っている。
精悍な顔つきをした赤髪の兄ちゃんは魔術師というより格闘家という感じで、今をときめく細マッチョ。指揮してるよりも前に居る方が似合いそうな風情なのに、淡々と傍の参謀役と言葉を交わす姿はかなりの違和感だ。

そしてもう一つ。通信機器もないのに会話が成立しているのも違和感。
不思議でもなんでもないのは分かるが、視界からの認識情報は影響が強い。
無線もなしに伝達が成立するとか、そりゃ重宝されると納得してしまう。通信可能圏域がどの程度あるのか知らないが、傍受されない伝達手段であれば、命令する側としてはかなり有り難いだろう。

ここに居るのは一年と指揮を取る四年の二人と教師が一人。
森には複数の教師が入り、それを相手取っているというのを、その教師が図説しながら一年に状況解説している。
当然四年に教師の解説は聞こえないようにされているが、四年の指示はこちらに分かるようにされ、それを見て学び取れるものを学び取れという状況が出来上がっている。

それは興味ないのでいいとして、さっきから気になるのが図説に表示されている敵を示す赤と学生を示す青の点。点が動いているので、動きをトレースして表示していると思われるが、どうにもその見た目で戦闘シュミレーションのゲームのような錯覚に陥りそうになる。

戦術系（タクティクス）のゲームをやったのは、もう随分と昔の話になるが俺はこの手のものとはどうも相性が悪い。兵站やら補給線やら武器に物資に、金に情報、駆け引き策略騙し合い。何でゲームでそこまで考え

こまにゃならないのか……

男なら真向勝負だろ！

というのは、単なる負け惜しみ。攻略サイト見て、ようよう出来る脳みそしか持っていない俺にははなから向かないというだけという悲しい現実しかないのが事実。

作った人間の脳みそも理解出来ないが、攻略サイトに情報載せれる人間の脳みそもどうなっているんだろうか？　と友人に言ったら、お前の脳みそがどうなっているんだと問い返されたのはいい思い出だ。

友人曰く、あんなものはパターンで何度かやれば子供でも出来るとの事。

……俺、何回やっても出来なかったんだけど。

苦い思い出に浸っていると、敵役の教師を示す赤と学生を示す青の点がせわしなく動き始めた。

そういやどうやって青と赤の点を表示しているんだろう？

図説に使っている紙はごく普通のものに見える。とすると、魔術で位置を特定して表示いると想像するのが普通だが、そんな魔術があったらこの戦闘訓練そのものが意味をなさなくなる気がする。

一定の条件でこういう事も出来るという事か？　……あ、発信機みたいなものか。

んー……でもそうするとその発信機の信号を敵側がキャッチしたら作戦も何も無くなるのか？　妨害電波？　……って考えても分かる事じゃないな。

徐々に赤を青が囲み始める。
学生も敵役の教師も、さすがに居場所は分からない状況でやっていると思われるが、偶に見えているとしか思えないような動きをする時があるので怖い。戦闘の音も聞こえはじめきて一年は緊張した顔になり俺は――

――寝落ちしてた。

目が冴えてしまった。

夕方までばっちり寝てたから当然といば当然だが、見張りに立たない時は本当に何もすることが無い。長い夜が暇なのもさる事ながら、ここで寝ておかないと明日がしんどくなる。

何とか眠ろうと寝返りをうち、

あ……まず……

俺はそっとテントから抜け出して、見張りの目を盗んでいそいで森に入った。

月明かりは木々に遮られ、昼間とはうって変わりのっぺりとした闇に塗りつぶされたその姿に、ようやく気を抜き近くの木に手をついて――

「お前抜け出して何してんねん」

！？

背後からの声に驚いて見れば、僅かな月光の下に青年の姿があった。

「昼間も寝とって叱られて、見つかったらまた――」

いつもの説教が始まると思いきや、青年はやおら俺の肩を掴んだかと思うと無理やり座らせた。

あ、ちょ……今は……

抵抗する事も出来ず、俺はえずいた。

何度も何度も、止める事が出来ずにえずいた。

血の気が失せた身体に、背中をさする青年の手だけが暖かい。

「……何て顔してる。辛かったならはよ言え。昼間も夜も、飯食べれへんほど辛かったなら休むぐらいさせて貰えるやろ。無駄に平気なふりするな」

「なんで……」

「お前のとこは具が他と違ってたから目立ってたんや。お前ずっと入れるだけしとって、ほとんど食ってなかったやろ。言わんからそこまで辛いと思わんかっただろうが、この阿呆が」

ため息交じりに呟かれたが、俺に返す余裕はなかった。

第三十八話　真っ白

まぁだ、だめなんだねぇ……

この世のすべてを拒絶するかのような己の身体の反応に苦笑したいが、苦笑する事すら許してくれない。

帰ってこーい、俺の身体の主導権ー

空っぽの胃の中から何かを吐き出してしまおうともがく身体の主導権は、俺から離れるばかり。

手繰り寄せようにも昼間に張っていた煙幕（無駄な考え事）まがいの回想が出来ない。

うー…ん。ちょと想定外……

ぼやけた視界

失われる熱

青を染める赤

遠のく囁き

ただ一つ、鉄さびの匂いが、その記憶を呼び覚まし、思考と身体を縛る。

俺の精神、予想以上に細いな！

いやぁわかってたんだけどねぇ。

おやっさんにもそう簡単にはいかないだろうって言われちゃってるし。

「おい……お前、ほんまに大丈夫なんか？」

いや無理。意識と感覚があの時点に固定されかかっている。こうなったら丸一日再起不能で脱却するのに一週間はかかる。野戦が終わるまでは保つと思ったが、一度こうなってしまうと……あぁくそ。気を抜いたのはまずった。ほんとに想定外だよ。ここまでなると思わなかったよ。

「捌いたのが原因とちゃうんか？」

青年の声も遠くて聞こえずらい。耳鳴り酷いし、電波ちゃんが騒いでるのか雑音煩い。

胃は痙攣しっぱなしで身体の感覚ははるか彼方。もの考えるのも、内容が全部あの時に繋がりそうになってドツボにはまりそうだ。

いっそ全部手放して果ててしまいたいが、このままえずいていたら人のいい青年が困り果てるだろう。

こうなったら青年に手伝ってもらうか？

「おい、聴こえとるか？　お前ほんまに酷いぞ？」
「んだ……と？　ひとの顔を……」
「誰が造作の事言うてん。土気色の顔してても巫山戯る余裕はあるんか」

いや、ないです。ごめんなさい。試してみただけです。手を止められると辛かったりするのが本音です。
だから止めないで、お願いほんと。

生理的な涙浮かべて小さく首を振れば、呆れた顔された。でも背中さすりを再開してくれたので文句なし。その勢いで、も一つ頼んでみよう。

「……なぁ」
「なんや？」
「なんか……話……を」

なんでもいいから話をしてほしい。

「は？」
「なん…でもいい……から」
「なんでもって……」
「……たのむ」
「……」

そんなイキナリ話せって言われても、何で、何を話しゃいいんだと言い返したいのは分かる。でも本当に何でもいいから話してくれたらそれでいい。

少しでも逸らす事が出来ればたぶん、持ち直せる。

「そんな……いきなり言われてもな」

「……」

「……話なぁ……お前、俺の名前憶えてるか？」

「……」

この沈黙はあれだ、憶えてないわけじゃなくて、しゃべる余裕がないからだ。

「憶えて無いやろ」

いや、ほらよく見て？　しゃべれそうにないでしょ？　憶えてない訳じゃないよ？　ここまで絡まれて青年の名前を憶えてない訳ないから。

「レライ・ハンドニクス」

あ～しゃべれてたら先に言ったのに～

「お前はやっぱり反応せぇへんのやな……聞いてないだけかとも思てたがそうでもないし。知らんだけか？」

青年は俺の反応を確かめるようにこちらを見るが、俺はほとんど頭真っ白な状態なので何が言いたいのか分からず、視線を返すしか出来なかった。

「ハンドニクスと聞けば、貴族なら大抵避ける。口を利こうとせん。同期の奴らだけじゃなくて、先輩らもそうやったやろ？」

自嘲気味に笑って青年は俺から視線を外した。

「ハンドニクスは裏切り者の代名詞や」

裏切り者？

「それなのにお前は声かけても平気で返してくるわ、口喧嘩はするわ……なんやいつの間にか俺もお前の同類にされて……」

よくわからんが、そこで残念そうな複雑そうな顔されたら腹が立つんだが。

第三十九話　真面目には真面目を

「ハンドニクスは、四代前までは侯爵家やった。北の国境を守る要。セントバルナ開国以来の鉄壁侯。何度も侵略から国を守った英雄の一族」

決まり文句をなぞる様に口にする青年。

公の場に出る機会の無い俺には馴染みが無くて今一ピンとこないが、侯爵と言ったらかなりのお偉いさん。ざっぱな記憶にあるイメージでは伯爵が地方領主で、侯爵は辺境領主。侯爵は国境警備の意味があり一般的な領主よりも広大な土地を与えられ、一定の独自権限が与えられていた――と思う。

「俺の一族はそれを誇りとしてこの国を守り抜いてきた。四代前、俺の高祖父は歴代当主の中でも義を重んじる高潔な人物やったと言われとる。戦事も頭が切れて負けなし、おまけに剣の腕はめっぽう強かったらしい。国王陛下の覚えもめでたく、ゆくゆくは国防の全てを任されるはずやった。

けど、その四代前はいきなり国を裏切りよった。

戦時の最中、北方のグレリウスに内部情報を漏らし領土を奪われる原因を作り、さらにグレリウス側につき当時の魔導師団長を殺して逃げた。

俺の一族はその咎を受け爵位を剥奪され、今でも裏切り者の烙印を押されとる。

……一族全員死刑にされなかっただけでも相当な奇跡やと思うけどな」

英雄だ誇りだ言う割に青年の様子は冷めていた。

「もともとセントバルナは領土が他の国と比べて小さい。それをさらに小さくするような事をした俺の高祖父は裏切り者以上に憎むべき相手なんや。そんな事したハンドニクスの人間も忌むべき相手。せやから、俺を相手にしたいと思わんのが普通や――その顔は、知らんかったって顔やな」

確かに、俺は貴族の事情というものには興味が無い。

俺の小さな頭では自分のとこの家族の事を考えるだけで、他まで回す余裕は無かった。

「今では食っていくのも大変っちゅう落ちぶれ具合や。今さら俺が足掻いたところでどうなるもんでもないんやけどな、それでも夢見な生きてかれん者もおる。せいぜい小銭稼げるようにぐらいはならなあかんのやけど……どうや、俺と口利くのが嫌になったか？」

顔をこちらに向けず尋ねる青年。

その横顔は無表情で、若者が――というより、青年が見せるものとしては冷たすぎた。

俺はまだ多少痙攣している胃のあたりを掴み、力を込めた。

「なぜだ？」

「なぜって……俺なんかと一緒におったら何を言われるか分からんのやで？」

「それは俺にしてみても同じだろう」

「いや……お前と俺とじゃ言われとる内容がちゃうやろ」

「批判対象という事に変わりはない。今更内容が増えようが減ろうがどうでもいい。そもそもそんな事を気にした事は無い」

「……お前、強いな」

そうじゃないと俺は首を横に振る。
俺の場合はそちらに意識を向ける余裕が無いだけで、その事自体をちゃんと受けとめて考えていないだけだ。それに俺には前世（過去）の記憶がある。しんどかった事や、嫌になった事、辛かった事を覚えているから、それを軸に立ち回る事も出来る。
でも青年の場合はそうじゃない。正真正銘まっさらで、受ける全てが刻まれる。

例え身体の年齢が近いとしても、そう見られるとしても、これはない。
自分がしんどいからと言って、こんな話をさせて、こんな顔させて……

「すまない」

頭を下げた俺の背から戸惑うように手が離される。
俺は仄かな月光に浮かんだ、少しだけ揺れる瑠璃色の瞳を正面から見据えた。

真面目に俺の事を心配して、嫌な過去だろう事まで話した青年に、だから俺も真面目に返す。

「俺は強くない。だから青年を名前で呼ぶ事も出来ない」
「……え？」

青年だけじゃない。少年も、坊ちゃんも、皇女も、同期も先輩も、みんな、呼べない。

「青年は強いよ。俺なんか比べ物にならないぐらい」

その若さで苦境に立たされながらも家族を支えようとしている。
俺は……目を逸らして逃げているだけだ。どうしていいのかも分からず、留まるべきではないと思いながら、一人生きていくことを恐れて立ち止まっている。
比べるのもおこがましい。

ぐっと足に力を入れ、主導権を取り戻す。
何も出来なかったあの時から、自由に動かせるこの身体へと感覚を取り戻す。

ふらつきながら立ち上がった俺を、青年はすかさず支えた。

ほんと……この青年は……

「青年は認められるだろうな」
「は？」

訳が分からないという顔。その素直な反応を、なんだかずっと見ていたいと思ってしまう。

「なぁ、ここを出たらどこへ行くんだ？」
「そりゃ魔導師団員になれればとは思てるけど……そないに簡単には」
「ならグランに宜しく」
「は？」
「あいつは面白いよ？」
「面白いとかそういう事やなくて、なれるかわからん言うてんねん」
「なれるなれる」

ぱしぱし青年の肩を叩くと、軽く頭を叩かれた。

「どっからそないに気楽な発想が出てくるんやお前は。さっきまでこの世の終わりみたいな顔してたくせに……もうええんか？」

「へいきへいき。青年のぶっちゃけ話でどっか吹っ飛んだわ」

「ぶっちゃけ話て……そこまで軽く言われたら俺の立場無いわ」

「そりゃすまん」

「すまんて思てないやろ」

「あはは」

「笑うとこか。こっちは真面目に話したのに」

「うん。助かった。ありがとう」

「いや……別に礼なんか……」

やっぱり青年は視線を泳がせて何と返答していいのか分からない様子。微笑ましい。

あー　にやにやが……にやにやが隠しきれない……

「気色悪い」

やっぱり標準語。今度はしっかり殴られた。

第四十話　監視者

「覗きとは、あんまり趣味がよくないね」

生まれた殺気に、僕はゆっくりと振り向いた。

互いに視認するのも難しい距離。けれど闇に慣れきった眼は、はっきりと療養室の女性を映した。

それはあちらも同じで、宿営地に戻って行った二人の方向を見てから、僕へと視線を移し微笑んでいる。

「そんなにあの弟君が気になるのかい？　『白の宝玉』」

彼女にその名を呼ばれるのは皮肉としか思えず、唇が歪む。

「まさかあの『白の宝玉』がこんな子供だったとはね。驚きだ」

「流石は竜殺し。それとも『白の民』とお呼びした方が良いでしょうか。

調べたのは長老達ですか？」

「……お前、私達の事を」

「あなた方と争うつもりはありません」

「よく言う。方々の国を荒らしておいて」

流れた噂を寄せ集めればそうなるだろう。反論する材料は僕の手の中には無い。それに結果から見ればその噂も間違いではないから、反論する気も無い。

「カルマをどうやって脅したんだい？」

「何も。彼には何も話していません」

「それを信用するとでも？」

「お好きなように」

ふぅんと言って腰に履いた剣を抜き放つ噂に名高い最強の女傭兵、竜殺し。

放たれる殺気も重く鋭く、慣れた僕でも肌を刺す感覚に緊張する。

「あの弟君は、お仲間かい？」

「いいえ。ここで初めて会いました。

僕よりもあなた方の方が気にされているようですが？　こんな所まで監視をして」

「生憎、今の監視対象は弟君じゃない」

竜殺しは口の端を吊り上げ、僕の首に剣をあてた。

「目的は？」

「あなたにお話しするつもりはありません」

「この状況でそれが通ると思っているのかい？」

「どうでしょうか……世の中、知らない方がいいという事もあると僕は思いますが」

「なるほどね。そういう事もあるかもしれない。だが、この件についてそれは無いね」

僕は剣に視線を落とし、その上にトンと手を乗せた。

「動くな！」

ピリッと首に痛みが走る。

迷いの無い殺す者の覚悟を持った目は強く、揺るぎもしない剣に苦笑が零れる。

これだけ強い者もいるというのに、どうして自分がこの役目を担っているのか不思議でならない。

「過敏になっているのは、ここが蒼の聖地で炎獄が封印されているからですか？」

「っ……やはり知っていたか！」

剣に込められた力を、今度は押さえる。

でなければ首を飛ばされる。

「誤解しないでください。今は炎獄に手を出すつもりはありません」

「『今は』だと？」

さすがに片手では抑えきれず、両手で剣を抑えながらギラギラとした目を向ける竜殺しに首を傾げた。

「あなたもご存知でしょう？　侵入者の件」

「キルミヤ・パージェスとレライ・ハンドニクスが遭遇したという者の事か」

そう。それ以外にも居たけれど。

「あれはお前を狙っていた。相当しつこくな。他にも何度動かされたか」

襲撃が少なかったのは、やはり竜殺しが対処してくれていたからか。

申し訳なかったなと思うが、ここで頭を下げても彼女には受け入れられないだろうし説明しろの一点張りだろう。

話を続けた方が無難だ。

「僕を狙ってはいますが、彼らの狙いは僕だけではありません」

というより、狙いは僕であって僕ではない。

「――まさか……炎獄を……そんな筈はない！　あれはずっと守り続けてきているものだ！」

声を荒げた竜殺しを見て、白の民のあれへの危険性認知は健在だと、少し安堵する。

「そうですね。まだ見つかってはいない。けれど、永遠に見つからないとは限らない」

「何が言いたい……」

「侵入者の素性は割れましたか？」

「……」

「大変でしょうね。一つというわけではないでしょうから」

「他人事のように……」

「すみません。今回に関しては僕の責任が大きいですから、万一の時は責任を持って炎獄を頂きます」

「お前……あれが何か分かっているのだろうな？」

その問いかけに、思わず僕は微笑んでしまった。

「今となっては、誰よりも」

知る者（望んだ者）は、殺してきたのだから。

「お前……何者だ」

「ご存知の通り、白の宝玉です」

「それは通り名に過ぎない！」
「そう言われても僕の名前を憶えている者などいませんから、僕も忘れてしまいました」
「目的は！　何を理由に争いを引き起こしている！」
「何度も言いますが、あなたに話すつもりはありません。いずれ、あなたの妹さんから長老達に伝わると思いますので、その時に聞いてください。
長老達が話してもかまわないと判断すれば、教えてくれるでしょう」
「貴様……！」

何が彼女を刺激したのか、込められた力が跳ね上がった。

っ！

寸前で上体を逸らし避けたが、後ろにあった木は半分近く幹を切られていた。

さすがに……竜殺しは強いですね……

けれど僕も死ぬわけにはいかない。
二度目の斬撃が飛んでくる前にその場を退き、三度目の前に口を開く。

「考えませんでしたか？　僕が炎獄の事を知っているなら、その封印の場所も知っていると」
「っ……！」
「腕の一本や二本とられる事を覚悟すれば、あなた相手でもたどり着きます。封印が何に弱いか、炎獄が何に反応するのか、その様子では知らないという事はないですよね」

ぎりぎりと奥歯を噛みしめる音。
剣を握る手も白く、どれ程の力が入っているのか想像したくもない。

「あなたからしてみれば僕は捨ててはおけない存在だと思います。けれど、僕は本当に争うつもりはありません。もしそうなら、このような話もしていません。
今回はご迷惑をおかけしたと思っています。妹さんも戻られたので事情を話したらすぐにここを離れます。それで剣を納めてもらえませんか」
「あれは、妹ではない！」
「……分かりました。学院長に僕の目的を話したらすぐにここを離れます。それでいいですか」
「……」

ぎらぎらとした目は変わらないまま、竜殺しは静かに剣を鞘に納めた。
何が逆鱗に触れたのか分からなかったが、改めて容姿を見れば少しだけ理解出来た。

学院長を務める彼女の妹は白の民そのものの色を持っている。それに対して竜殺しは見事にその色を継いでいない。
まさかこの時代になってもなお、そんな事に重きを置いているとは思わなかったから、意外だった。

「一つ、いいですか？」

射殺しそうな——否、射殺す気の眼が僕を刺す。

「キルミヤ・パージェスを監視しているのは何故ですか？」
「貴様に話す事など無い」

ご存知ないですか……白の民の役目と思われているといったところでしょうが……

「彼は、何も知りませんよ。白の民が危惧するような事は何も」
「話す事など無いと言っている」
「……そうですね。余計な口を挟みました。では、失礼します」

頭を下げ、背を向ける。
背を向けた瞬間殺気が膨らんだが、物理的に何かが来る事は無かった。

第四十話　監視者（後書き）

シリアスが続く……
次は、次こそは……

第四十一話　新境地？

早朝のひんやりした空気を吸って伸びを一つ。
ひと眠りして、状態は完全に元に戻った。
ここまで持ち直せたのは間違いなく青年のおかげだろう。ついでに、腹も括らせてくれた。

あんな若者が必死に足踏ん張って生きてるっていうのに、おっさんがじたばたしてたら情けない。
正直どうなるか分かったもんじゃないが、それはそれ。まーなるようにしかならない。
考えてもしゃーない事を考えないのは得意だ。

朝餉の用意をしていると、ごそごそと坊ちゃんが起きてきた。柔らかそうな金髪に寝癖がついてるのが可愛くて頬がひくつが我慢。
坊ちゃんは物凄く不機嫌そうな顔をこちらに寄越して、すぐに逸らして木々の合間に消えた。

ほげーっと様子を見ていた俺は、ふと閃いた。

あの坊ちゃん、もしかしなくとも末っ子じゃないだろうか？
そうならあの態度は……寝癖のごとく、かわいい。

上の兄弟たちへの対抗心はあれども、力に差があれば乗り越えるのは難しい。だが、自分を認めさせたい。自分の力を認めて見て欲しい。そんな欲求をどう表現していいのか分からず、他者を威嚇し従える事でしか接触が出来ない。なんといじらしい。

……別に俺はロリコンでもそっちの趣味があるわけでもない。
本当に。

歳の近い男兄弟だと壮絶な権力争い意地の張り合いになってしまうが、ある程度離れると『仕方ないな～こいつは～』って感じになってくる。俺の場合精神年齢（なかみ）はおっさんにまで達しているので弟というよりは子供……子供？

え？　あれ？　……精神年齢でいけば坊ちゃんが子供って……俺いまいくつだ？

変な焦りで無意味に鍋をかき回してみる俺。だが、雑穀がかき回されて沸騰の対流と合い合わさり複雑な動きをし始め、芸術的なまでに俺の動揺っぷりを現していた。

二十七で途絶えて、こっちで十七、通算四十……四……

……

把握はしていたつもりだが、何となしにしか考えて無かったので改めて自覚すると物凄い衝撃だった。

うぁー……四十四て……四十四て……嫁なし子なし職なし四十四て……

いやいや、分かってる分かってるよ。十七なんだから、末席貴族の十七なんだから職ないのも嫁なし子なしなのも分かるよ。

でもね、四十四だよ？　たぶん俺の兄弟みんな結婚してんじゃね？　可愛い嫁さんもらって子供に囲まれてんじゃね？

あのままあっちで生きてたとしても俺が可愛い嫁さんもらえたとは言い切れないけどさ！　でもなんか想像すると、あの奥手の兄貴が嫁さん貰ってるとか！　あぁー……駄目だぁ……めでたいと

思う反面、負けた気分に……くっそ見とれよ！　外人顔負けのグラマーねーちゃん捕まえてやる！

……いや、冗談だけど。そんなねーちゃん目の前にしたら緊張して何も話せんと思うけど。

所詮俺はどこへ生まれようとも変わらぬチキンくおりてぃ。嫁さん出来る自信なんて皆無だ――

――って考える自分が悲しいな～

……。

「……なんか……たき火ってあったかいな……」

朝っぱらから自爆してしょんぼりしながらたき火に手を翳していると、坊ちゃんが戻ってきた。

坊ちゃんは何も言わず鍋を見つめだした。

無言で鍋を見つめる一年二人。

……まぁ、少年や青年の無言の威圧に比べれば平気なんだけどさ。

ちらっと周囲へ視線を向ければ、早朝という時間帯で頭がぼんやりしているのか、他の班もさほど会話は見られない。

だが、さほどであって皆無ではない。ぼそぼそと何がしかの会話をしており、お互いに叱られ具合を慰め合ったりしている気配がある。

視線を戻し見れば、依然鍋を注視している坊ちゃん。

見ようによっては『腹減った～　メシまだ～？』に見えないことも無い。

あ、もしや昨日の味付けが気に入らなかったとか？

持ってきた調味料は限られているので、いつも学食で食べているような至極の味は出せないが、それなりに食べれるものではあったと思う。現におかわりもしてくれていたので、アウトでは無かった筈だ。

……ひょっとして『俺の方がうまく出来るぜ！』的な？

「貸せ」

不意に坊ちゃんが口を開いたかと思うと、俺が持っていた杓子を奪ってかき混ぜ始めた。

え……マジで『俺の方がうまく出来るぜ！』なの？　……ちょっと俺、自信無くすんですけど。

何気に自炊して自画自賛してた自分が痛くなってくるんですけど……既に傷（自爆したての）を負ってる俺にはこれ以上の追撃は辛いんですけど……

「何故、力を隠す」

「いや全力だよ。この味が俺の全力だよ……」

四十四の限界だよ。それで駄目ならお手上げだ。好きにしてくれ。

「……違う。これは……味は……うまいと思う」

……へ？

驚いて顔を挙げると、ものすっごい複雑そうな顔があった。

一瞬俺の脳みそはフリーズしかけ、すぐに冷凍解凍。瞬時に導き出していた推測を再び思考に引き戻す。

……え、と？　今の、デレ？　デレっすか？

っ！　デレ入りましたーーーーー！

なにこれ！？　すげえ！　おくさん、生デレだよ！？　しかも予想外の俺様坊ちゃんの生デレ！　やべえはまる！　いやはまらん！　はまるってやばいだろ俺！　何考えてんだ！　うわ混乱してる！　そして褒められて微妙にこそばい！

何言ったらいいの俺？　何したらいいの俺？　さっぱり分からないんですけど！！

昨日はどん底まで落とされて復活した途端に豪華イベントって、何ナノこの状況！　いや豪華って何で俺、コレを豪華だと捉えてるわけ！？　俺そっちなの！？

若干どころでなく盛大に慌てふためき興奮しつつ、長年培ってきたポーカーフェイスで「そりゃありがとう」と何とか、返す。

「別に……褒めたわけじゃない」

褒めてるよぉ!?　十分褒め言葉だったよ!?　これ、女だったら伸される男が多いんじゃね!?

やばい。俺の精神が別な意味で削られている。

落ち着け、落ち着くんだ俺。俺に変な趣味はない。何、たかがデレだ。男のデレだ。

第四十二話　疾走

高鳴る鼓動、火照る身体。潤んだ瞳に見つめられ――

って、ちがう！！

ガンと自分の額を拳で殴り、やっとこさ自分を取り戻す。

ったく相手をよく見ろ、丸腰だ。

それも違う！　しかも何のネタかすら分からん！

もうどんだけ動揺してんだよ俺は。

だいたい坊ちゃんの容姿が悪いのだ。ごつい系ではない綺麗な顔をしているから紛らわしいのだ。こいつ絶対女装が似合う。

一先ずの冷静さを取り戻そうと思考を斜め方向へと傾け、もう一度坊ちゃんを見る。

坊ちゃんは潤んだ目でこちらを見――睨んでいた。

そっち方面の潤んだ目ではなく、ごちゃごちゃした思いが混ざりに混ざって表現を失った成れの果てのようだ。

これ、ひょっとしなくても俺の所為だよな。

成績優秀者の坊ちゃんが落ちこぼれの俺に負けたとあっては体裁もあったもんじゃない。

そんな事は分かっていたが、もしや家から何か言われたとか？又は周囲からある事無い事言われている？

つってもなぁー　俺が何か言ったところで慰めになるどころか逆撫でするだけだしなぁー

どーすかなぁと頭を掻いていると、坊ちゃんが口を開いた。

「貴様は何故力を隠す。自分の方が優れているのだと誇っているつもりか？」

マイナス思考一直線を突き進むセリフに、頭が痛くなった。

まったく、さっきまでのデレはどこいった。あの流れなら別の方向へ逸らせたかもしれないのに。

「そりゃないよ。優れているとかどうとか俺には判断つかない」

「なら力を隠すのは何故だ」

どーしてどいつもこいつも聞きたがるんだ。人には言いたくない事の一つや二つや三つや四つあったって不思議ではないだろう。

かといって、その事を坊ちゃんに悟っていただくには時間が無さすぎる訳で、俺が無言を貫き通せば坊ちゃんはエスカレートするだろう。

「……死にたくないからだ」

「なに？」

問い返されても二度は答えたくない。
幸いにも上級生が早朝の視察訓練から戻ってきて朝食の運びとなり、この話はうやむやとなった。
坊ちゃんにしてみれば、うやむやにされて余計に鬱憤溜まっているだろうが、それもこの訓練が終わるまでだ。

苛烈な視線を見ないふりして給仕をしつつ、今度はしっかり食べた。
すきっ腹にはきついかと思ったけど存外平気だった。

さすが俺の腹。伊達に今まで食いまくってきただけのことはある。

班員全員の食事が終わり、さっさか後片付けした後はいよいよ一年を含めた班単位の実戦訓練だ。そして、これが終われば帰るだけ。
一年にとってはこの野戦の中でも最も緊張するイベントだが、俺はやっと解放されるという安堵に包まれていた。

上級生に装備を点検してもらい――武器なし、あるのは応急セットのみ――、全員が一か所に集まって点呼を受ける。そして一人一人に親指の先程の石が配られた。
なんだろうと観察すると、石から線のようなものが伸びている感じがして、辿っていけば指揮官の赤髪の兄ちゃんの前に置かれた紙に繋がっていた。

識別信号もどき？

教師と生徒を赤と青で示していたアレの元なのかもしれない。
これから森全体に散開する生徒の位置を正確に把握するために渡されたのだろうか。班に一つではなく、一人一人に渡されたのは安

全面で何か起きた時用で。

この森に限ってそれはないだろうけどと思いながら、石ころを胸のポケットに入れる。

石を渡された班から指示された場所へと森へと入っていく。

俺の班に指示されたのは宿営地からさらに南へ下ったところで、最南端となっていた。他と比べても宿営地から一番離れている。

これは優秀な班だったんだな……坊ちゃんが入っている時点で予想はしてたけど……

距離にゲンナリしながら指示を受けて森へと入った。

山菜だ。

あ、あの辺の下に芋あるな。

あー……あれってなんだっけ？　たしか……森の水筒だっけ？
あれは虫下しで……

前後を先輩方に挟まれた順番でざっくざっく突き進む。
暇で仕方がない俺は周りを観察しながら、食べれるものを目で追っていた。食糧調達の名目ではなので、とったら叱責されるだろう

と思い、目で追うだけに留めていた。俺の後ろに配置された坊ちゃんの熱い視線を受けながら。

これ、超常現象（クロクロ）の方がましだ。背中にザスザス刺さって痛いのなんのって。周囲の目が減ったせいか威力が強くなっちゃってるよ。

先輩方は前後左右に、俺は散漫に、坊ちゃんは一点集中。

……だれか気付いて、この子のガン見、痛いんです。もうかれこれ三時間。俺くじけそうです。

？――――？

ふと、俺はざわめきを感じた。

「パージェス、どうした」

俺は足を止めてしまっていたらしく、後ろに居た三年の先輩に問われてハタと気付いた。

「あ……いえ。申し訳ありません」

なんだかよく分からないが、気になるざわめきだった。言葉にはならない、音にもならない、変なざわめき。

説明出来るようなものではないので、謝罪し再び足を動かし――

？――？

？――――――？

？――――？

先ほどよりも強く、ざわめきを感じた。ついでに首筋がぞわりと逆立つような異様な感覚まで追加されて。

迷ったが、俺は班長に声を掛けた。

「班長」

生真面目な班長の兄ちゃんは、やはり生真面目に足を止め、前方に注意しながらこちらを見た。

おお。班単位の行動になると注意は怠らないのか。すごいな。と、感心している場合ではない。

「この先、行かなければなりませんか？」

兄ちゃんは俺の言葉に眉を潜めた。

「どういう意味だパージェス」

「確か、索敵の術がありましたよね？　それを使いませんか？」

索敵と格好いい名前はついているが、実際は熱源反応を調べるようなもので、術者の熟練度に大きく左右される代物だったと思う。熟達したものであれば、かなりの範囲を調べる事が出来、さらに個体の大きさまで判別する事が出来るとあるが、ここにいる学生では何か居るかいないか調べられる程度だろう。

「何かいるのか？」

三年の先輩も尋ねてくるが、どう答えていいかも整理出来ていない。説得力にかける、何となくという表現しか使う事が出来なかった。

「申し訳ありません。感覚的なものです」

それでも、俺は何もしないよりはましだと思った。

ママンだとか小動物だとかだったら気にもしないが、これはたぶん、違う。そういう類じゃない。

班長は他の、食糧調達担当だった先輩方と視線を交わし、頷いた。

「陣を。索敵を開始する」

その言葉に俺はホッとした。その時、

「サジェス！」

突然、坊ちゃんが走り出していた。

一拍俺は反応が遅れ、それから慌てて後を追った。

「待てパージェス！　お前は残れ！」

さらに俺の後ろから班長の兄ちゃんが追っかけてきたが、その言葉は素直に聞けなかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7786v/

災厄の種と能天気な転生者

2011年10月12日08時05分発行